嚥み込まれるまで之を告白し奉らんと思ひ焦れたのだ。而も私は自分の體力心力を休養し、又は私が人に負ふ所、即ち負ふにあらねど而もなほ拂ふその奉仕の必要より遑を與へられて見出すその時間、之を私は何等他の事に過し去ることを欲しないのであつた。

主なる私の神よ、私の祈りに聖耳を借して、爾の御慈悲ぞ私の願に聽きたまへ。これ惟り私自身のためのみでない、同胞兄弟に竭す愛のためであるからだ。そして私の心の斯くあること、それを爾はみそなはすので、私は私の想と舌との奉仕を爾に獻げんと欲するのだ。願くは私がさゝげ得るためにそれを私に與へ給へ。そは「私は貧しくまた乏しくあるに、爾は爾に呼び求むるすべてのものに富み給ふ、又爾は安らかなるに私共のために心を勞し給ふ」のだ。願くは私の內なると外なるとの唇に共に割禮して、すべての輕率とすべての虛言とより淨めたまへ、爾の聖書をして私の純なる樂みであつて、私をして之にあつて欺かれず、また之より欺くことながらせたまへ。主よ、私の神よ、願くは聽いて憐みたまへ、爾は盲なものの光であり、また弱き者の力であり給ふのだ。然り、また見るものの光であり、また强きものの力であり給ふのだ、私の靈に御耳を傾けて、それが「深みの中より呼ぶ」のを聽きたまへ、そはもしも深みの中にも爾の御耳私共と共にあるでなくて、どこへ私共は行かうとする、どこへ呼ばうとする。「晝も爾のもの、夜も爾のもの」であつて、爾の頷きで瞬間々々飛去るのである。で、爾の律法の隱れた事に私共默思を凝さうとする、願くはその餘地を私共に許し、そし

て敲いて求むる私共にそれを鎖すをし給ふな。そは爾がその多くの場所を隱微な難解もつて書き傳へ給ひしも、決して徒事ではないのであらう。而も此の奥深い森にも、その中に退いて駈け廻り歩き廻り、食を取つては横臥し、そして靜かに反芻する男鹿たちゐないでもないのである。主よ、私を全くし、そして私にそれを啓示し給へ。見よ、爾のみ聲は私の歡喜であり、爾のみ聲は快樂あり餘つた事にもまさるのだ。願くは私の愛すること之を與へたまへ、私は愛する故である、そして之を爾は與へ給うたのだ、爾の御自身の賜物ぞ、之を見捨て給ふな、否、水に渴く綠の小草を輕蔑し給ふな。私は爾の聖書に於て見出すこと、それが何であれ爾に告白し、そして「感謝の聲」を聞きて、また爾に飲み耽り、爾の律法より驚異の事どもを捉へて默思しまほしや、爾が「天と地とを造り」ましたるその「最初」より爾と共に爾の聖なる國を永久に治すまでである。

「主よ、私をあはれみて私の願を聽きたまへ」。そはその願は是れ私は考へる、此の地に屬るものでない、金や銀や寶石でもない、華やかな着物でもない、名譽や權力でもないのだ、または肉の慾でも、或は體やその他此の私共の旅なる生涯に屬するその必需でもないからだ。「此等はみな爾の御國とその義とを求むる私共に付加へられるのだ。見よ、主なる私の神よ、どこに私の國はあるだらう。悪者は私に種々の快樂を告げた。けれど、主よ、爾の律法の如きは告げた事ないのだ。そして、見よ、そこに私の願はあるのである。見よ、父よ、見よ、そしてみそなはし、そして嘉したまへ、そして爾

の御言の内的部分が私に敲いて開かれるやう、爾のみまへで私が聖寵見出し得んために、爾の御慈悲にかけて御旨に叶へよや、私は私共の主なるイエス・キリストに依て願ひ奉る。然り、彼は是れ爾の御子であり、「爾の右の手の人」で、人の子で、爾と及び私共との仲介とし、爾が已れのために定め給うたものである。そして彼に依て私共爾を探しもせざるに爾は私共を探し給うた、然り、私を探し給うた、私共が爾を探しまうらんためであつた。また彼は爾の御言であり、それに由て爾はすべてのものを造り、また人の中に私をも造りたのであり給ふ。まこと彼は爾の唯一の生みの子で、彼に由て爾は信ずる人々を亦爾の子とせんために呼びたまふのだ、そして中に亦私もあるのである。然り、彼は「爾の右の手にいまして私共のために執成し給ふ」ので、彼に「智慧と知識とのすべての寶かくれてある」のである。即ちその彼に由て爾に私は求めまつる、そしてそのかくれた寶、それを私は爾の聖書の中に求めるのだ。彼に就て摩西は錄した、之を彼自ら言うて居る、之を眞理も語つて居る。

第三章

天と地との創造に就て

如何に「元始に爾は天と地とをつくり給へり」や、私は聽いて理會したいのだ。モーセは之を錄し

た、錄してそして去つて了つた。彼は爾より爾へと此の世を過去つて、今は私の前に居ない、そは若し居るならば、私は彼をつかめて問ひたづね、爾に依て此等の事を私に說明かせと彼に乞ひ、そして彼の口より迸出するその聲音に私の體の耳を傾けるであるだらう。併し彼がもしヘブルで語るとしたなら、それは空く私の聽官を打つのみ、私の心に何等觸れぬだらう、さはなくて若しラテンであるならば何を彼の語るか私は知るだらう。只彼が果して眞理を語るか、どこからそれを知るだらう。然り、私の中に、中に、私の思想の室の中に、即ちヘブルでも、ギリシヤでも、拉典でも、乃至いづれの國語でも、その他、聲や舌や、或は音のあやつりの何等に由らぬ眞理あつて、それは眞理であると言ふだらう、そして私も直ちにあの爾の人に信じて、そなたは眞事語るのだと云ふだらう。けれ共今は私は彼に尋ねるに由ない。それで、眞理にましますものよ、彼が充たされて以て眞理を語つたその爾に、爾に、私の神よ、私は願ひまつる、私は願ひまつる、私の罪を赦し給へ、そして爾の僕の彼に此等の事を語るを許し給うたその爾ぞ、私に此等の事を理會するを許し給へ。

第四章

天地萬物皆その造主を言明する

見よ、天とは在る、そして彼等が造られたことを呼びさけぶ。彼等は變化轉變するからだ。然るに造られたでなく而もあるものなら、それは何であれ、それに以前なかつたもの何等その中にある筈ない、即ち變化轉變することである。で、彼等は又已れ自ら造つたでないと言明する、「私共は造られたのだ、だから私共はあるのだ。故に私共はある以前にあつて、そして自分を造つた如きないのである」と。而も之を語る者の聲そのものそれが證據である。故に、主よ、爾は彼等を造りましたのだ。して彼等は美しくある、故に爾は美しくありますのだ、又彼等は善である、故に爾は善でありますのだ。即ち彼等がある、故に爾はありますのだ。けれ共爾は彼等の造り主でありまして、その爾のある如くに、彼等は美くもない、善でもない、又あるのでない。之を私は知る、感謝爾にあれ、して私共の知識も爾の知識にくらべまつりては、畢竟無知であるのである。

第五章

創造の神祕

然もどうして爾は天と地とを造りましたらう。斯やうな偉大な爾の御業の機械は何である。そは是れ誰かの人間技工者の所爲とは異り、その場合彼はその心の分別に從ひ、その内的なる眼に由てそれ

自身に何かの形を見、之を何かの仕方で付與して、物から物を作るのである、而もその心は爾が之を造りましたのでなくて、どこから彼はそれをする事できるだらう。而も彼は只或は土、或は石、或は木、或は金、或はその如きものとして既に存在するそれに或る形を付與するのみ。それも若し爾が彼等をさうさせたのでなくて、どこから彼等はあり得やう、爾が技工者にその肉體を造りましたのだ、その肢體を命令する心をも造りましたのだ、彼がまた何かを製し出すその材料を爾は造りましたのだ、そして爾がまた彼を技術者とならせて、そして彼が外になすこと之を内に見る才能を與へましたのだ。また爾が彼の體の官能を造りましたので、それに由て恰も通譯者に由ての如く、彼は心より物質に彼が爲す所の事を傳達して、そしてそのなされた事を報告する、それが内的に自分を統治する眞理に對し、果して好くなされたりやと諮り得んためである。げにや萬物の造り主よ、此等が皆爾を讃美する、されどどうして爾は此等を造りますや、どうして、神よ、爾は「天と地と」を造りましたらう。天にても地にても爾は「天と地と」を造りまさぬ、また空中にても水中にてもである、此等また「天と地と」に屬するのであるからだ。さりとて亦全世界にあつても全世界を造りましたのでない、それが造られない以前には、それが存在するため造られる、その場所がないからだ。否、爾が「天と地と」を造り給ふに、爾の御手に何等の道具もありまさなかつたのだ、そは何を造り給ふにしても、爾が造りまさなかつたもの、それをどこから得給うたらう、皆只爾がありますでなくして何があるだら

う。それ故に爾は「言ひ給うたそして成りた」、また「御言もつて爾は彼等を造りましたのだ」。

第六章

如何なる御言もつて神は世を造り給うたか

けれ共、どうして爾は物言ひ給うたらう、雲より聲ありて「之はわが愛む子なり」と云つた如くであつたらうか。そはその聲は事遂げて過去つて了ひ、始めなり終りあつた、一音一音響いて過去り、第二音は第一音に接し、第三音また第二音に接して相順序し、終りに最後の音が他を皆結んで、そして後は靜默に歸りたのだ。即ち之に由てもその聲を表示したるは、是れ造られたものの動きであつて、それが元來時間的であり、爾の永遠なる御旨に奉仕するのであること明瞭で最も見易くある。そして此等の爾の御言はその當坐に造られて、之を外部の耳が爾の永遠の御言にその內的の耳を傾ける理智ある靈に報道したのだ。けれ共靈はその當坐に響く此等の言を以て爾の靜默せる永遠の御言と比較し、そして言うた「之は違つてる、ほんとに違つてる、此等の言は遙かに私以下である、また最早ないのだ、彼等は飛去つて消えて了つたからだ。なれ共私の神の御言は永遠に涉るのだ」と。で、若し響いて過去る言を以て爾が「天と地とを造られよ」と言ひ、そして「天と地とを造り給うた」な

ら、是れ「天と地と」の以前に既に形的の造られた物あつたので、その時間的に働いたのだらう。けれ共「天と地と」の以前には何等形的なものなかつたのだ。もしあつたなら必ず爾はかやうな過去る聲なくして「天と地とあれ」と言はんとするその過去る聲を造つたそのものを造りましたのであるだらう。そはかやうな聲の以て造られたそれが何であつたにせよ、それが爾に由て造られたのでなくては、全然あつた筈なかつたからだ。然らば如何なる御言もつて爾は語りたまひ、そして此等の御言の更に造られ得んために、何かの形のものが造られたであつたらう。

第七章

神の御子はその父と共に永遠なる言である

で、爾は私共を呼んで、言（ことば）、即ち神、即ち爾と共にいます神を理會せしめんとし給ふのだ。然り、その言是れ永遠に語られるのであつて、またそれに由てすべてのもの永遠に語られるのである、そは語られた所の事、それは一事が終つてその次また語られるが如く、相接續して語られたのではなく、而もすべての事が一緒にまた永遠に語られたのであるからだ。若しさうでなければ、私共には時間と變化とがある、そして眞の永遠と其の不死とはないのである。之を、私の神よ、私は知つて感謝しま

つるのだ、主よ、私は知つて爾に告白しまつるのだ、そして確かな眞理に感謝しないでないもの誰も皆私と共に知つて爾を祝しまつるのだ。主よ、私共は知るのである、然り、知るのである、物それは何であれ、前にあつて今ないもの、または今あつて前になかつたものありとする、是れ死したりまた生じたりするのである。然るに爾の御言は決して新陳代謝することない、眞に不朽であつて、また永遠であるからだ。そしてその故にその爾と共に永遠なる御言に、爾は一度にまた永遠に爾の言ひますことすべてを言ひ給ひ、そして爾が造られよと言ひます事、それは何でも造られるのである、又爾は言ひ給ふでなくして外には造りますことない、而も爾が言うて造りますすべてのもの、皆一度に造られるのでない、また永遠にあるのでないのである。

第八章

神の御言是れ私共に眞理を敎へる唯一の師である

何故だらう、私は訊ねまつる、主なる私の神よ、私には何やら見えるのである、けれどどうしてそれを言表すべき知らないのだ、只何でもあり始まつてそしてあり已まつて行くもの、是れ爾の永遠なる理性に於てあり始まり或はあり已まらねばならぬと知られた時、即ちあり始まり、又あり已まるのではないかしら。而もその時に於ても爾の理性は決して始まることも已まることもないのである。して之が爾の御言であつて、それがまた「太始(はじめ)である、私共にそれがまた語ります故である」。斯く福音(みかみ)に於て彼は肉に由て語りたまうた、そして之は外的に人の耳に響いた、それが内的に信じられ又求められ、そして永遠なる眞理にあつて見出されんためで、そこに即ち善なるまた唯一の師がすべてのその弟子たちを敎へますのである、してそこに、主よ、私は爾の御聲が私に語るのを聽きまつる、私共に敎へるその「彼」が私共に語りますのであるからだ。けれ共私共に敎へまさぬその「彼」は假令語りますも、私共には語りまさないのだ、では不變の眞理でなくて誰が私共を敎へるだらう。そは私共が變るべき被造のものに由て警告された時でさへ、私共は只不變な眞理に導かれ、そこで抑ゝ自分の本元のその「彼」に私共を連戻す「その花婿の聲の故に立ちて彼に聽き、そして大に悅ぶのだ」、してその時即ち私共眞に學ぶのである。そしてその故に「太初(はじめ)」である、然り、それが恆久不變にあればこそ、さもなくば私共が迷つて行つて了ふ時、私共の歸る所ないだらう。されど私共が迷ひより歸る時は、私共が歸ると云ふこと知つてに由てで、また彼は「太初」であり、そして私に語りましてるから、彼は私共に敎へますのであること、之を私共の知り得んためである。

第九章

如何なる仕方で神の御言私共の心に語られるか

この「太初」に於て、神よ、爾は「天と地とを造り給うた」、然り、爾の御言もつて、爾の御子もつて、爾の能力もつて、爾の智慧もつて、爾の眞理もつて、不思議な仕方で語りまし、また不思議な仕方で造りましてである。誰が悟り得るだらう、誰が語り得るだらう、此の私の中に照り渡り、又は私の胸を打つて而も之を害はず、そして私の戰きまた燃立つもの、それは何だらう。私はをののくのだ、私がそれに似も付かぬ所に於てである。また私は燃立つのだ。それにあやかる所に於てである、そしてそれは即ち御智慧である、御智慧そのもので、私を懲すがため、叢がり掛る暗黑に私の氣も沈むに拘はらない、その私をなほ覆ひ包む雲霧を割つて、そして私の中に照り渡るのだ。そは私の力は衰へて缺乏し、私は自分の惠賜を支え得ぬほどなるに、主よ、爾は「私のすべての不義をゆるして、またすべての疾をいやし給ふのだ」。また爾は「私の生命を腐敗より救ひ出し、なさけと憐憫ともつて私に冠らせ、善きこともつて私の願ひを滿足させますだらう、私の青年鷲の如くに復力付けられるであらうからだ」。そは「私共は望みに於て救はれる」その故に、「私共忍耐もつて爾の約束を待つの

である」。誰でもできる者爾が靈的に語ります事之を聽けよかし、私は確信して爾の御託の中より叫ぶだらう。「主よ、爾の御業の如何に大なる、そして御智慧をもつてすべて造りましたのだ」と。而も此の御智慧は太初である、そしてその太初に於て爾は「天と地とを造りました」のである。

第十章

天地の創造以前神は何を爲し居たるやと問ふものに就て

見よ、或は私共に言うて、神がまだ天地を造らぬ時、彼は何を爲しゐ給ひたると問ふものある。彼等はその舊きパン種もつて充たされてるのでないかしら。そは彼等は言ふのだ、「若も彼が仕事なくして働かずゐたのなら、なぜ今までしてゐた如く此から先もまた永久にさうしないのだらう、これ若し神に何かの新たな運動とそして今まで造つたことない何かのものを造らうとの意志の起つたとする、するとどうしてそれが眞の永遠的と云はれやう、今までなかつた一の意志が起るのであるからだ。是れ神の意志は被造物ではない、只その被造物に先立つのみである、造り主の意志が先立つてないならば、何等造られることあり得ないからである。だから神の意志とは是れ彼のその本體に屬する

のである、そして若し何か以前になかつたもの神の本體に起り來つたなら、その本體は眞に永遠だと呼ばれることできない。けれど若しその被造物があらねばならぬとそれが永遠よりの神の意志であつたなら、なぜその被造物また永遠よりではなかつたらう」と。

第十一章

神の永遠とは時間を以て計られべきでない

斯く語る人是れ神の御智慧であり、靈の光であります爾をまだ理解しないのだ、然り、如何に爾に由て、また爾にあつて造られたるそのものの造られたか、それをまだ理解しないのだ。而も彼等は永遠なるものを悟了しようと努力して、彼等の心はなほ過去なるものと未來のものとの動きの間に羽叩きし、そしてまだ不定であるのである。で、誰か之を押へて固定させ、暫時安止して、そしてその暫時常住固定な永遠の榮光を捉へ、之を固定決してない時間と比較し、そしてそれは全く比較されないものなること、また永い時間は永くされるのでない、只一緒にして引延ばされることできない多くの動きが續々過ぎ行くからである、けれど永遠にあつては何等過ぎ行くことない、そしてすべて過去つた時間は來らんとする時間に由て追立てられ、また來らんとする時間は過去つた時間の後に接し、そしてすべて過去つたものも來らんとするものも皆造られたので、常住現在であるそのものの中より流出るのであることを見させるだらう。誰か人の心を押へてそれを靜止させ、そして如何に永遠は靜止して過去ることない、來ることない、而も過去り又來らんとする時間を語るのであることを見出させるだらう。私の手之ができるだらうか、或は私の口の手が言語を以てそような大なる事を爲せるだらうか。

第十二章

創世以前に神の爲しゐたまうた事

見よ、「神は天地を造るまへ何を爲し居たまうたか」と問ふ者に私は答へるのだ。だが或は冗談含んで問題の急所を回避し、そして言ふものある、「彼はそんな神秘を探る者どもに地獄の仕度してゐたのだ」と。けれど私はさうは答はしないのだ。そは質義に答へると、その質義を愚にするとは各々別であるからだ。それで私は答へないのだ。あの幽玄な事訊ねる者が笑はれ、そして虚僞な事答へる者が稱められるやうな事をするよりも、むしろ私は知らぬ事それを知らぬと答へたいからだ。されど、私共の神よ、私は爾に告げまつる、爾はすべてのものの造り主でましますのだ、そして若し「天と地と」の名に由てすべての被造物皆理解されるのなら、私は臆せず言ふ、神は「天と地と」を造る

まで何も造ることし給はなかつたと。そは若し彼が造りましたなら、それは何かの被造物でなくして何を造りましたらう。で、何であれ、私の知つて益するため私の知りたいと願ふこと、それは只神は何かの物を造り給ひし以前には、何等の物造り給ひしことなかつたと云ふこと、それであれかしや。

第十三章

時間が神より造られた以前には時間は何等なかつたのである

されど若し誰か飛翔的思念の者あつて、時間以前の時間にその想像を冲せしめ、そして全能で、すべての創造者、すべての支持者であり、また天地の作爲者なる神なる爾が、無數の時代間苟くも斯やうな大なる仕事を造らうと思召したその以前、それを手控へ居給うたその事を訝るなら、却て彼は目醒めて自省し、そして自分の虚僞なる迷想に驚愕するだらう。そは爾はすべての時代の創作者で、又造り主であり給ふ、だから爾がどうして爾の造りまさなかつた無數の時代を過去らせ給うたらう、或は爾に由て造られなかつた如何なる時間があり得たらう。なほ爾はすべての時間の造り主でありますと知つて、若し爾が天と地とを造りますその以前にも既に時間があつたとするならば、なぜ彼等は爾が働くことを手控へゐたと云ふだらう。なぜならその時間と云ふも是れ爾の造りましたので、また爾が

その時間を造らぬまでは、時間が過去ることない筈だからだ。けれど若し「天と地と」の以前、時間は何等なかつたなら、なぜ何をその時爾がなしましたと問はれるや、是れ時間なかつた時には、「その時」と云へるも何等なかつたからである。

また爾は時間を以て先立たせることをし給はない、さもなくば爾はすべての時間に先立ちますことあり得なかつたらう。けれ共爾はその絶えず現在なる永遠の莊嚴もつて、すべての過去なる事に先立ち、またすべての未來を超越し給ふのだ、未來もそれが來た時は過去となるからである。されど「爾はいつも同じで、また爾の齡はをはることないのである」、年光爾には來もしない、去りもしない、されど私共には來て去つて行く、すべてが來らんためである。然り、年光爾には皆一緒になつて停止して居るのだ、皆停止して居るからだ。また後から續く年光に押出されて去行くことないのである。一切去行くことないからだ。只私共にはすべてが來るのであつて、また皆去つて了ふだらう、而も爾にはすべての年光只一日である、そして爾の日に毎日といふことない、只今日あるのみ、爾のけふは明日に移ることなく、共に昨日に代りもしないからだ。即ち爾のけふは永遠であつて、そこで爾は自分の共同永遠者を生み給ひ、之に「此の日我汝を生めり」と言ひたまうたのだ。爾はすべてのものを造りたまうた、そしてすべての時間に爾はいましたのだ、または如何なる時間の中にも時間はなかつたのだ。

第十四章

時間にある三つの差異

時間なかつた時には、爾は何物をも造りまさなかつた。時間そのもの爾の造りましたのであるからだ。そして如何なる時間も爾と共に永遠であるものない、爾は永存しますからだ。されど若し時間が永存したならば、それは時間ではなかつたらう。然らば時間とは何である、誰か之を容易に又簡單に説明し得るだらうか、誰か一語なりとも之に就て言へるほど、その考へになりと悟り得たがあるだらうか。而も談話に於て私共が言葉に上すもの、この時間と云ふことよりもつと普通でまた知つたらしきがあるだらうか。之を語る時には私共好く理會する、また他人が之を語るを聽く時にも理會するのである。然らば時間とは何である。若も誰もが問はないなら私は知つて居る、けれ共若し誰か問ふものあつて之に説明しようと思うと、私は知らないのだ。而も私は大膽に言ふ、私は知るのだ。卽ち若し何事も過去つたでないなら、過去の時間はないのである。もしまた何事も來るでないなら、未來の時間はないのである。尙又もし何事も現在するでないなら、現在の時間はないのである。然らば此等二つの時間の過去と未來と抑もどうしたらう、過去は今はないので、未來はまだ來ないのだと見るか

らだ。只現在はもしそれがいつでも現在であつて、決して過去の時間に過去るでないならば、ほんとにそれは時間でなくて、卽ち永遠であるのである。故にもし現在が、それが時間であるとして只過去となるのだからこそ存在するのなら、此は在るのだとどうして私共言ひ得やう、その存在の理由はこれそれが存在しなくなるだらうと云ふにあるからだ。で、換言すれば、私共は眞實に時間は存在すると云ひ得ない、只それが存在しなくなるやうして居るからだ。

第十五章

時間の計量何にあるのだらう

なほ私共は長い時間とか、又は短い時間とか言ふ、それも只過去と未來との時間に就てのみである。例へば過去の長い時間を辿つては、私共百年このかたと呼び、又は以後百年は永い未來の時間と呼ぶのだ。けれ共假りに十日このかたと呼べば、短い過去の時間で、以後十日と呼べば短い未來の時間である。けれ共現在ないもの、それが如何なる意味で長くあり短くあるのであるか。そは過去は今はないので、そして未來はまだないのである。だから私共「それは永い」と云はず、而も過去に就ては「永かつた」、又未來に就ては「永いだらう」と云ふべきだ。私の主よ、私の光よ、玆にまた爾の

眞理は人間を晒ふのでないかしら。そは永かつたその過去の時間は、それが今や過去つた時に永いのであつたか、或はそれがまだ私現在である時に永いのであつたか。そはその時は何か永くあり得る事がある時で、それが永くもあり得るだらうからだ。けれ共過去つた時はもはやそれはないのである、どうして全然ない時にそれが永くあり得よう。然らば私共「過去の時間は永かつた」とは言はぬだらう、過去つて了つてはそれはもはやないので、その永かつたとするもの、それを私共見出すことないだらうからだ。けれ共私共は云はう、「現在の時間は永かつた」と、それが現在であつた時永かつたからだ。そはそれがあり已むべくまだ過去つて了はなかつたからで、その故に永くあり得たものがあつたのだ。そしてそれが過去つては、あることと已まつた事、それはまた永くあることも已まつたのである。

然らば、なんぢ人の靈よ、果して現在の時間が永くあり得ようか、私共考へよう。そは時間の永さを感じて之を計ること、之が汝に與へられてあるからだ。で、何を汝は私に答へるだらう。百年、それが現在である時永い時間であらうか、まづ第一に百年果して現在であることできようか。そは若も此等の年數の第一年が動いて居るならば、そのもの是れ現在で、他の九十九年は未來であつて、その故にまだ存在しないのだ。けれ共若し第二年が動いてゐるならば、一は既に過去つて、他は現在であり、剩餘は來らうとしてゐるのだ。そしてその如く此の百年のどれかの中間を取つて現在と假定す

る、するとすべてその以前は過去であり、その以後は未來である。故を以て百年そのまま現在であり得ないのだ。併し見よ、少くともその今動いてるその一年もそのものそれが果して現在だらうか。それは若もその動いてる月が第一月であるなら、他は未來であつて、もし第二月なら、第一は既に過去つて、他はまだないのだ。故に今動いてる一年とてそれが現在ではない、そして若し全部として現在でないなら、その一年即ち現在でないのである。そは十二ヶ月一年であつて、その中動いてる月が現在なのだ、そして他は過去か又は未來である。なほその動いてる月とて現在ではなく、只一日のみであつて、それが若し第一日なら、他は未來であり、もし最後の日なら、他は過去であり、もし中間のどれかなら、即ち過去と未來との間であるのだ。

見よ、私が見出して唯一永いと呼び得るその現在が、如何に纔か一日のながさに短縮されたかを。けれ共私共尙それさへも考究して見たい、その一日とて全部現在でないからだ。そはそれも晝夜二十四時間から成つて居て、その中第一時は他の未來を前に控へ、最後のものは他の過去を後に胎して居るので、その中間にあつて、どれも過去と未來との間にあるのである。而もその一時間も飛び行く分秒となつて過去り、そしてその去つたものは過去であり、殘つて居るのは未來である。して若しもうこの上分割できないとする最極微分の瞬間時が考へられるとするならば、それが唯一の現在と呼ばれるのであらう。けれ共それとて非常な速力もつて、未來より過去へと飛び行き、最微の停止さへさせ

て延長させられないのである。そして若しそれがされるなら、また過去と未來とに割られるので、畢竟現在にはその餘地ないのである。然らば私共が永いと呼び得る時間はどこにある、それは未來であるのか、併しそれを私共「永い」とは云はない、まだ「永い」と云はれるまでに存在しないのだからだ。只私共は「永いだらう」と云ふのみである。それならいつ存在するだらう、そはその時さへまだ未來にあるのなら、それは永くはないだらう、まだ存在しないのに、何が永くあり得やうからだ。されどそれがまだ存在しない未來より今や存在し始めてそして現在になつた時、そこでそれが永くあるのだらう、斯くして永くあり得るそのものが存在することになるためで、そこでまた現在と云ふ時間が上記の言を以て、それは永くあることできぬと叫ぶのである。

第十六章

過去と未來と時間をどうして計るべき

而も、主よ、私共はなほ時間の間隔を察て相比較し、そしてこれは永い、あれは短いと云ふのだ。又は私共はどれほど此の時間はあの時間より永い或は短いと計量し、そしてこれは二倍だ或は三倍だ、又はあれは殆ど相侔しとか答へるのだ。けれ共私共は時間を只過行く所で察て計量するのみ、而

も過去はもうないのだ。或は未來はまだないのだ、そのないものを計れると言張る人あるならいざ知らず、どうしてそれが計られやう、だから時間は過行きつつある時にこそ察て計られるのだ、過去つて了つてはできる筈ない、それが存在しないからだ。

第十七章

過去と未來との時間はどこにある

父よ、私は問ひまつる、而も肯定しないのだ。私の神よ、私を統べ また治めたまへ。「私共は子供の時に學んだ、また子供たちに敎へたが、その如く、誰か私に過去と現在と未來との三つの時間があるのでない、只現在あるのみ、その二つはないのであるからだと告げるだらう、或は彼等も亦あるので、そしてそれが未來より現在になる時に、何かの隱れた場所より來るのであり、またさうしてその退去するや、現在より過去となるのであるか。そは未來の事を豫言するあの彼等は、それがまだないのに、どこで彼等はそれを見たのだらう。まだ存在しない事、それは見られる筈ないからだ。また過去の事を語るその彼等も、それを心で見たのでないなら語ることができない筈だ、また若も存在しないのなら、彼等決して視られる筈がない。それだから過去の事も未來の事もあるのである。

第十八章

どうして過去と未來との事が現在となるのだらう

主よ、私に許して更に考究せさせ給へ、私の希望よ、私の所思を頓挫させますな。そは若し過去と未來との時間があるのなら、それがどこにあるのだらう、私は知りたいのだ。而もそれがもしできないとしても、尙私は知るのだ、どこにそれがあるにせよ、それは未來或は過去としてあるのでなく、只現在としてのみだと。そはもしそれが未來であるならば、まだそこにないので、もし又過去であるならば、そこにもはやないのである。だからどこにどんなものあらうとも、あるとは只現在としてのみなのだ。で、過去の事實が語られる時でも、過去である事々そのものでなく、それが過去る途中にその痕跡を感覺を經由して心に留め行き、即ちその痕跡の影像に依りて工夫された言辭を、記憶から曳出されるのである。それで例へば私の少年時代であつて、それは今はなくして過去の時間の中にある。而もその過去は今ないのである、けれ共今私がその影像を回想し、そしてそれを語る時、私は現在で見るので、それがなほ私の記憶に現存するからだ。只未來の事を豫言するも、亦同じ理由で、即ちまだ存在しない事の影像が既に存在してゐて、之を前もつて察し得ると云ふこと、それが果してあ

るのであるか、私の神よ、私は告白しまつる、私は知らないのだ。併し之を私は知つてゐる、即ち私共は一般に豫め未來の事に就て考へる、そして此の前もつての考慮は現在である。けれ共その私共の豫考する行動はまだ存在しないのだ、未來であるからだ。只それに私共が着手して、その豫考してゐた事を仕始めたなら、その時その行爲はあるのだらう、その時もはや未來でなくして、而も現在であるからだ。

此の未來を豫視する不思議な事が如何なる仕方に依らば依れ、見るとは是れ現在あることでなければできない筈である。だから、未來の事が見られると言はれる時は、まだあるのでない、即ちあるべき事そのものでなく、多分はその事既に存在する原因或は象徵が見られるのである。故を以てそれを見るその人々には、それは未來でなくて現在であり、それに由て未來がその心の中に豫め描出され、そして豫言されるのだ、してその事前の心描がまた今は現在となり、それらの事を豫言するその人たちは、已れのまへに現はれるその心描を見るのである。で、種々の事ある中に今一例を擧げて見よう、私は曙光の射すを見てやがて太陽の昇るのを豫示する、即ち私の見るのは現在なのだが、私の豫示することは未來であつて、既にあるその太陽でなく、まだない日の出である。併しもし私が今現にかう語つてる間にてもの如く、その日の出そのものを私の心に想像したでないならば、私はそれを豫告することできなかつた。けれど私が空に見る所の曙光は、成程それが前驅をぞすれ、日の出ではな

く、又は私のその想像がそれでもない、而も此の二つが現在に見られて、それで他の未來の事が豫告され得るのだ。だから未來の事はまだないのだ、そして若しまだ來ないのなら、即ち存在しないのだ、そして存在しないなら見られることもできないのだ。而もそれは既にある、又は見られる所の現在の事に由て豫告され得るのである。

第十九章

未來を先見する事に就て

然らば、爾の造りました天地を統べます者よ、爾は如何なる仕方もつて人の靈に未來の事を敎へますや、そは爾は曾て預言者たちを敎へ給うたのだ、爾には何事も未來であることない、その爾は如何なる仕方もつて未來の事を敎へ給うや、或はむしろ未來に就て現在なる事敎へ給ふのか、そはない事それは敎へられないからだ、して之は全く私が知るに力及ばぬ所である。「かゝる知識はいと大にしてわれに過ぐ」である。けれ共爾がもし私に許したまふならば、爾より出でて私はできるのだ、私の隱れた眼の甘美なる光よ。

第二十章

何故に時間の差別の名を立てるや

今や判然明白なは、是れ未來の事と過去の事と、それはないと云ふのが然るべきで、又過去と現在と未來と三つの時間あると云ふのも恐らく當を得てゐない、むしろ時間は即ち過去の事の現在と、現在の事の現在と、及び未來の事の現在と、この三つであつて、此等の三つがどう云ふ狀にてか靈の中に存在するのだ。即ち過去の事の現在は記憶であり、現在の事の現在は目擊で、また未來の事の現在は期待である。で、もし斯う云うて許されるなら、私の三つの時間を見てまた三つのあるのだと告白する。また間違つた仕方で斯うも云へ、過去と現在と未來とあるのだと、若しさう云はれた事が、未來である事それはないので、あるは今で、過去の事もないのであると理解されるなら、見よ私は否みもしない、抗言もしない、また非難もしないのだ。そは殆ど物事皆、之を正當に言ふことないもので、多くは正當を失つてる、けれ共思つた事は理解されて居るのであるからだ。

第二十一章

私は今も言つたのだ、私共は時間をその過行く所で、この時間はあれに恰も二倍だとか、或はこれはあれと殆ど同じとか云つて、その他のどの時間の部分でも計り得るもの之を計量する。だから私も言つた如く、私共は時間をその過行く所で計るのだ、そしてもし誰かが私に「どうしておまへはそれを知るか」と問ふならば、私は答へやう、「私は計ると云ふことと知つてゐる、けれど存在しない事は計れない、そして過ぎた事と來るべき事と、それは存在しないのである」と。けれ共現在の時間も何等の長さあるのでない、それをどうして計るだらう、只過行く所で計られるので、それが過去つて了べば計られない、計られべきもの何等ないであらうからだ。而もどこからどうして又どこへ、それが計られてる間も過行くだらう。「どこから」と、即ち未來よりでなくてどこよりだらう。また「どうして」と、即ち現在を通つてでなくてどうしよう。又「どこへ」と、即ち過去へでなくてどこへだらう。その故にまだ存在しないそのものから、何等の長さない現在を通つて、そして今存在しない過去へ行くのである。けれど若し時間が何等かの長さにあるでなくて、何を私共計量しよう、そは私共が時間を語るに丁度だとか、二倍だとか、或は三倍だとか、その他此の類の仕方で云ふのだが、皆是れ時間の長さに就てでなくば云はないのだ。然らば何の長さの中に於て過行く時間を計るのであるか、それが通つて來た未來に於てであるか。けれ共まだない所の事は私共は計らない、或はそれが通過す

る現在にてか。けれ共何等の長さのないものを私共は計らない。或はそれが行つて了ふ過去に於てでか。けれ共今存在しないもの、それを私共はまた計ることをしないのだ。

第二十二章

その謎の解釋を神に祈る

私の靈は此の最も錯綜した謎を知らうと燃えて居る。之を鎖したまふな、主なる私の神よ、善なる父よ、私は基督に由て祈り奉る。此等の普通な而も隱れた事、之を私の願ひより鎖し給ふな、彼等の中に突入することを妨止されないためで、また爾の光の御慈悲に由り、彼等に曙光の明渡らんためである、で、誰に此等に就て尋ねやう、また爾に向ひまつるより外誰に私の無知を告白してもつと効益あるだらう。是れ爾の聖書に對する私の研究心斯く烈しく燃立つも、之が爾に煩累であり給はぬ故である。願くば私の愛すること、之を私に與へ給へ。私は愛する、そしてそれを私に與へ給うた故である。父よ、與へ給へ、爾は眞に爾の子らに善き賜物與ふるを知り給ふのだ。與へたまへ、私は知りたいと思ひ込んで爾がそれを披きたまふまで、惱みは私に取れないのだ、私は基督に由り、聖の聖なるその御名に於て爾に願ひ奉る、誰にも私を妨碍することなからせたまへ、そは私は信じてその故に言

ふのであるからだ。之は私の希望であり、これがために私は活きるのである、私が主の樂みを靜觀せんためである。見よ、「爾は私の束の間の日々を造り給うた」、そして彼等は過ぎて行く、而もどうしてか私は知らないのだ。然り、私共は時間時間と、或は單數或は複數で、之に就て語るのだ、「彼が之を言うて以來時間はどれほどぞ」、「之を爲して以來時間どれほどぞ」、「私がそれを見てこのかた時間どれほどぞ」、又は「この表音はあの短い表音に比べて時間倍である」と。此等の言辭を私共は口にする、そして此等を又耳にして、そして理會し理會されるのだ。まこと彼等は明白でまた通常な事である。而もその同一な事柄がまた全く幽玄で、之を發見するのが新しいのであるのである。

第二十三章

時間とは何である

私は曾て或る學者より日月星辰の運行が卽ち時間を成立させるのであると聽いて、而も之に首肯しなかつた。そはなぜすべての物體の運動むしろ皆時間でないだらうか。或はまこと若も天の光體が已まつて、陶物師の車が回轉し續けるとする、此等の回轉を私共が計量し、そして齊一して動いてるとか、或は若し時々その回轉が早かつたり遲かつたりするなら、卽ち或る回轉は大きく、或る回轉は短

いなどと言ひ得るため、矢張時間はそこにないのかしら。或は之を私共が言うてる間も矢張私共は時間の中で言うてるのではないかしら。或はもし私共の言辭の中で、或る表音は短く、或る表音は長いとするならば、卽ち是れその短いのは短い時間の中に、また長いのは長い時間の中で響いた故でないかしら。神よ、願くは人間に許して、小さい事の中にも大きい事小さい事に共同なる考慮の點を見さしめたまへ。で、天の星辰光明も皆また「天象(しるし)のため、時節(とき)のため、日のため、年のため」である。彼等はさうに相違ない、さりとて私は陶物師の木車の回轉が謂ゆる一日であるとは言はない、またかれ學者もそれがその故に時間でないとは言へぬだらう。

私はあの私共が以て物體の運動を計り、そして例へば此の運動はあれの長さの倍あるなどと云ふ、その時間の力と本質とを知らうと欲するのだ。そは私は尋ねる、一日とは只太陽が地上に滯留してゐる間を表はすのみでない、若しそれなら晝と夜と各々別となるのだが、さうでない、それが東より東へと戻る全周轉を云ふので、それに由て私共は幾日經つなどと云ひ、その幾日と云ふ時夜も含まれて、分離されては勘定されないことを見、卽ち一日とは太陽の運動、卽ちそれが東より東へ戻るその周轉に由て完全されるのだから、私は運動それのみが一日成すのであるか、或はその運動がそれで完成される滯留であるか、或はまたその二者を合せてであるかと尋ねるのだ。そは若し第一が一日であるならば、假に太陽が只一時間と云ふやうな僅かの間にその行路を終へるとしても、やはりそれは一日

であらう。若しまた第二であつて、一つの日の出と次の日の出との間に只一時間と云ふやうな短い滯留があるのみとする、それは一日をなさぬだらう、而も太陽は一日を完成するためにその二十四倍を行かねばならぬのだ。そして若し兩者であつて、太陽が只一時間の中にその全走路を一周することあらうとも、または太陽全く停止する間に、之が朝より朝までいつもその全行路を回轉する、その同じ程度の時間の經過することあらうとも、それは孰れも一日と呼ばれることできぬだらう。その所にその謂ゆる日とは何であるかと今私は問はぬだらう。只私共が以て太陽の周行を計り、そして若し十二時間とも云ふ時間で完成されるなら、それがいつもの半分時間で完成されたと言ひ、或は双方の時を比較して、此を單一時間、彼を二倍時間と呼び、隨分太陽は東より東へと或る時はその單一時間で又或る時はその二倍時間で、その常路を走ると考へて、即ち時間とは何であると問ふのみであらう。だから誰もをして天體の運動のみが時間を成立させるのだとは私に言はしむるな。なぜなら、隨分一人の祈りで彼がその戰鬪に大捷を仕遂げるまで、太陽も停止して了ひ、而も時間は尙進行したのであつたからだ。是れそれ自體に許容された時間の距離内に於て戰鬪は行はれそして終息されたのだ、だから時間を見て或る一定の廣がりであるとするのである。けれど私は果してそれを見るのであるか、或は見ると私に見えるのであるか。光明と眞理であります爾よ、私に示し給うだらう。

第二十四章

時間は物體の運動を計る量度である

若し誰かが時間を定義して物體の運動であると云ふならば、爾は私に首肯せよと命じ給うであるか。爾は私に命じ給はない。そは如何なる物體も時間の中にのみ動かされるとは、之を私は聽いて居る、之は爾が言ひ給ふのだ。けれ共物體の運動是れ時間であるとは私は聽いてない、爾は言ひ給はないのだ。そは或る物體が動かされるや、それが動き初めた時より最後に止まるまでどれほど掛つたかと、私は之を時間に由て計量する、そして若しいつからそれが始つたか私は見ず、またいつそれが已まるか私の見ないほど動き續くなら、私は只恐らく自分がそれを見始め又見終るまでの時間の外に、それを計ることとできないのだ。そして若し私が永く見て居るなら、私は只永い時間であるとのみ言明し得る。然しどれほどとは言ひ得ないのだ、是れ私がどれほどと言ふ時には、それは比較して言ふので、此はあれと同じ時間だとか、或はあれの倍の時間だとか、そのやうに言ふ如くである。然し私共がどこからどこまでその物體はその部分が動いたか、恰も何か旋盤にての如く動いたとして、その兩場所の距離を表記することとできるなら、その時私共は判然とその物體或はその部分の運動がここより

あすこへどれ程の時間で終了されたかと言ひ得るのだ。故を以て一物體の運動と及びそれに由て私共がそれがどれほど掛つたかとその時間を計量することとは、各別事であると知つて、誰かその二つの中の孰れがむしろその時間と呼ばれるものであるか、それを見ぬだらう。そは尙もし一つの物體が或る時は動かされ、或る時は立止つて居るとする、その時私共はその運動のみでなく、またその停止の狀態をも時間で計量し、そしてそれが動いてゐたと同じ時間停止したとか、或はそれが動いてゐた二倍或は三倍の時間停つてゐたとか、その他私共が計量して、或は確定し或は概定した長短に從ひ、いつもの如くに言ふのである。だから時間は物體の運動ではないのである。

第二十五章

神に祈つて己れの蒙を啓かんことを求む

そして、主よ、私は爾に告白しまつる、私はまだ時間とは何であるか知らないと。そしてまた、主よ、私は爾に告白しまつる、私は之を時間に於て語るので、また私は永い間を時間に就て語つたが、その長いと云ふその事長いのでなくして只時間の停滯に過ぎないのだ。然らば何が時間であるか、私はそれを知らないのに、どうしてそれを知つて居るか、或は怖らく私の知つてる事それをどう言表は

すべき、それを私の知らないのではないか。あな哀れ、私の知らぬと云ふこと、それさへ知らない私であるのだ。見よ、私の神よ、爾のみまへに私は僞らない、而も私の語るそのまま私の心である。「爾は私の燈火を點し給ふだらう、主なる神よ、爾は私の蒙を照し給ふだらう」。

第二十六章

どうして時間は計量されるか

私は時間を計るのだ、之を最も眞實に私の靈は爾に告白しまつらぬか。然り、私は計りて、私の神よ、そして私の計ることを知らないのか。私は時間の中で物體の運動を計量し、而して時間そのものを私は計量しないのか。或は物體が中にあつて動かされるその時間を私が計らずに、その物體の運動がどれほど永かつたか、又はどれ程の永い間で此の場所よりあれへ來ることできたか、それをまことと計ることできやうか。此の同一時間を然らばどうして私は計らうか。私共は短い時間を以て永い時間を恰も寸を以て尺の長さをする如く計らうか。是れ私共はげに短い音綴の長さを以て長い音綴の長さを計り、そして此はあれの二倍であると言ふ如く見られるのだ。斯うして私は詩歌の長さを計るに、その節々の長さを以てし、節々の長さは音步の長さを以てし、音步の長さは音綴の長さを以てし、又長い

音綴を以てし、頁數を以て計らない。然する時は私共は是れ場所を計るので、時間を計るのでないからだ。而も私共が語々を誦して、そしてそれが過去つて了ふその時私共は此は長い歌である澤山の節で成立つからだ、或は長い節だ澤山の音歩で成立つからだ、長い音歩だ澤山の音綴で延長されるからだ、又は長い音綴だ短いのの倍であるからだと言ふのである。けれ共これだとて時間に就ての確實なる計量を何等與へるのでない、なぜなら、之もあり得ることで、短い句節だとてそれが充分に音誦されるなら、長い句節が急いで音誦されるより、もつと長い時間を取るからで、また句節も同じで、音歩も音綴もさうである。だから時間とは只延長である外何でもないのだと私には見えるのだ。然し何の延長だか私は知らない。そしてそれは若しや心意そのものではないかと怪むのだ。そは、私の神よ、私が或は漠然と之はあれより時間が長いとか、或は判然と之はあれの二倍だとか言ふ時、何を私は計量するだらう、私は爾に求め奉る。私は時間を計るのだと私は知る。けれ共未來の時間を計るのでない、まだ存在しないのであるからだ。さりとて現在でもない、何等の長さに由て延ばされるでないからだ。又過去でもない、今はないのであるからだ。然らば何を私は計るのである、過去つたのでない、過行く時間であるのかしら、さう私は言つたからだ。

第二十七章

前章のつゞき

勇敢なれ、私の靈よ、撓まず進め、神は私共を援けて下さるのだ。「彼は私共を造り給うた、私共自分で出來たのでないのである」。然り、眞理の曙光射す所へと突き進め。で、今假定して見よ、或る物體の聲が響き初めたとする、それが響き響きて、そして聽こえ已まつて了ひ、今は肅默してその聲は過去り、もはや聲でないのである。さよう、その聲響かぬ以前はそれは未來であつて、そして計量されなかつた、まだなかつたからだ。而も今はそれができない、もはやないからである。だからそれが響いてゐた間は計ることもできたのだ、計られ得るものあつたからだ。けれ共その時でさへそれは立止つてゐたのでなく、過行きつつ、また過去りつつあつたので、そがためむしろそれが計られることできたのであるか、そは過行く間はそれが時間の或る長さにまで擴げられ、それで計られることできたのだ、現在には何等の長さないからだ。若しもその故にその時できたとして、見よ、他の別の聲が響き始めて、それが何等の中絶なく、同一音調で響き續けると假定し、私共にそれが響いてる間に計らせ見よ、それが響き已まつてはもう過去となり、何も計られるもの殘るのでないから、私共をして眞にそれを計つて、どれ程それがあるか告げさせ見よ。けれ共それは尙響いてゐる、又それを計るのは、それが始まつたその瞬間から、それが已まつて了ふその終局までなければできないのだ。そは私共が事を計るのは卽ちすべてその始めより終りまでの間のその長さであるからだ。それ故にまだ

終らない聲は、それがどれ程長いとか短いとか云はれるやうには計られない、又はそれが他に等しいとか或は倍だとか二倍だとか云つて呼ばれることもできないのだ。けれ共それが終つた時はもうないのだ、どうしてそれが計られやう。而も私共は時間を計るのだ。けれ共まだないものや、もうないものや、または何等の立續けで延長されないものや、何等の局限ないものを計るのでない、私共は未來の時間や過去の時間、又は現在と過行きつつある時間とを計るのでない、而も尙私共は時間を計るのだ。

「Deus Creator omnium」（萬物の造り主なる神よ）と、此の八音綴の一句は短いのと長いのと相交互して居る、即ち短い音綴四第一第三第五第七は四の長い音綴第二第四第六第八に對し、只單一音で、後者の各音は前者の各音に對し皆二倍であり、私は彼等を一誦再誦して、そして誰もの感ずるその如くにそれを見出すのだ。即ちその常識に由て私は長音綴を短音綴で計量し、明かにそれが倍の長さあるのを知るのである。けれ共もし一が短く他が長いとして、前者と後者と交互して發音される時、どうして私はその短いのを押へ置かう、又どうして之を計りつつそれを長いのに當嵌めて、その後者が前者に倍だけ長いと見出すことできやう、短いのが響き已んだ後でなければ長いのは響き始まらないのであるからだ。而もその長いもの、それを私は現在として計るのだらうか、それが已まるまでなければ、私は計らないのは判つてだ。で、その已まると云ふはその過去ることである。然らば私の計るのは何であるか、私が由て以て計る短音綴はどこにある、どこに私の計るその長いのはある

か。兩者共に響いて飛去り過去つてもはやないのである、而もなほ私は計つて、そして確信もつて（慣行的な意味にて信じられてる限り）時間の長さに就てなら、此の音綴は只單一音綴で、あれはその倍であると答へるのだ。けれ共又彼等が既に過去つて、そして已まつて了つたでなければ、私はそれもすることできないのだ。だから私の計る所のものは、その今は現存しない彼等そのものではなく、私の記憶にあつて、そこに固着して留つてるその何かである。

私の心能よ、私が時間を計るのは汝にあるのだ。で、私を妨げすな、即ち言換へれば汝の種々な印象の混雜もつて汝自身を妨げすな。汝にあつて私は時間を計るので、凡そ事物がその過行きながらに汝の中に生ずる諸種の印象、それがその事物は去つても殘つて、そしてその現存するものそれを私は計量するので、この印象を生じて去つて行くその事物ではないのである。だから之が或は時間である、さなくば私は時間を計ることをしないのだ。所で私共が靜默時間を計つて、此の靜默はあの聲の時間の倍續いたなどと云ふ時どうだらう。私共は恰も聲が響いてそれで或る一定の時間に於ける靜默の長さを報告し得る如く、その聲の計量に私共の考へを引延すをしないかしら。そは聲も舌も靜止するに拘はらず、私はなほ思想で詩歌や何かの論文や、また何かの運動の廣袤などを繰返し、そして此があれに對し幾何なりやなどと、さながら聲もつて私共がそれらを發音する如く、時間の長さに就て告げるからだ。若し誰かが何かの長さの聲音を口にせんとし、それがどんなに長からうと豫め考へできめ

たやうな事あるなら、是れ彼は既に默して或る長さの時間を經、そしてそれを記憶に入れて、その話を始めるので、それが聲に響いてその目的の終るまで續くのである。然り、それが響いた、又響くだらう、その濟んだもの丈は既に響いたので、その他は響くのであるだらう。そして斯くそれが過ぎ進みて、現在的意圖は未來を踰えて次第に過去へと持運ばれ、過去はまた次第に未來の減少に由て增加し、未來は全く消失されてすべては過去となるのである。

第二十八章

時間を計るは靈である

けれ共どうしてそのまだないものなる未來が減少され、或は消失されるのだらう。或はどうして今はもうない過去が增加するのだらう。只之を仕出す心に三つの事が行はれるばかりである。そは心は期待し、考慮し、また記憶する。だから卽ちその期待する所のものその考慮する所のものを經てその記憶する所のものに過行くのである。その故に來るべき事はまだないのであるとは誰が之を否定しよう、而もなほ心には來るべき事の期待があるのだ。また誰が過去つた事は今はもうないのであるとのこと、之を否定しよう。而もなほ心には過去つた事の記憶があるのだ。更にまた誰か現在時とはその

瞬間に過去るのである故に何等長さないとのこと、それを否定しよう。而もなほ私共の考慮は續いて、それに依て現在であるべき事、それが進行して見えなくなるのである。だから永くある事も未來の時間でない、それはまだないからだ。けれ共永い未來とは永い未來の期待である。さりとてまた永いとして今はない事、それは過去時でない。而も永い過去とは永い過去の記憶である。

私は今將さに私の知つてる詩篇を誦さうとする。すると私の始める前には私の期待は全篇に涉るのだ。けれ共私の始めた時その幾何の部分なりと私が過去に分離し去らうとするそれ丈、それは私の記憶に送り込まれるのだ。斯やうにして此の私の行動の生命は私が誦したもの丈の記憶と私が將に誦せんとする期待との間に分たれる。而も考慮は私に取つて現在であり、卽ちそれに由て未來なる所のものが過去になるやう運び越されるのだ。而もそれが更に幾度も幾度も爲されるや、それ丈益ゝ期待は短縮せられて、記憶は增大され、遂には全期待盡く竭果されて、その時全行爲は終りを告げ、すべては記憶に過去つて了ふのだらう。そして此の全詩篇に起る所の事は同じくその各別部分にも、及び各別音綴にも起るのであり、同じく此の詩篇が一部であり得るあのもつと永い行爲にも當嵌まり、また同じく人間のすべての行爲その部分をなす人間の全生活にも當嵌まるので、同じくすべての人間の生活その部分である人の子たちの全時代を一貫して當嵌まるのである。

第二十九章

神と合一するため私共の靈のもたねばならぬ注意

けれ共「爾の仁慈は生命にもまされる」故に、見よ、私の生命は徒に惑亂のみ、そして「爾の右の手は私を」、人の子なる私の主、唯一でありまする爾と衆生の私共との、然り、(その私共衆生亦多くの事の中に雜多の惑亂を經つつあるのだ)、その間の仲介者でありますものにあつて「支持し給ふ」のだ。「彼」に由て「私が捉へられたるその者にあつて私の捉へ得」、また私が舊き生涯より改められて、唯一でありまする者に從ひまつらんためである。即ち「後にあるものを忘れて」、膨脹されるのでなくて擴張され、あると見えて過去る事にでなく、而もまへにあるあの事どもに向ひ、惑亂されず而も凝中して、「私の天よりの召なる褒美を求めて進み行き、そこで爾の讃美の聲を聽き、また來りもせず去りもせざる「爾のたのしみを仰ぎ」まつらんためである。けれ共今や「私の年齢はなげきによりて消竭されて居る」、そして、主よ、爾は私の慰安であり、私のとこしへの父であり給ふ。けれ共私は時に切離された、誰の命なる私は知らないのだ。そして私の思想は私の靈の奥なる腸さへもで、無數雜多な事もつて裂き惱まされて居る、爾の愛の火もつて淨化され、熔解され、爾に一緒になつて

流れ込む、それまでである。

第三十章

眞理にあつて確立し得んことを祈る

そして今私は立ちてそして爾にあつて、即ち私の鑄型である爾の眞理にあつて堅固ならんと欲するのだ、否、私はあの自分の攝し得る力以上に渴する罪惡的な病に依り、神は天地を成し給ふ前何を爲したるや、或は前に何物をも未だ造つたことなきその彼の心に、どうして何物なりと造らうとの意志の起りしやと云ふ、その人々の疑問を容すまい。主よ、彼等に許して何を言へる自ら熟慮し、そしてまだ時間なるものなかつた時には、「いまだ」などの語もつて形容されることあり得ないと知らしめよ。だからこの「彼がいまだ造つたことあり給はぬ」と云はれるは、これまだ時間ないに造り給うたと云ふより外に何である。故を以て彼等をして造られた物なくしては時間はある筈ないと知り、そしてその空妄な事語るを已まらしめよ。願くは彼等またまへにあるものに向ひて進み、そして爾は是れすべての時間以前にましまして、すべての時間の永遠なる造り主であり、また如何なる時間も、然り、或はもしすべての時間以前何かの被造物あつたとて、その被造物も爾と同一の永遠ではないと悟

らしめよ。

第三十一章

神を知りまつるとその造りた物を知るとの差別

主なる私の神よ、爾の神祕なその幽奥とは如何なる深みであらう、又私の罪過の結果は如何にそれより遠く離れて私を投込みたらう。願くは私の眼を癒したまへ、爾の御光を仰ぎてそのたのしみを享け得んためである。まことぞ誰かあつて、私がどれかの名高い詩篇を知る如く、過去と未來とに渉り、すべての事を知り得るほどに巨大の知識と豫知と心力とあるものあらば、その心力眞にこよなく驚くべくまた怖ろしく不思議なものである、そして之にあつては凡ての時代に渉る過去の事未來の事何事も隠れるはない、恰も私があの詩篇を歌ふ時、そのどれが或はどれほど最初より過去つて、またどれほど終りまで殘つてるか皆明かなる如くであらう。けれ共爾は天地の造り主で、また靈と肉體との造り主でましますのだ、その爾には苟くも斯やうな仕方で過去と未來とのすべての事を知りまさうなど、それは決してあるまじぞ。爾の彼等を知りますのは、はるかにもつと不思議でまたもつと神祕であるのである。そはあの誰かがその知つてる歌を歌ひ、或は何かの名高い歌を聽くや、後より來る

べき言詞の期待と過去つたものの記憶とに由て、その感情變化され、その感覺分割される如くでないからである。然り、そようにしては何事も不變に永久なる爾に起るのでない、爾ぞ卽ち心の永遠なる造り主でありますのだ。で、太初にあつて爾は爾の知識の何等の變化なく、天と地とを知りましたが如く、爾の御仕業に何の惑亂なく、爾は太初に於て天と地とを造りましたのだ。誰でも理解するもの彼をして爾に告白せしめよや。あゝ如何に爾は高くましますぞ、而もなを心に謙下(けんか)る者これ爾のすみ家であるのである。そは「爾は屈する者を引上げ給ふ」のだ、そして彼等は倒れない、爾はその支持者であり給ふ故である。

第十二卷

前卷に於ける時間の考究よりアウグスチヌスは筆を轉じて、此卷主として創世記第一章第一第二の二節の解釋に集注され、その間著者に獨特なる靈的の意味の闡明を與へたのである。

第一章

眞理を理會するに存ずるその困難

主よ、私の心は爾の聖書のみ言もつて感動され、この私の生命の貧弱の中に甚だせはしいのだ、而もその故に殊更だ、人間の悟性の貧弱なる、言にのみ豊富で、發見よりももつと疑問が、また獲得よりももつと要求が語られるからで、また敲く私共の手は受ける私共の手よりもつと爲すべき仕事の多いのである。私共は誓約(ふちかひ)を受けて居る、誰かそれを無效にするだらう。「若し神が私共の味方ならば誰か私共に敵せんや」、「求めよさらば受けるだらう」、「尋ねよさらば見出すだらう、敲けよさらば披かれるだらう」。そは誰でも求める者は受けるので、尋ねる者は見出し、そして敲くその人には披かれるであらう故である。して此等即ち爾御自身の約束である、そして眞理が斯く約束し給ふのだ、誰が欺かれるを怖れる必要あらう。

第二章

天に二つの種類がある

私は舌もつて謙下り、そして爾の御稜威に對し、爾が「天と地とを造り給へり」と告白したてまつる。してこの私の見る天とこの私の踏む地と、然り、私の周圍に私の支へるこの地はどこよりだらう。爾が之を造りましたのだ。けれ共、主よ、あの詩篇の言辭に「天の天は主のものである。而も地は之を人の子たちに彼は與へたのだ」とあるを私共は聽くのだ。而もその「天の天」はどこにある、どこにその私共の見ない、そして之に對し此の私共の見るものすべてが地であるその天はある。そは此の形體的全部は全部的に隨所にあるのでなく、此等の下なる部分、而もその最低下は此の私共の地であつて、之にあつて各部その美をうけて居るのである。けれ共あの天の天に對しては私共の地の天さへも只地であるのだ。然り、此等の大なる形體兩つながら「あの主のものであり、人の子たちのものでない不知なる天に對し」之が地と呼ばれるも無稽でないだらう。

第三章

黒暗わだの面にあり

そして此の地は見ることできず、また定形なくあつた、そして私はその何たる知らないか、深き淵そこにあつて、その上に光なかつた、何等の定形なかつたからである。だから爾は命じて斯く録さしめた、「黒暗わだの面にあり」と。即ちそれは光のなかつたでなくて何だらう、そは光がそこにあつたなら、どこにそれがあつたらう、只高く照り渡つてすべての上にあつた筈だ。だから光のなかつた所黒暗の存在とは何である、只光のなかつた事なのだ。此の故に「黒暗その上にあり」、光がその上になかつたからだ。恰も響のない所静粛ある所の如くである。そしてそこに静粛あつたとは何である、そこに何らの響なかつたことであらう。主よ、爾は爾に告白しまつる此の靈に教へ給はなかつたか。主よ、爾は私に此の形のない物を形づくり之に種々相與へ給うたその以前には、そこに色も容も體も靈もなかつたことを教へ給はなかつたか。而もなほ全く何もなかつたでない、そは何等の美のない何かの無形狀態があつたのだからだ。

第四章

元始の物質

然らば心力遲鈍な人々にも理解せしむるため、何かの普通な言辭に由るでなく、なんとそれが呼ばれよう、而も世界のすべての部分の間にて「地と深み」と云ふ言辭の外、絶體の無形な狀態に近似なもの、何が見出されようか。そは之が最低下部を塡めて、他のすべて透明で輝き渡る上部の部分より、その美に於て劣るのであるからだ。ではなぜ爾が以て此の美しい世界を成さんため、美と云ふことなく豫め造り給うた、その物質の無形狀態を私は考へて、之を「見えざるまた形ない地」と云ふ名により、適當に人々に理解せしめようとしないだらう。

第五章

此の物質とは何である

で、此の名に由て如何なる意味の考へ得られるか、之を思想は求むる時已れに言うのである、これ

生命とか正義とか云ふ如き智能に屬する形で何等ない、それが形體の物質であるからだ、又は感覺に觸れるものでもない、目に見えず無形であるから、その中に何ら視官その他の感覺に觸れるはないからだと。然り、人の思想が斯く已れに云ふ時、それを知らないで之を知らうと努めるか、或はそれを知つて無知であらうと努めるのか、その孰かであるのだらう。

第六章

この物質に就ての以前の誤謬

けれ共、主よ、私は自分の舌と筆とをもつて、爾御自身その物質に就て私に敎へ給ひし事、その全部を爾に向ひ告白しまつらばや。以前それを理會しなかつた人たちがそれに就て私に告げた時、その名を耳にして、それを私も理會せず、それを只無數雜多な形を有するのだと考へ、そしてその故に全然それの概念さへ有ち得ずに、私の頭はすべての而も秩序をなくして汚ない怖ろしき「形」を、然りなほ形である、それをまぜ返して、そしてそれを「定形なし」と呼んだ、それが形を缺乏して居るのでない、只私の心が若しその前に出されるなら、それが異常なごつたなものとして動轉されるだらう、また人間の厖弱さ、之に惑殺されるだらうであるからだ。而もなほ私が「定形なし」と考へる所

のもの。全然形を取去られたのでなく、只もつと整美した形のものに比較してである、そして若し私が物質を絕體に「定形なし」と考へようとするならば、その如何なるものであれ、すべて形と云ふものの殘部をさへはき去らねばならぬと、私に眞の理性が說き聞かせたのだ。而もそれは私に不能であつた。そは私には物その形もなく、また空無でもなく、兩者の中間であつて、卽ち無形で殆ど空無であると考へるより、むしろすべての形を取去られたものそやうなもの全然ないと想像する方容易であつたからだ。それで私の心は旣成せられた形體の影像もつて充たされ、またその思つたままに之を千變萬化させつ、私の靈と之に就ての疑義に沒頭した。そして私は已れを形體そのものに傾倒し、また一層深くその轉變推移の變化性に眼を注いで、そして此の形より形へと推移すること之を純然たる空無よりでなく、或る無形狀態を經てであると疑つた、而も嘗に疑つたばかりでなく、之を私は知りたいと思つたのだ。それで若し私の聲と筆と爾が此の疑義に就て何を私に闡明し下さつたか、その全部を爾に告白しまつらうとするとても、如何なる讀者がそれを悚へて容れて呉れやうか。さりとて私の心胸すべて之にも拘はらず、私の言表し得ないその事々の故に、私は爾に光榮と讃美とをさゝげざるを得ないのだ。そは變化的なる事物のその變化性あつてこそ、之が此等の變化的なる事物が變化され行くすべての此等の形を造り出すのである。そして此の變化性とはそれは何である、それは靈魂なるか、それは體なるか、それは魂と體とを成立たすそのものであるか、或は誰かが空物何かであり、ま

たは有即ち無であると云ひ得るなら、私はこがそれだと言ひたいのだ、そしてそれが隨分さうであつたのだ、斯やうに見え得る複雜な形態を受くことできたからだ。

第七章

神は無より天を造り給うた、即ち天使である、又地を造り給うた、即ち無形の物質である

そしてどこよりこの原始の存在價値のものがあつて、それがその見え得る複雜な容を取つたらう、然り、どこよりであつたらう、爾よりのみであつた、萬物あらん限りのその本源でありますからだ。而も爾に肖ざるその如く、亦爾より遠ざかつてある、必ずしもその場所を以てでない。故を以て、主よ、爾は一所にあつては一であり、他所にあつては他であるのでなく、而も同一不變で、同一不變で、又同一不變で、聖なる聖なる又聖なる、全能なる主なる神であり給ひ、爾よりなる元始に於て爾は自身の本體より生れた爾の御智慧に於て爾は何かを造り給ひ、そしてそれが無よりであつたのだ。そは爾は「天と地とを造り給うた」、爾御自身よりでない、若しさうなら是れ爾の唯一の生の子に伴いので、即ち亦爾に伴いのである、然るに苟も爾よりでないもの、その何であれ、それが爾に伴いとはあらう筈はない。爾を外にして何ものなりとそれより爾がこの天地を造り得たるはなかつたのだ。

一體三位にして又三位一體にまします神よ、そしてその故に爾は無より天と地とを造りましたのだ、大なるものも小なるものもである。そは爾は全能で至善でましまして、すべてのものを皆善に造り給ふので、即ち大なる天も小なる地もである。爾は在り給うた、そして爾以外は何にもない無であつて、それより爾は「天と地とを造りました」のだ。即ち二つの種類のもので、一は爾に近く一は無に近くして、前者は爾を措いてそれより以上はない。又は後者はそれより以下のもの何もないのである。

第八章

元始の物質これ無より生じたのである

けれ共、主よ、その「天の天は爾のためであつた」、けれ共爾が人の子たちに與へて見られ觸られる所の地なるもの、是れ私共が今見てまた觸る所のものではなかつた。そはそれは「見えざる形なき」ものであつて、「淵あり」その面に光もなかつたのだ、或は「黑暗わだの面を覆ひ」で、即ち淵の中以上であつたのだ。なぜなら此の今見える水の淵はその深みの中にあつてさへ、その本然に固有の光を有し、その底なる魚やはふ蟲には如何なる程度にあつてか見えたのであつたからだ。けれ共その淵全體殆ど無であつたのだ、それまで全然「形なし」であつたからだ。只そこには既に形づくられ

得べきものあつたのだ。これ、主よ、爾はこの世界を「形なき」物質より造り給ひて、而もその物質や爾が無より無の次なるものに造り、それより私共人の子たちが見て驚異する此等の大なるものを形成しましたのである。まこと此の形的なる天の驚異すべきであることよ、その「水と水とを分てる穹蒼」こそ、光のできた第二日に、爾は「それが成れよ」と云つてそれが成つたのだ。してその「穹蒼を爾は天と呼び給うた」、天即ち爾がまたすべての日の以前に造り給うた無形の物質に見える容を與へそれを第三日に造り給うた此の地と海とに對しての名であるのだ。そは爾はすべての日の以前に別なる天を造り給うたのだ、只それは此の天の天であつた。なぜなら「元始に」爾は「天と地とを造り給うた」とあるからだ。けれ共此の地はこれ「見えず形なく、黑暗淵の面を覆うたのだ」。してその見えず形ない地より、即ちその無形狀態より、即ち殆ど無であつたその中より、爾は此の轉變の世が以て成立ち而も常ないすべての此等のものを造り得たのであり給ふ。してその變化性實にその中に見えるので、即ちその中にあつて時間が感ぜられまた算せられるのだ。そは時間は物の推移に由て生ぜられるので、一方前に言はれた見えざる地がその物質なる諸の形態、それが千變萬化されるのであるからだ。

第九章

何故に日が擧示されず而も神は天地を元始に成し給うたと錄されたらう

故を以て爾の僕（モーセ）の教師なる聖靈は爾が「元始に天と地とを成し給へり」と錄したとき、時間に就て、又日に就て、何も言はなかつた。そはまことぞあの爾が元始に成し給うた天の天とは、或る智的の被造物であつて、三位一體なる爾に對し、決して同じ永遠ではない、なれ共爾の永遠の性を享有して、爾御自身に接するその最も幸福なる觀念のうましさに由り、強くその自分等の變化の性を制抑し、そしてそれが初めて造られた以來何等の墮落なく爾に縋り奉りて、そして常に轉變窮りなき時間の外に措かれてあるのだ。然り、又「見えず形なき地」の此の無形狀態も日時の中に算せられてゐないのだ、そは形態も秩序も何等ない所何等來りまた去ることないからで、そしてそのない所明かに日時もなく、また何等時間の長さの轉變もないのである。

第十章

神に對しまつる祈り

やよ眞理よ、私の自分の闇でない、私の心の光よ、私に語りませや、私はその闇の中に陷りて自ら黑暗となつた。けれ共尙その中より、その中よりでさへ、私は爾を愛しまつつた。私は正路を失つ

た、而も爾を記憶しまつつたのだ。私は自分に返れと呼ぶ「爾のみ聲を背後に聽いた」、而も殆どそれを耳に入れなかつた、平和に敵なるものたちの喧噪に由てである。そして今は、見よ、心惱み息切れて爾の泉に歸るのだ。誰も私を制止すな、私は之より飲みて活きんと欲するのだ、私をして自分の生命であらしむな。私自身よりは私は惡の生涯し、自ら己れに死であつたのだ、そして私は爾にあつて甦へるのだ。私は爾の聖書を信じたのだ、そしてその言辭は甚だ神祕を以て充たされてる。

第十一章

神より學びたる眞理

主よ、爾は既に强いみ聲もつて私の內的なる耳に寄せて私に告げ給うた。爾は永遠である、爾のみこそ不死でありますのだと。是れ爾はすがたや動きもつてする如きの變化されることない、また爾の聖旨は時間に由つて推移せられない、意志の苟くも變化する是れ不死でないからだ。そして之が爾のみまへに於て私に明かになつたのだ。そして益ゝ益ゝ私に明かにせられかしな、爾に祈り奉る、そしてその示現に於て私は平靜もつて爾の御翼の下に永續しまほしや。爾はまた、主よ、强い御聲をもつて私の內的なる耳に寄せて私に告げ給うた。爾は爾御自身がましますそのものならぬ而もなほ存在す

るすべての自然と本體とを造り給うた。そして存在しないものと、及びその永久まします爾より爾に劣りて存在するそのものに向ふ意志の動きと、それは爾よりでないのである。卽ちその意志の動き是れ人間の愆と罪とであつて、而もその如何なる罪も爾を害することと決してない、或は爾の御國の秩序を擾すが如き始めにも終りにもないのであると。して之が爾のみまへに於て私には明かなのだ、またますますそれが私に明かになれかしな、爾に祈り奉るそしてその示現に於て私は平靜もつて爾の御翼の下に永續しまほしや。

爾は又强い御聲もつて私の內的なる耳に寄せ私に告げ給うた。その幸福とは只爾ましますのみ、そして最も堅固な純潔もつて爾よりその養ひ攝取し、そして如何なる場合如何なる時に於てもその本然の變化の性を曝露することしない、そして爾自身常にそれと共にいまして、その爾にまで全情傾けて依り賴み、期待すべき未來もなく、その記憶することと之を過去に持行くものもなく、如何なる變化に由ても變化されず、如何なる時にも心擾されないその者、その被造者もこれ亦爾と共に同じ永遠ではないのであると。けれどげに斯やうなものあるならば、その被造者ぞ幸福なるかな、爾の幸福に縋りまつるからである。然り、爾にあつて幸福なるかな、爾はその永遠の住家があり、またその光照者でありますからである。また私は「主のものなるその天の天」を如何なる名を以て呼ばう、むしろ是れ爾の御家であつて、そこに爾の樂みを觀すれば、復他に移り行かうとする如き何等の缺點ない所と云

ふより外にない。そしてそこに住む聖なる靈たち、是れ天的なる場所に於ける爾の御國の住民にて、皆安固な平和の狀態によつて最も和合したる一つと爲り、一の純潔なる心である。そしてその場所即ち私共の見るこの天的な場所よりはるかに上であるのである。

之に由て、その道程遠く歷めぐつた靈魂が、若も今それが「渴ける如くに爾を慕ふ」なら、若も今「その涙が毎日そそがれて、汝の神はいづくにあるやと語るその間之がその糧となる」ならば、若も今それが「そのいのちのある日の限りなんぢの家に住へんため、なんぢに一の事を求めて之を願ふなら」、（そしてそのいのちとは爾でましまさず何である、また爾の日は爾の永遠でなくて何である、爾の齡は竭くることとない、爾は永久不變でありますからだ）。即ち之に由てそれが理會し得るだらう、之に由てその靈魂が、爾の御家は爾と共に同じ永遠ではない、されどなほ如何なる時にても遠くの國に移ることとない、而も絕えず必ず爾に纏はれて、何等時の變化をうけることとない、だから爾は如何に遠くすべての時間の上にあつて永遠でありますか、之を理會し得るだらう。之が爾のみまへに於て私に明かなのだ、それが益ゝ私に明かになれかしな、爾に祈りたてまつる、そしてその示現に於て私は平靜もつて爾の御翼の下に永續しまほしや。

見よ、爾の造りました中の此等の最後のまた最下のもののその變化に於て、如何なる無形狀態存じたか、私は知らないのだ。そして若しすべての形態（すがた）が皆消盡されて、元來物みなそれを歷て一のすがたより他のすがたへと轉變されたその無形狀態のみ殘るとなつても、それが時間の推移を示すことできるとは、之を誰か私に告げるだらう、然り、只その心の空虛より自ら己れの空想の中にさ迷つて轉輾する、そやうなものでなくて、誰か之を私に告げるだらう。これ明かにあり得べきでない、なぜなら動きの變化なくしては時間はないのだ、また何等の形態ない所何等の變化またないからである。

第十二章

時間のない二種のもの

私の神よ、爾が私に許しました限り、爾が私に敲けと刺戟しました限り、また私が敲いて爾が私に披きました限り、此等の事を考へて、爾が時間の範圍の中でなくて造り給うた二つのものを見出すのだ、而もそのどちらも爾と共に決して永遠ではないのである。一は思觀に何等缺けてない、また何等變化の間斷ない、自ら變化すべきであるも而も變化することとなく、爾の永遠不變の兩性を充分に享くべく、さう造られて居るのである。他はまた全く無形であつて、それが時間に服從して、これよりあれへと變化される如き、何等の動き或は休みの形もないのであつた。けれ共之を爾は斯く無形にして置き給はなかつた。すべて日てふものまだ全くなき以前爾は「元始に天と地とを成し給うた」。即ち

私が語つた二つのものである。けれ共地は「見えずして形なく、黑暗わだの面を覆うたのだ」と、此の言辭の中に無形狀態が私共に齎らせられ、之に由て全く無の狀態ではない、卽ちすべての形態全然缺乏したとは考へられないその可能性が次第に親はれるのである。そしてそれより他の天が見え得るまた形の齊うた地と共に造り成されたので、亦水も共に特別に整頓され、そしてその他なんでも世界の形成にあるもの日附さへされて造られたと錄されてる。そして彼等はその本然として動きと形との推移を定められて、卽ち時間の變化に服從するやうなつたのである。

第十三章

靈的の被造者に就て

私の神よ、爾の聖書が語りて「元始に神天地を成し給へり、地は見えずして定形なく、黑暗わだの面にあり」と云ひ、そして爾がいづれの日に彼等を造りましたる之を擧げてないのを聽く時に、これが私の考へた所である。然り、これが私の考へた所である。卽ち天の天、卽ち智的なる天の故に、その智的の靈體たちはすべてを同時に知りて、「部分にて」でなく、「朧氣にて」でなく、「鏡を以て」でなく、而も全部として「顏を合せての表示に於ける」如く、また今は此のもの、やがてはあのもの

と云ふ如きでなく、私も言つたやう、すべてを同時に、時間の何等の接續なくして知るのである。又一方には見えざる定形なき地の故で、之も何等時間の接續ないのだ。これその接續は「今はこのもの、やがてはあのもの」なるを示すので、何等形のない所何ら物の判別ないからである。そして卽ち此等の元始的有形と元始的無形と、一は天にして而も天の天であり、他は地にして而も見えざる形ない地である。此等の二つの故に爾の聖書がいづれの日とも指さずに「元始に天地を成し給へりと言うたと私は考へる。そはそのすぐ後に聖書はその語る謂ゆる地を付隨させ、又穹蒼が第二日に造られたと錄され、そして之を「天と呼んだ」とある。だから彼がいづれの日とも指さずに以前に語つたのは何の天であるのか、それを私共に思ひ付かせるのだ。

第十四章

聖書の意義の深長さ

爾の御言の驚くべくも深きことよ。見よ、その表面(うはべ)は私共のまへにあつて、小さなものたちをも引寄せる。而も、私の神よ、彼等は驚くべく深くある、げに驚くべく深くある。之を覗ふこれ畏るべしだ、尊崇もつて畏れるのだ、又愛仰もつてをののくのだ。そして之に敵するものたちを私は猛烈に嫉

むのだ。願くは爾の兩刃の劍をもつて彼等を屠りたまへ、彼等が復之に敵することないためである。そはさうして私は彼等が自分に殺されんことを愛する、彼等が爾にあつて活きんためであるからだ。けれ共、見よ、之は亦創世記の非難者たちでない、その稱揚者たちなので、彼等は言ふのだ、「彼の僕のモーセに依て此等の事を錄さしめた神の御靈は、此等の言辭が斯く理解されるを欲しなかつたらう、彼はそれが汝の言ふ如くでない、而も他に我等の言ふ如く理解されんとしたのだらう」と。されど私共すべての神でありますす爾よ、審者でありますその爾に私は斯う答へるのだ。

第十五章

造り主と造られたものとの差別

「眞理が强い聲もつて私の內的なる耳に寄せて私に告げたこと、之を汝ら欺妄としようとするか、その眞理は造物主の永遠に就て斯く告げたのだ。彼の本體決して時間に由ては變化されない、或は彼の意志はその本體より離れんとしない、その故に彼は一事を今欲し、やがて又他の事を欲するしない、而も一度に、只一度に而も不變に、彼の欲することそれをすべて欲し給ふのだ。又は前に欲しなかつたこと之を後に欲し、或は前に欲したこと之を後に欲しないことし給はない。これかやうな意志は是

れ變化あるので、變化あるものは決して永遠ではないからで、而も神は永遠でましますからである。尙また彼が私の內なる耳に寄せて私に告げた事である。凡そ來るべき事の期待來る時、それは視た事となるので、その視た事が過去るや、それが記憶となるのであるが、さて斯く推移するすべての考へは皆變化するのである。そして變化するもの何等永遠なるはない。而も私共の神は永遠であり給ふ」と。して此等の事ども之を私は綜合して、そして私の神卽ち永遠なる神は何等新たな意志を以ては如何なる物をも造り給はない、又は彼の知識は何等の過ぎ行くものを容認しないと見出すのだ。

「然らば矛盾を語る者たちよ、何を卿等言はんとする、此等の事ども虛僞なるか」。「否」と彼等は言ふのだ。然らば何ぞ。既に形作られたすべての自然界や、又は形造られ得べき物質は只是れ彼よりでないか、彼は無上に善でありますのだ、無上なものであります從だと云ふ、それも虛僞なるのであるか」。すると彼等は言ふ、「それも我等否定しない」と。「然らば何ぞ、卿たち之を否定するか、一種崇高な被造物がある、純潔なる愛もつて眞なるまだ眞正永遠の神に縋りまつつてる、神と共に永遠でこそない、而も彼より分離せられない、或は時の變化轉移の中に解消されることない、而も神の思觀の中にのみ休息して居るのである」。是れ、神よ、爾は爾の命じ給うた限り爾を愛しまつるその彼に爾御自身を現示して彼を滿足させたまふのでそしてその故に彼も爾より、或は己れに向つて橫反する如きないからである。して之が卽ち神の御家であつて、地的のものではない、或は何等の天的形體

の質量あるでもない、而も靈的で爾の永遠の性を享有して居るのだ、無窮に缺點ないのであるからだ。そは爾は「いやとほながに建てたまうん、又すぎ失すまじき詔命をくだし給うてる」。さりとて、神よ、それが爾と共に永遠ではない、元始ないではなくして、造られたものであるからである。

そは私共はその以前には時間と云ふもの何等見ないのである、是れ智慧はすべてのものの以前に造られたのであるからだ。而もその智慧これ爾に全く等しいまた共に永遠なるそのみ智慧でない、その父なる私共の神よ、之に由て萬物造られたので、之にあつて「爾は元始として天と地とを造り給うたのだ」。而もそのみ智慧でなくして、その智慧とは是れ造られたものである、即ち智的な本性與へられたもので、光りを仰いで光りであるのだ、そして造られたものである、而も亦智慧と呼ばれるのだ。只照らす光りと照らされたる光りとその間の差別あるのみ、恰も造り主なる御智慧と造られたるものとの如くである、又は主動に義とする義と被動に義とされる義との差別の如くである。そは私共も亦爾の義と呼ばれるのだ、爾の僕の一人も「我ら彼にありて義となるを得んためであると言うてあるからだ。その故に或る種の智慧がすべてのものの以前に造られたのだ。即ち「上なるまた天にあつて自由永遠なる我らの母」の、爾の純潔なる都の理智的な心を云ふので、(然り、その天にあつてとはあの爾をたゝへる天の天なるそれにあつてでなくて何だらう、之がまた主のための天の天であるからだ)、私共はその以前には時間を見出さない、すべてのものの以前に造られたそのものは、また時

間の被造物以前にあるのであるからだ、而も造り主御自身の永遠是れそのまた以前で、それよりそれが造られて元始となつたのだ。只時間を以てでない、時間そのものまだなかつたので、而もその創成を以てである。

その故に、それが、私共の神よ、爾より出でて全然爾とは別であり、又同一ではないのである。なぜなら成程その以前にのみでなく、またその中にてさへ私共時間を見出さない、(それはいつも爾の御顏を仰ぐを得、或はそれより引去られること決してない、故を以てそれが如何なる變化に由ても轉移されないとはいへ)而もなほその中に變化されべき危險あつて、それは暗く冷くなるだらう、只强い情熱もつて不斷の眞晝の如き爾に縋り奉り、それが爾よりうけて照りまた燃えるのであるからだ。やよ、最も照り渡りまた樂しき「み家」よ、「我はなんぢのうるはしさとまた已が主の光榮の宿れる所をいつくしむ」、然り彼はなんぢの建築者でありますのだ、またその持主でありますのだ。そして私の旅路はなんぢを慕うて息喘がばや、そして汝を造り給うた彼に言ふのである、彼をして汝にあつて亦私を所有せしめよや、彼は亦私をも造り給うたのであるからだ。「私は失はれた羊の如くに迷つた」、けれ共なんぢの建築者の、「私の牧者の肩に負れて」汝に連れ戻されんと望むのである。

私の語り居つた自家撞着者よ、汝らなほモーセを神の聖なる僕であり、彼の書物は聖靈の御詔であると信ずるのである、その汝ら何を私に言ふのである。此の神の「御家」はまこと神と共に永遠では

ない、けれ共汝ら時間の變化を之に探して見出し得ないのだ、亦その程度に於て「天にあつて永遠」ではないか。そはそれが時間のすべての擴がりとそのすべての運行の周期を超越し、そして神に堅く繋るぞ甚だ好いことであるからだ。そして彼等も言ふのだ「さうである」と。然らば私の心が内的に私の神の讃美の聲を聽いた時、その彼に叫んだその中に、何を、然り、そのどの部分を汝ら虚妄だと言做すや。それは物質形がなかつた事で、形の何等なかつた所秩序なかつた所であることか。けれ共秩序のなかつた所時間の變化も何らある筈なかつたのだ。而もなほ此の「殆ど無であるもの」、それが全然無でなかつた限り、確かに「彼」よりであつて、その「彼」より、何でもあるもの如何なる程度に於てそれがあらうとも、皆出で來たのである。そして彼等は言ふのだ「此もまた我ら否定はしない」と。

第十六章

神の眞理を拒む者たちに對する覺悟

私の神よ、爾の眞理が私の靈に囁くその事ども、それをすべて眞事と認めるその人々に向ひ、爾のみまへにあつて今や少しく私は語つて見ようとする。そは此等の事を否定する人々はその思ふがままに自ら聾するばかり、哮らば哮けれ、私は努めて彼等を說き鎭め、そして爾の御言のために彼等の中に途を披いて見たい。けれ共若し彼等が拒んで私を斥けるなら、私の神よ私は祈り奉る、爾よ「願くは私に默し給ふな」、願くは、爾よ、私の心に眞理もつて語り給へ、そは爾は斯く語りますのである、そして私は彼等をして外にて獨り埃を吹き上げて、それを自分の眼に散入らしめんのみ、而も私自身は「私の室に入り」、そして爾に愛の歌をうたはばや、私の旅路に於て言ひ難き歎きをなげき、またエルサレムを記憶して之に向て私の心を擧げてである。然り、エルサレム是れ私の故鄕である、私の母である、そしてその上に治しめす爾御自身是れ光照者である、父である、保護者である、また夫で、すべて潔らな强き樂みで、また堅固な歡喜であり、言語の及ばぬすべての善事であり、而もすべてをくるめたものである、唯一の主權者で、まことの善そのものであり給ふ故である。否、私は此の散り亂れた狀態より此等の事を確めて「私の靈のはじめの實」既に擧り、また私の神よ、私のめぐみよ、爾が永久に之を確め固め給ふその所なる私共の最も愛する母の平和の中に、私があるすべてを爾の取入れ給ふまで、私は振返へされることないだらう。けれ共此等の眞理を虛僞なりと言ひ切らず、また聖なるモーセに由て錄された爾の聖書を私共と同じく服從されべき權威の頂上に置きながら、なほ或る事柄に就て私に反對するその人々に私は斯く答へるのだ。私共の神よ、私の告白と此等の人々の反對との間に立ちて爾御自身審者でありたまへ。

第十七章

「天と地と」の語の種々なる意義

そは彼等は言ふ、「成程 此等の事は間違ない、けれ共 モーセが聖靈の啓示に由て「元始に神天と地とを成し給へり」と云うた時それらの二つを意中に措いてはゐなかつたのだ、彼は「天」なる名の下で常に神のみ顏を仰ぐ靈的智的の被造者を、また「地」なる名の下で無形な物質を意味しはしなかつた」と。「然らば何を」と問へば彼等は言ふ、「その神の人は私共言つた如く意味したので、之は彼が此等の言辭で聲明したのだと。何をと問へば彼等は言ふ「天と地」との名の下で彼はまづ綜合的摘要的にすべての此の目に見える世界を言表しようとしたので、さうして後に幾日かを算上して詳細に整頓し、聖靈が斯く告げんと御思召したるままに、すべての事を一つ一つに說明する前提としたのである。そは彼の語り告げんとした人民とは、あの如くに粗野肉的であつたので、之に神のみ仕事の知識を委ねんとするは、只それを目に見えるものとするが適してゐると考へたからなのだ」と。併し彼等も「見えざる形なき地と及び黑暗の深みと」ある（即ち後文示す如く之よりすべて私共の知る此等の目に見えるもの皆あの幾日かの間に造り出されまた整頓されたのであるが）その言の下にこの定形

なき物質が理解されるのも穴勝不合理ではなからうとのことに同意するのである。

又若し或る者あつて、「此の目に見える世界とその中に最も現はれて明白なるすべての此の自然と、即ち之が屢〻天地の名で呼ばれるのであるから、それが創造され完全されたのである、その原であつた物質の無形な混沌の狀態が此の理由で最初に「天と地との名の下で傳へられるのである」と言ふならどうだらう。もし又更に或る者あつて言ふならどうだらう、「見えざると見えるとの自然をまことと天地と呼ぶのもその當を得ないでない、それで神がそのみ智慧に於て、即ち元始に於て造りました宇宙の創成、之が此等の二語の下に包含されるのだ。だがそれにも拘はらず、萬物これ神の本體より造られたのでなく、無からである、（なぜなら彼等皆神と同じなものでない、或は神の永遠のみ家の如く永續するにしても、或は人間の靈や肉體の如く變化されるにしても、皆その中に變化すべき本性を有して居るからだ）、その故に目に見得ると目に見得ないとの（まだ形成されない而も形成され得べきである）すべての物の共同物質で、それから天と地とが造られたので、その形成されるや即ち見えないと見えるとの被造物であつた、その物質が見えざるまた定形なき地と淵の面なる黑暗とに與へられたる同じ名を以て呼ばれ、只此の區別を以てであつた、即ち見えざる形なき地と云へるに由て、何かの形を定められる以前の形體的の物質が理解され、また淵の面なる黑暗と云へるに由て、その無限な流動狀態が何かの制限を蒙る以前、或はみ智慧より何かの光りを受ける以前のその靈的物質が理解

されるのである」と。

茲に尙誰でも言はうとすれば言へることが殘つてゐる、「私共が元始に神天と地とを成し給へりとあるを讀む時、見えるにせよ見えないにせよ、既に完成され又定形された自然の萬物がその天と地との名の下に意味されてはゐない、只まだ形ない事物の始原で之より形狀と構造とを受くるに適した原料が、此等の名に由て呼ばれたのだ。なぜならその中に今は秩序を以て整頓された、一は靈的なる、他は形態的創成の謂ゆる天と地と呼ばれるその物が、その品質又は形狀もつて識別されないで、混沌として含有されてゐたのであるからだ」と。

第十八章

聖書に對する各自見解の寛容

此等の事をすべて聽きまた精思して、私は言爭(いさかひ)することを欲しない、そは「言爭(いさかひ)は益なくして聞く者を滅亡に至らしむ」、けれ共律法(おきて)は道理に循ひて之を用ひば教訓を與へて善きものである」。そは「その目的は清き心と善き良心と僞りなき信仰とより出る愛にある」からだ。然り、私共の「師」も「あの二つの誡命(いましめ)に律法全體と預言者」を懸らせるを知り給うたのだ。そして祕(かく)れて私の眼の光であ

ります私の神よ、此等の事を熱心もつて告白しまつるその私に何の害あらう、此等の言に下されるそのいろいろの見解も、それがすべて眞理であり得るからだ。で、私も亦他の人が著者が考へたと考へるその考へを異にするとて何の害あらう。まことと私共讀者はすべて私共が讀むその著者の眞意を踪跡し、そして之を理解しようと努めるのだ。そして彼は語りて眞實だと信ずるから、私共が虛僞であると知り又考へるやうな何かの事彼が言つたと判斷するを敢てしないのだ。だから各人皆聖書に於て著者が理會したその同じ事を理會しようと努めるその間、もし誰かあつてすべて正直語る心の光なるその爾が彼に眞理であると示したまふそのやうに理會し、そしてそれが彼の讀むその著者の理會した所でないとても、只この眞理でないばかり、彼も亦一の眞理を理會するのである。之に何の害あらう。

第十九章

自明の眞理の事

そは、主よ、爾が天と地とを造りましたるは眞理である、又元始とは爾の御智慧であつて、それにあつて爾はすべてを造りましたるも眞理である。そしてまた此の見得る世界は、短く言うて、すべて造られまた創成された萬象を包むこの天と地と、之が大部分であるのも眞理である。更にまた何でも

變化あるもの、それは何か形に缺陷あるのを私共に理會させるので、それに由て別の形をうけ、或は變化轉移するのであるのも眞理である。一方また凡そ不變な「形」に縮るものは、たとひ變化すべきであるも、恰も變化せざるものの如く、時間の支配うけないのも眞理である。またあの殆ど無である無形狀態は時間の力の及ばないのも眞理である。また何かの物の由て造られるその原物質が、それより造られるものの名に由て何かの仕方で呼ばれ得るのも眞理である、それ故に天と地とが由て造られたあの無形狀態が「天と地と」呼ばれ得たのである。また形を得たる諸物の中で何等の形なきに似たるもの「地」と「深み」とよりもつと近いものないのも眞理である。また晉にすべて創められ造られたものばかりでなく、なんでも創められ造られ得べきもの是れ爾が造りましたので、「すべてのもの爾より出たのである」。最後に何でも無形であつたその中より造られたもの、それはその造られた以前は卽ち造られたのでなかつた事も眞理である。

第二十章

「はじめに神天地を成し給へり」との語の諸種の解釋

爾にその靈眼を披かれて斯やうな事を見ることを得、そして爾の僕のモーセを眞理の聖靈に於て語

つたと動かず信ずるその者たちは、此等の眞理を疑はない。その眞理の中より一人は一を取つて言ふのである。「元始に神天と地とを造り給へり」と、卽ち彼御自身と共に永遠なる彼の「御言」に於て神は睿智的なると官能的なると、或は靈的なると形的なるとの物を造り給うたのだと。また一人は言ふのだ、「元始に神天と地とを造り給へり」と、卽ち彼御自身と共に永遠なる彼の「御言」に於て、神は此の形體的世界の大積圜とそれが包含するすべての此の目に見え及び知られる諸物を造り給ふたのだと。また一人は言ふのだ、「元始に神天と地とを造り給へり」と、卽ち彼と共に永遠なる「御言」に於て神は靈的及び形體的諸物の無形の物質を造り給うたのだと。又は一人は言ふのだ、「元始に神天と地とを成し給へり」と、卽ち彼御自身と共に永遠なる彼の「御言」に於て、神は形體的な物の無形な物質を造り給うたので、その中に天と地となほ混沌として存在したのだが、それが今は區別されまた定形されて、今日私共此の世界の積圜に於て見るのであると。又一人は言ふのだ、「元始に神天と地とを成し給へり」と、卽ち創成構造の極の最初に於て、神は無形な物質を造りたので、それ自體の中に天と地と混沌として包含されてゐたのだ、そしてその中より形成されて今や彼等はその中にあるすべての物と共に展開し、そして目に見えてゐるのであると。

第二十一章

「地は見るべからずあつた」との語に就ての種々な解釋

それからその次の語の解釋に就ては、それらの眞理の中より一人は自らその一を取つて云ふのだ。「されど地は見るべからずして定形なく黑暗淵の面にあり」と、卽ち神の造りましたる形體物はまだ序もない光もない形體物の無形な物質であつたのだと。また一人は言ふのだ、「地は見るべからずして定形なく、黑暗淵の面にあり」と、卽ちすべて「天と地」と呼ばれる所のもの、まだ無形な黑暗な物質であつて、それから形體的天と形體的地とが彼等の中にあつて、私共の形體的感覺に知られるすべてのもと共に造られたのであると。又一人は言ふのだ「地は見るべからずして定形なく、黑暗淵の面にあり」と、卽ちこのすべて天と地と呼ばれるもの、なほ無形で黑暗な物質であつて、それより睿智的天、卽ち別名天の天と呼ばれるものと、及び地卽ち此の形體的物象界、卽ちその名の下に亦形體的天をも包含されるものが包含されるものが造らるべくあつたのだ、一言以て覆へば、それよりすべての見るべく又見るべからざる萬物創成さるべくあつたのだと。又一人は言ふのだ、「地は見るべからずして定形なく、黑暗淵の面にあり」と、而も聖書はあの無形狀態を「天と地と」の名を以ては呼ばなかつた、けれ共彼は言ふのだ、あの無形狀態は既にあつて、それを彼は定形なくして見る可らざる地と及び淵の面にある黑暗と呼んだので、彼はそれに就て豫め言うてあつた、神は「天と地と」、卽ち靈的と及び形體的とのものを造り置き給うたのだと。又一人は言ふのだ、「地は見るべからずして定形なく、黑暗淵の面にあり」と、卽ち或る種の無形な物質は既にあつて、それより聖書は前に言うた「神天と地とを造り給へり」と、卽ち世界の全形體的積團であつて、之が上下の二大部に分たれ、その中にすべての普通で常知の萬物散布されてあるのであると。

第二十二章

創世記に錄されずも尙神より成されたものありとは信ずるに足るのである

そは誰かが此等の最後なる二說に向て論駁を試みやうとし、そして言ふことあるか、「もし卿たち此の物質の無形狀態が卽ち「天と地と」の名もつて呼ばれる如くであると容認しないなら、では神が天と地とを造りますに、何かその造り給はぬものがあつたのである、そは聖書は私共に神が此の物質を造りましたとは告げてないからだ。只私は之が「天と地と」の名に由てか、或は「元始に神天と地とを造り給へり」と云はれてる時に、その「地」のみの名に由てか意味されると理會する外ないのである。で、次の「地は見る可らずして定形なし」とあるに於て、斯う無形な物質を呼ぶのが彼の聖旨ではあつたと云へ、私共は何等他の物質を理會するでない、只神の造りましたもので、それは上に錄して「神天と地とを造り給へり」とあるそれであると理會せんとするのだ。するとその最後二說の孰

れかを支持する者は之を聽いて答へるだらう、私共勿論此の無形物質が神に由て造られたので、すべてのものを造り給ふ神は甚だ善でありますことを否定はしない、そはすべて成され造られたもの、それは大なる善であると私共肯定するのだから、それで成され造られ得べきやう造られたもの、その善にこそ劣れ、なほ善であるのである。されど私共は言ふのだ、聖書は神が此の無形狀態を造りましたとは錄してゐない、その他にも澤山錄してないのがある如くだ、例せば「ケルビム」と「セルビム」と、及び使徒が明かに擧示した「位や支配や政治や權威」の如きで、すべて神の造りましたものなる最も明白であるのである。或は若し彼は「天と地とを造り給へり」と云はれてある中に凡てのもの包含されて居るなら、「神の靈その上を覆へり」とある その「水」に就て私共何と云はう。そはその水が「地」と云ふ語の中に包含されるなら、然らば水は如何にも美しいのであるから、どうして「地」の名で無形な物質が意味されることできやう。或はもしさう取られるなら、なぜその同じ無形狀態の中から穹蒼が造られてそして天と呼ばれたと錄され、而も水が造られたとは錄されなかつたらう。そは水は無形で見えず居るものでない、私共はそれが斯くうつくしく流れてゐるのを見るからだ。けれ共もし神が「天の下なる水に皆一所に集れ」と宣(のたま)うて、その時水がその美をうけたので、その一所に集まるその事それが水の形成であるならば、天の上なるその水に就ては何と答へられるだらう。若し無形であるならば、それはそやうな貴い場所を享くるに値しないであつたらう、または如何なる言に由

てそれが造られたかも錄されてないからだ。若し然らば神が造りました事に就て創世記が默して、而も神が造りましたその事、それを確かな信仰と基礎堅い理會とが疑はず、又は如何なる教義なりと苟くも思慮あるもの、水は創世記の中にこそ錄されてあれ、それはいつ造られたか私共見付けないからと云つて、その理由で之が神と共に永遠であるとは敢て教へることをしないなら、なぜ、眞理は私共を教へるのだから、私共はあの無形な物質、卽ち聖書が「見る可らざる形のない地」と呼び、及び「黑暗の淵」と呼ぶ所のもの、それは神に由て無から造り出されたので、此の記錄がいつ造られたか、それを省略するに拘はらない、決して彼と共に永遠ではないのであると理會せぬだらうと。

第二十三章

聖書の見解にある二つの種類の疑問

そこで此等の事が聽取され又看取されて、私の才能の弱きが故に、私の神よ、それを爾に告白しまつる、爾は知りますのだ、物事まことの報道者に依り言もつて物語られる時、玆に二つの種類の不一致生ずるのを私は見るのだが、一はその事の眞僞に關してで、他はその報道者の意味に關してである。そは私共は一方創造に就て事の果して眞なるやと尋ね、他方爾の信仰のすぐれた奉仕者なるモー

セが、その讀者或は聽者をして此等の言に由り、何を理會させようとしたかである。で、その第一の種類に對してはすべて僞りであることとそれを眞理として知ると自ら想ふ人々、彼等をして私より去らしめよ。また第二に對しては苟くもモーセが虛僞なる事を傳へたと自ら想ふ人々、彼等をしてすべて去らしめよ。けれ共私は、主よ、爾の眞理をもつて養ふあの人たちと爾にあつて一つとなり、彼等と共に愛の寛大に於て自ら樂み、そして私共爾の聖書の言に一緒に近づき、爾がその筆もつて之を傳へしめたその爾の僕の意味した所に由り、その中に爾の聖旨を求めばや。

第二十四章

孰れがモーセの眞意なる之をその書物の中に判定することの困難

けれ共此等の言を研究して、之が種々異つて解釋せられ、多くの眞理に別れると見ゆるその中で、私共の中誰か此の意味これモーセの考へた所である、又は之がその物語で彼の理會した所であつたと、確信もつて肯定するほどに發見するあらうか。そは見よ、私の神よ、爾の僕の私は此の著書に於て爾に向ひ、私の告白の供物を誓ひ、そして爾のめぐみに由て爾にその誓ひを償ひ得んと祈り奉るその私、爾の不變の世界の中に凡て見え得るものと見得ざるものと、それを爾が造りましたと確信する

その確信もつて、亦モーセが「元始に神天と地とを造り給へり」と錄した時、卽ち彼も此れ以外に何等意味しなかつたと確信することできやうか。否、なぜなら彼が此等の事を錄した時に此れを考へてたかは、私が爾の眞理に於てそれを確かであると見る如くには、彼の心に於ては見ないのだ、是れ彼も「元始に於て」と言つた時は神の創造開始をその考へに持つてたらう、而も「天と地とを」の語に由て、此處にてはそれが靈的或は體的どちらにてもあれ、彼は何等の定形したまた完成したでない本然で、而も兩者共に未成でまた無形であつたことを意圖したであるだらう。そは私は視るのだ。此の二つのいづれもが言はれたにしても、それは眞實に言はれただらう、けれ共二つの中の孰れを此等の中で彼が考へてゐたか、それは私は視ないのだ。只それが此等のどちらで、或は私の擧示しなかつた何かの他の意味であつたにせよ、此の偉人がその心で見た事それを彼が此等の語で言うた時、彼は卽ち眞實に之を見てそして適宜に之を言表したのだと私は疑はない。

第二十五章

見解互に異つたとて相容るるは只愛あるのみ

然らば私がモーセは卿たちの言ふ如くでない、私の言ふ如くに考へてたと言うとても、誰も私を妨

げすまい。そはもし誰かが私に卿が彼のことばより推定する所、それをモーセが考へたとどうして知るかと問ふならば、私は善意を以て之を取り、そしてたとひその人容易に屈せずあるとても、多分私は彼以上である如く、或はもつと大なる立場にある如くにして答へるだらう。けれど彼が「モーセは卿の言ふ如くでない、自分の言ふ如きの意味であつた」と言ひ、而も私共の各自の言ふ所共に眞理であるを否定しないなら、貧しき者の生命なる私の神よ、爾の御胸には何等の反抗あることない、願くは願くは私の心に融和の露をそゝぎ給へ、私が之を私に言ふそやうな人たちに向て忍んで悚へんためである、彼等が神的である、又は彼等の語る所爾の僕の心に徹してだと云ふのでない、彼等が傲慢でモーセの所思を知らず、自分の意見を愛してであるからで、それも眞理である故でなく、只自分の意見であると云ふ故のみであるからだ。もしさうでないなら、彼等は倖しく他の眞實な意見をも愛して、私が彼等も眞理を語る時は、その彼等の言ふ所を愛する如くであるだらう。是れそれが彼等のである故でなく、眞理であるからで、即ち眞理である故にそれが彼等のものでないと云ふに基づくからである。その故に若し彼等も眞理である故にそれを愛するなら、それは共に彼等のものであり、私のものでもあり、眞理を愛する者たちに共有であるのである。然るに彼等はモーセの意味したのは私の言ふ如くでない、彼等の言ふ如くであると爭つて言張るのだ。だからそれを私は好まない、又愛しないのだ。そは假令さうであるにしても、而もその彼等の輕卒は知識より出るのでなくて暴勇よりであり、

深慮よりでなくて傲慢それを生んだのであるからだ。故を以て、主よ、爾の審判は怖ろしくある、爾の眞理は私のものでもない、彼等のものでもない、また誰のものでもない、而も爾の召に由て公然之に與かるを許されたる私共すべてに屬するので、私共は亦之を自分に私有視すべきでない、之を取去られないためであると、爾の嚴しき戒めうけて居るのであるからだ。そは爾がすべての享有に供したそのものを、强て己れに歸せしめ之を私有視せんとする人は、これ共同して己れにも屬するそのものより追去られるのだ、即ち眞理より虛僞へとである、「虛僞を語る者はそれを己れより語るのであるからだ」。

主よ、聽きたまへ、爾は最も善なる審者でおはします、然り、眞理そのものなる爾よ、私が此の反對言ふ者に言はんとすること之を聽き給へ、そは爾のみまへにあつて、また愛を目的として爾の律法を正しく用ゆるその兄弟たちを前にして私は語るのである。私の彼に言ふこと、若し御旨に叶はば、之を聽いてそしてみそなはせ。そは此の親密なまた平和な言を私は彼に返すのである、「若も私共双方卿の言へることと之を眞理と見、また双方私の言ふこと之を眞理であると見るならば、私は卿に尋ねるのだ、私共どこにそれを見るのであるか、私が卿に見るのでない、又は卿が私に見るのでない、共に不變であります眞理自身に於てで、それは私共の靈以上であるのである」と。だから私共は私共の神なる主の光そのものに就て爭ふのでないのに、なぜ不變の眞理が見られる如くに、私共見ること

できないその私共の隣人の考へに就てお互に爭ふのであるか。その故に若しモーセ自身が私共に現れて「此が我が意であつた」と言うたとする、私共にそれが見えるでない、只信ずるだけであらう。だから私共は「錄されたる所を踰えて、此をあげ彼を貶して互に誇るをするな」、「又私共は心を盡し精神を竭し、思を盡して主なる神を愛し、又おのれの如くに隣人を愛しよう」。で、此の二つの愛の教訓を心にして何を此等の書物でモーセが意味したりとも、その彼の意味した事、之を私共信ずるでないならば、是れ神が私共に教へ給うた事を外にして、私共と同じ僕の心を徒らに臆測し、そしてその神を僞りものにするのである。されば此等の言辭の中より抽出し得べき最も眞なる意味の斯くも澤山なるに、輕率にもその中孰れかがモーセの主なる意味なりと確言し、そして有害な抗爭もつて、私共今闡明せんとして居るその彼の言も皆只彼が主眼として語らんとしたのである愛そのものを傷めんとする、これ如何なる愚かなことであるだらう。

第二十六章

聖書の言は含蓄に富むのである

而もまた、私の神よ、爾は卑しき中に私を引擧げ、また私の勞苦の憩ひであり、また私の告白に聖

耳を傾けて、私の罪を赦し給ふのだ。まして爾は私に命じて己れの如くに隣人を愛せよと宣うた。その故にこそ私は考へる、もし私がモーセの時代に生れて、そして永い幾年代すべての國民を益し、また世界の到る處かやうな權威の高所より、すべての虚僞なまた倨傲な教旨に打克つべくあつたあの書物の述作されんため、私の心と舌との奉仕を以て爾が私をあの役目に置き給うたとしたら、私が自ら與へられんと爾に望みまた願ふ所の才能のそれより劣つたもの、それを爾が爾の忠義な僕なる彼に與へましたとは、私は信ずることできないのだ。然り、若し私がモーセであつたなら（そは私共凡て同じ土塊よりできたので、爾が聖念にとめ給ふのでなくば、人とは何であらう）、で私がモーセがあつたその人であつて、爾に由て創世記の書物を述べよと命ぜられたなら、その時私は爾が如何に創世したまひしや、之をまだ理會できない人々もその能力及ばないとして棄去ることないやう、また之に達した者たちは彼等が思想で到着したその眞なる意見のどんなものであらばあれ、それを玆に見出してあの爾の僕の僅かの言辭の中に空しく看過することないやう、更にまた他の誰かの人が眞理の光に由て他の意見を見出したりするなら、彼も亦此等の同じ言辭の中にそれを見出し得ることに失望しないやう、然り、私はすべて表示の力と文體の活用とに周到を極めんと願つたであるだらう。

第二十七章

簡單で而も含蓄の多きは聖書の特色である

泉はその範圍に於て狹いとも、多くの川の源となつて大きな區域の上に豊沃をそゝぎ、却てあの同じ泉よりその源を發すれ、廣い地方を流れた川々のどれにもまさるのであるその如く、爾の御業のあの敍述者の物語は、之を取つて談義する多くのものたちに稗益與へたが、その言語の狹い不足と見る中より、最も清冷な眞理の川に流れ溢れ、それより各人その力に從つてその談義の長い敷衍に由り、此等を主題としては、一人は一つの眞理、また他の眞理と、各々己れに眞理を引出すことできるのである。そは或る者たちは彼等が此等の言を讀み或は聽く時に、神は無限の力をもち誰かの人か、或は何かの積塊ででもあつて、之が或る新たな又突然な決心起し、自分以外に恰も多少の距離に於てである如く、天と地と、一は上一は下にあつて、その中に萬物包含せられる二つの形體を造りましたのだと考へる。そして「神が成れよと言うて成れり」とあるを見て、その言は始まりてまた終り、時間の中に響いて過去つて了つた、そしてそれが去つた後、その「あれよ」と命ぜられた諸物が出で來りたとなし、何でも此の種類で此の物質界に就ての人間知識が思ひ付かせる事、それに根據して概念抱くのである。まこと此等の人たちはまだ幼稚でまた肉的でそのいぢらしさ、此の種類な簡單の言に依りて、恰も母の懷に於ての如くに抱擁され、而もその中に彼等の信仰は健全に築き上げられて、それに由てその周圍に眼で見る此のうつくしき萬象の自然界、之は即ち神が造りましたのだと露も疑はず信

じてゐるのである。で、此の言をもし誰かあつて餘りに簡單だと輕蔑するならば、彼の脆い傲慢心彼をして敢てその育ての舊巢を脫出せしめ、却て悲慘な墮落のあるのだらう。私の神よ、誰かの道行く者がそのまだ翼成らざる雛鳥を蹈付けることないために憐みて、そして爾の天使送りてその元の巢に戻らしめ、それが飛得るまで生命あるやうさせ給へ。

第二十八章

聖書は多樣な意味にて解釋され得る

然るにまた他のものたちあつて、彼等に取つては此等の言がもはや巢ではない、而も綠の深い而も果實垂れこめた樹蔭である、そして彼等はその隱れてる果實を見てよろこび掛り、嬉々として漁り探してもぎ取るのだ。そは彼等は此等の言を讀み或は聽いて、すべての時間は過去も未來も爾の永遠な又不變な存在によりて超越され、而もなほ時間の中にあつても爾の造り給ふでなくば何等のものもあるのでないと見るのである。してその爾の意思是れ爾のいますと同じであるのだから、即ち爾御自身が何等意志に變化の生じたのでなく、又はいままでなかつた何かの意志の起つたでなくしてすべてのものを造りましたのだ。そして此等のものは爾御自身より（それはすべてのものの形であるのだが）

爾御自身の像に肖せられて造られたのでない、而も無、即ち爾御自身の像をもつて形成されまた皆甚だ善に造られべきその無形なまた無像狀態よりで、それが或は爾の周圍に永續するものであれ、或は次第を以て時間と場所とで相離され、此の萬象の美しい變化を造りまた受くるものであれ、彼等は各〻その種類にあつて己れに與へられた限りの定められた可能の性に從ひ、遂には爾に歸一すべきである。そして彼等は此等のものを見、そしてでき得る小さな程度にあつて爾の眞理の光に浴して樂しむのである。

また他の者は「元始に神天と地とを造り給へり」とあるにその心を傾け、そしてその中に「御智慧」、即ち「元始」を見るのである。それがまた私共に語り給ふからである。また他の者は同じ言にその心を傾けて、そして「元始」と云ふ言に由て創造された萬物の始原を理解するのだ、即ち「元始に彼造り給へり」とは、恰も彼は第一に造り給へりと云ふ如きなのだ。そしてその「元始に」とあるそれを爾の御智慧にあつて爾は天と地とを造り給へりと云ふ意に解するそのものたちの中に、天地の以て造らるべくあつたその物質を、即ち茲に「天と地と」と呼ばれるのであると信ずるがある。また他の者は、即ち既に形成され又區別された物象であると信ずるがある。更にまた他の者は、是れ一の形成された物象で、「天」と云ふ名で靈的物質を意味し、また「地」と云ふ名で形體的物質を意味すると云ふがある。なほ「天と地と」云ふ名でまだ定形ない而もその中より天と地とが造らるべくある

物質を理解する彼等も、必ず一途のみにそれを理解しない、而も一はその中より睿智的な存在者と及び感覺的な被造者が完成されべき物質と解し、他はそれよりその中に此の見え得る普通な物象界をその巨大な胸に抱有する、此の肉感的な大塊が造らるべくあつたとのみ解するのだ。またその被造者たち、玆に天と地と呼ばるべく既に統制され整置されたと信ずる彼等とて、同一には理解しないのだ、而も一は見えざるものも見ゆるものも共に包むとなし、他は見えべきもののみで、その中に私共が此の輕い上なる天と、及び黑暗の下なる地と、及びその中に含まれたるすべての物とを見る、それを指すのである。

第二十九章

幾多の種類にあつて此のもの彼のものより先に存在し得るか

けれ共「元始に彼は造り給へり」とあるを、「彼は第一に造り給へり」と云ふ意味より何等外に受入れない者のみ、只「天と地と」を天と地と、卽ち睿智的及び形體的なる創造界全部の物質に就てであると眞に理解することである。そは若し彼がそれに由て宇宙を既に形成されるとして解しやうとするなら、正しく彼は此の質問受けるのだ、「若し神が最初に此を造り給ひしなら何を後に造り給ひしや」

との事である。そして宇宙の後には彼は何物をも見出さぬであらう。そこで彼は意ならずもまた他の質問を發せられるのだ、「どうして神は此を最初に造りてそして後には何も造り給はぬだらう」と。けれ共彼が神は最初に物質を無形に造りて、それから形成し給うたと云ふ時には、そこに何等の不合理ない、若し何が永遠に由て、何が時間に由て、何が選擇に由て、また何が本質に於て先立つか、之を只識別するに彼が資格あればである、即ち神は萬物の前でありますから永遠に由てで、花は實の前であるから時間に由てで、また實が花に先立つは擇びに由てで、音が歌曲に先立つは本質に由てである、そして此等の四つの中第一と最後とに擧げられたるは非常な困難もつて理解され、中の二つは容易であるのである。そは、主よ、爾の永遠は不變であつて變化するもの造りつつある即ちその前であるので、之を見ること是れは稀れなる又非常な高い眼力であるからだ。またどうして音が歌曲の前であるか、之を識るは大なる努力なくしてはできないことで、如何にも鋭敏な理解であるのである。なぜなら歌曲は形成された音響で、そして形成されないものも存在し得る、然るに存在しないものそれは形成されることできないからである。だから物質は造られたその物以前にあるのだ、それ自らむしろ造られたので、それが之を造るのでない。又はそれは時間を隔ててその以前にあるのでもない。そは私共は時間に於て最初先づ歌ひはせずに形のない音を出し、そしてそれから歌の形にその音を當嵌め組立てること、恰も箱や皿が造られる木や銀と同じにはしないのだ、是れ斯樣な材料は時間を以てもそれから

造られる器具に先立つのだ。けれ共唱歌にあつてはさうでない、そはそれが歌はれる時音は聽かれるので、初めに無形な音があつて、それが後に歌に造られるのではないからだ。是れ音は作られるや忽ちに過去つて、誰もそれを呼返しそして技術をもつて組合せることできないのだ。だから歌曲はその音に集中されて、その音即ちその物質であるのだ、そして之がげに歌曲と爲り得るために作られるのだ。で、その故に私の言つた如く音響の物質は歌曲の形以前にあるので、その以前には如何なるその力もつてもそれを歌曲にすることないのだ、音は決して歌曲の作爲者でなく、只何かの形體的なもので、それより歌曲を作曲して歌唱する靈に服屬するのであるからだ。さりとてまたそれは時間に於て最初なものでない、歌曲と共に一緒に歌ひ出されるのであるからだ。尙また選擇に於ても最初ではない、歌曲が音になるために形をうけるのでなく、音が歌曲になるために形をうけるのであるからだ。即ち此の例に由り、誰でもできる者よ、如何に諸物の物質が最初に造られて、そして「天と地と」呼ばれたか、「天と地と」がそれより造られたからであることを理解するだらう。而も時間に於てそれが最初に造られたのでない、なぜなら物の形が時間に起原を與へるので、それはまだ形がなかつたからだ、けれ共今や時間にあつてその形と共に私共の感覺に映り、その對象となるのである。而もなほ此の物質に就ては何等語られ得ない、只時間に於て先立つとは云へ、形成されたものは形のないものよりはすぐれて居り、また造物主は何かを造らうとして無より之を曳き出したのでありますから、そ

の神の永遠に由て先立たれ、で、その價値に於ては最後であるのである。

第三十章

聖書を說明せんとするは須く愛の精神もつて之に當るべきである

斯く眞なる意見の區々なるに當つては、只眞理自ら此の間に和合を生ぜしめよや、そして私共の神よ、私共に御慈悲垂れ給へ、私共が「その命令の目的淸き愛なるその爾の律法を正しく用ゐんためである」。で、若し誰かが私に此等の中孰れが爾の僕のモーセの意味であつたかと問うとして、之に私は「知らぬ」と爾に告白しまつるでないならば、それは苟くも私の告白の言辭でないのであらう。而もなほあの肉的なるものを除いては、私が必要と見えたもの、之に就て語つたが、此等の意見皆眞理であると私は知るのである。そしてあの望みある幼き者たちをも、爾の聖書の御言は卑くして高く簡にして豊かなのである、之を恐怖させることあらしむるな。そして私は告白する、私共すべて此等の言の中に傳へられる眞理を見て之を言ひ表はすもの、若し之に渴して虛妄でないならば、皆互に相愛し、そして一緒になつて眞理の泉なる私共の神なる爾を愛さばや。然り、私共は爾の聖靈に充ちて此の聖書を書き述べた爾の僕を敬はばや、そして爾の啓示により彼が此等の事を錄した時、彼は殊更に

彼等の中に眞理の光と豊富な稗益とのすぐれることを意圖したのだと私共は信ずるのである。

第三十一章

誠意の解釋でさへあるなら皆モーセの原意に包まれてあるのである

それで誰かが「モーセの意味は我が思つた通りだ」と云ひ、又他の者は「否、我が思つた通りだ」と云ふ時は、私はもつと敬虔もつて「若しどつちも眞理なら、なぜ、どつちも彼の意味してゐたのでなかつたらう」と云はうとするのだ。そして若し第三第四と他にもなほ此等の言辭の中に他に眞理を搜すなら、なぜ一つでありますか神は、多くの者たちに各立場を異にして多樣に事の眞理を見るやう、殊更聖書を斯く鑄成してあるのだと云ふこと、誰か之を信じられないだらう。そはたしかに（そして私は大膽に之を心より語るのだ）若し無上の權威をもつため、私が何かを著述するあるならば、私は單に自分の所思を全く明瞭に書下して、そして敢て間違つたでなくて私の心を害させるでないやうな意味にしても、それが一切他に取られる餘地ないやうするよりも、むしろどんな眞理でもその事に就てなら誰もが考へ付かれるやう、その語の中に意味をもたせて書きたいと欲するのだ。だから、神よ、爾が亦あの偉人にやはりそやうな筆を與へ給うたのであつたのだとは、之を私は信ぜぬ程どうし

て輕率であり得やう。彼が此等の言を書いたその時は必ずやその中に私共が見出し得た所の、又はまだ見出し得なかつた所の、然り、まだ見出し得ない、けれ共遂に見出し得べき所のあらゆる眞理を皆識つて、そして考へゐたのであつたに相違ない。

第三十二章

すべての眞正な意見は皆聖靈に由て豫め見られてあつたものである

最後に、主よ、爾は神でありまして、肉と血とではありまさぬ、で、若し人間眼力劣りて此等の言を語つたその彼も、或は多くの意味の中で何か一つを考へたのであつたにせよ、爾御自身此等の言に由て來るべき時の讀者らに啓示せんとし給ひたるその事、それが何であらうと爾の善なる聖靈より隱さるべきであつたらうか。只あの彼の考へた事それが一つであつたなら、その一つこそすべての中の最も高いものであらしめよ、而も、主よ、或はその同一物であらうとも、或は爾の御旨である他の如何なる眞なるものであらうとも、爾は私共に啓示し給へや。即ちさうして或は爾のあの僕に示し給うた如きのその眞理であれ、或は此等の言で與へられる何かの他の眞理であれ、それを私共に見出さしめて、爾よ、私共を養ひたまへ、誤謬が私共を詐くことなからせよ。見よ、私の神なる主よ、此の儘

かの言である、而も如何に私は多くの筆を費したであつたらう、私は爾に祈り奉る、然り、此の仕方もつてでは、如何なる私共の力か、或は如何なる時間か、爾のすべての書物のために充分であるだらう。それで願くは此等に於て私がもつと爾に簡單に告白し、そして澤山意見の起り得る所澤山の意見の起らうとも、爾が私に靈感せしめるであらうその中のいづれか一の、眞なる確なるまた善なる解釋を私の擇ぶを允し給へ、私が爾の役者(えきしや)の意圖した所の事と云ふならば、それが正しいまた最善のものであるとは、これ私の告白の規則であるからだ。即ち之に向て私は努力すべきである、そしてそれに若し到達できないとも、なほ爾の眞理がその言に由て私に告げんと欲し給ひし所、それが欲せしまま に亦彼に啓示し給うたのであると、私は言はんとするのである。

第十三卷

此の卷亦前卷をうけて、創世記第一章を解釋したるもの、地上の完成卽ち神の善を表示したるにして、その中に三位一體の神祕と及び神の敎會の原理と包含せられることを說いたのである。

第一章

神に呼びまつる

私の慈愛であります神よ、爾は私を造り給うて、爾を忘れまつるその私を尙忘れずゐ給うたのだ、その爾に私は呼びまつる。然り、私は爾を私の靈の中に呼び迎へんとするのだ、之が爾に感得されて爾を慕ひまつり、爾に準備されてゐるからだ、願くは私を見棄て給ふな、私は今爾に呼びつつあるのだ。まこと爾はいつも私の呼ばざるに先立つて、種々な仕方に依り、繰返し私を呼んで督促し給うた、私が遠くより爾に聽いて同心され、私を呼びますその爾を呼びまつらんためであつた。そは、主よ、爾は私のすべての罪績を抹殺したまうた、私が以て爾より墮去つたそのことを私の手に報いたま

ふことないやうにであつた。また爾は私のすべての善業に先立ち給うた、爾が以て私を造り給うたその爾の御手のみ業に報いまつらんためにであつた。なぜなら私が存へざりし以前に爾はましましたのだ。たとへ爾が何に私の爲るを許し給うたれ、私は何んでもないのであつたからだ。而も見よ、私は爾の御めぐみより出でて爾が私を造り給うたその事と、及び私を造り給うたその所以とに先立つのである、是れ爾は私を要し給はなかつた、私の主よ、私の神よ、否、爾に有益でもあるかの如く、卽ち爾は働きて疲れ給うであるかの如く、爾に仕へまつるに於て何等の善で私はないのであるからだ。然り、或は若し私の奉仕を缺くならば、卽ち若し私が爾を耕しまつらずば、そのまま荒蕪に委棄されねばならぬ土地でもあつて、爾に對する私の奉仕を耕すでないならば、爾の權威の何が減少するかの如くで私は何等ない、只爾に奉仕しまた爾を耕しまつるのみ、爾より湧出るみめぐみに浴し、またそのみめぐみをうくるに適するものとならんためである。

第二章

すべての被造物皆神の至善より出でて存在する

まこと、爾の恩寵(みめぐみ)に充滿して爾の被造物は存在する。然り、斯く善である、而も何等爾に益するの

でない、または爾より出でたのだ、さりとて爾に等くあるのでない、けれ共尙爾より出でて造られ得たのである、存在せんためである。そは「元始に爾の造りました天も地も」何を以て爾にその價値あつたらう。爾が爾の御智慧に於て造りました靈と形體との兩界に、どこに彼等が爾にその價値あつたと言はしめよ。彼等が或は靈的或は形體的どちらであれ、その各々の類に應じて未成な又無形な、而もややともすれば過度放埒なまた爾に遠く似寄らぬさまに墮し去る狀態にあつてさへ、彼等はその出所に掛つて居るのである。然り、その靈的なる、形ないとは云へ、形定められた形體物にまさつて居る。又はその形體的なる、形ないとは云へ、全然無であるさまより好いのである。そして斯く無形として彼等は爾の御言に掛つて居るので、只その御言に依り形を與へられて爾の統一に呼返され、そして唯一綜合の至善でありまする爾より出で、皆極めて善もつて存在するのである、どうして彼等が無形でさへあつて、それが爾にその價値のあつたらう、爾よりでなくて此でさへ彼等はなかつたからである。

どうして形體的物質が「見えざるまた定形なく」さへあつて、それが爾にその價値のあつたらう、爾がそれを造りましたのでなくては、それが此でさへなかつたからだ。故を以てそれが存在しなかつたから、爾に造られる價値もある筈なかつたのだ。或は未成な靈的被造物が淵の如くなる眞闇黑で如何にも爾に似まつらず浮動してゐては、それが爾にどうしてその價値あり得たらう、只それがその同

一な御言に由て創成され、また「彼」に照らされ光となつて變化されたにあらざればである、然り、爾に等くではない、けれ共等くあるあの御像に合致してである。そは肉體に於けるが如く、存在すること必ずしも美貌であることと一つでない、さもなくば不具と云ふことない筈だ。またその如く靈的被造者が存在すると云ふこと、必ずしも睿智もつて存在すると云ふと一つでない、さもなくば不變に睿智であるであらうからだ。けれ共「常に神に近づき居るは善い事で」、それが爾に振向いて得たるその光、之を爾より離れて喪失し、そして黑暗の深みに似たる生命に復墮落することないためである。これ私共自ら亦靈魂あつて靈的の被造者であり、私共の光でありまする爾より離されては、その生命に於て時々闇であり、そして尙私共の殘れる黑暗の中に私共が爾の唯一でありますものにあつて「神の山のごとく爾の義」となるまで骨折らねばならぬのである、私共は「大いなる淵の如き爾の審判」であつたからである。

第三章

すべては神の恩寵に出るのである

爾が創造の元始に於て「光あれよと言ひ給ひ、そして光ありき」との事、之を私は靈的の被造者と

解して失當ではないだらう、なぜなら爾が光照し得たる一種の生命あつたからだ。けれ共それが爾に向て爾の光照しましたその生命を爾に求めまつる價値はなかつたその如く、今やそれがあつたとて亦爾に向て光照されるを求める價値もなかつたのだ。そはその無形な狀態が、それが光となりて而も單に存在するのでなく、その光照する光を仰いで之に縋りて存在するでない限り、爾に嘉とされることできないのであつた、卽ちさうしてそれが生存した、而も幸福に生存した、爾の恩寵に負ひまつりて、復惡にも善にも轉移され能はぬその狀に一層善化されたので、何等他に負ふのでない、そしてその狀や爾が唯一でありますから所である、爾のみ唯一單純にありますからで、爾は爾御自身の幸福そのものでありますのだ、爾に取つては生きると云ふ事一つであり、また幸福に生きると云ふこと、それが別事である如きないのでありますのだ。

第四章

神はその造りましたものを要し給はない

爾御自身善そのものでおはすのだ、その爾の善に、元來此等のもの全然あつたでなく、或は只「定形なく」してあつたに拘はらず、それが何の所要されたのだらう。彼等を爾が造りました、何等の所

要より出たのでなく、只爾の善の充ち溢れたよりで、爾は彼等を制抑しまた轉化させて形を取らしめた、それで爾の歡喜が滿足させられたと云ふのではない。そは爾は完全そのものでましまして、彼等の不完全な悅び給はない、故を以て彼等は爾に完成させられて爾を悅ばしまつりたのだ、爾が不完であつて彼等が完成させられ、それで爾がまた完成させられたと云ふが如きでなかつた。是れ爾の善なる聖靈はまことと「水の面を覆ひたり」とある、之が宛も水の上に休止したかの如く、それに由て支持されたのではない、爾の善なる聖靈が覆うたと云はれるその水は彼が彼自身の中に休止せしめたのだ。けれ共爾の朽ちざるまた變らざる御旨はそれ自身にあつて全然自足してゐるので、爾が造りましたその生命の上に覆うたのだ。しでその生命には生きると云ふと幸福もつて生きると云ふと、必ずしも一つでない、それ自身の暗の中に浮動しつつ生きることもあるからだ、卽ちそれに取つて殘るのは、それが由て造られた「彼」に向て變化され、そして「生命の泉」に飲んで益ゝ生命を得、更に「彼」の光にあつて光を見、益ゝ完うされ、强められ、また美くされんことである。

第五章

三位一體

見よ、茲に三位一體は朧げながら私に讃めるので、即ちそれは、私の神よ、爾でありますのだ、是れ、父なる爾よ、爾は「彼」にあつて、即ち私共の智慧の元始であり、爾より生れ、爾に等く、また爾と共に永遠でありますその「彼」にあつて、即ち爾の御子にあつて爾は天と地とを造りましたからだ。また私共は天の天と見えざる定形なき地と及び闇なる深みの事に多く言を費した、その靈的不具の狀態が「彼」より斯までの程度に生命を與へられ、更に「彼」の光照うけて美き生命となり、またその後「水と水とを分ちたる」、即ち「天の天」となつて、「彼」に轉化されたでないならば、それが徒らに動搖不定のさまであることを說明してである。それでその神の名に私は父を認め、また「元始」と云ふ名に於て彼が此等を造りましたその御子を認めるのだ。そしてその如く三位の一として私の神を信じつつ、私は更に爾の聖書の中に探し求めて、そして、見よ、爾の聖靈は水の面を覆うてゐましたのだ。見よ、茲に私の神なる父と子と聖靈との、すべての創造のその造り主がゐますのだ。

第六章

何故聖靈水の面を覆へりと書かれたるや

やよ、眞實語ります光よ、私は爾に向て私の心を擡げるのだ、私に虛妄を敎へますな、而もその黑

暗を攘ひたまへ。そして爾に願ひまつる、私共の母なる愛に由り爾に願ひまつる、何がその原因なる、何がその理由なる、なぜ「天」とまた「見えざる形なき地」と、及び「淵の面なる黑暗」とを擧げたる後、爾の聖書は斯くして遂に爾の聖靈を揭出したのだらう。斯くするこれ「彼」に就ての知識は「面を覆へり」とされて傳へられるが適當であつた故だらう、而も爾の聖靈がその面を覆へりと解せられんため、それが最初に擧げられたでなければ、斯くは言はれる筈なかつた。そは「彼」は「父」の上を覆ふことない、また「子」の上を覆ふこともない、また若し彼が何等の上をも覆ふでないなら正しく「上を覆ふ」と云はれることできないのだ。そこで最初に「彼」がその上を覆ひ得る所のものが告げられたのだ、そしてそこで「上を覆ふ」としか語られぬが適當なるその「彼」が擧げられたのだ。けれ共何故「彼」の知識が「上を覆ふ」とされるより以外には傳へられべき、それが適當でなかつたらうか。

第七章

聖靈の効力

此の故に、爾の使徒が語りて「我らに賜ひたる聖靈によりて爾の愛は我らの心に注げばなり」と斯う言うてる所、また「聖靈の賜物」に就きては彼はまた敎へて「愛のすぐれたる途を我らに示」して

居る所、また「私共がキリストの愛のことよなき知識を知り得んため、私共のためにその膝を屈める」所、そこに誰でも力に叶ふもの彼の理解をもつてその跡を追はしめよ。そしてその故に「彼」は元始よりいとすぐれて水の面を覆うてゐましたのだ。誰に私は之を語らうか、如何に險しき深みへと沈む邪悪な肉慾の重みを語らうか、又は如何にその水の面を覆ふ爾の聖靈に由て愛は再び引上げられるか。誰に私はそれを語らうか、どうしてそれを語らうか。そは私共が沈み或は浮上る、それは場所にあつてでない。何がもつと似寄つてあるだらう、何がもつと似寄らずあるだらう。それは情慾であらう、愛の心であらう、私共の靈の不淨が心の苦勞を愛して下へと流れ行くのと、また爾の聖靈「水の面を覆ふ」所の爾に私共己れの心を持上げ、そして私共の靈魂が「何等本體ない罪の水」を蹤行くであらうその時、あの此上ない休止に來らんため、その心勞絕無な休止を愛して私共を高くへ引上げる爾の爾の聖なる御力であるだらう。

第八章

靈の特異な幸福は之が神と一致するより來るのである

天の使たちも墮落する、人の靈魂も墮落する、して之に由て靈の全創造界を嚥まんとするあの黑暗

の深みなる淵あることを指示するので、あの元始の爾の御言なかりせばだ、即ち爾は元始より言ひ給うた「光あれ」と、そして光はあつて爾の天的なる國のすべての從順なる靈智者たちは爾に縋り、すべての變化あるものの上に不變に覆ひ給ふその爾の靈にあつて休息しまつつた、さもなくば天の天さへもそれ自體に一の闇黑な深みであつたらう、而も「今はそれが主にあつて光である」のだ、そはあの墮落して爾の光の着物を剝取られた時、その己れの暗黑を曝露したあの心靈たちのみじめな不安狀態に於てさへ、爾は如何に高尙に此等の理性與へられた被造者を造り給うたか、それが充分に啓示されるので、その彼等にさへ幸福なる休息與へるは只爾にあつてより外何ものも足れりとしないのである、然り、その靈自身にさへもそれはしないのだ。そは、私共の神よ、「爾は私共の暗きを照し給ふだらう」、爾よりして私共の「光の着物」は起き出るので、そして「私共の暗きは眞晝の如くであるだらう」。私の神よ、爾御自身もつて私に與へ給へ、私に爾御自身もつて戻したまへ、見よ、私は愛しまつるのだ、そして若しそれが足りずあるならば、私は益ゝ強く愛しまつるのだ、私は自分の生命が爾の抱擁に飛込むまでは、いくばくぞ尙私に愛の缺乏するや、之を測り知り得ないのだ、否、或は「爾のみまへのひそかなる所にその私の生命のかくるるまでは、私は退去ることをしないのだ。そして之を私は知るのだ。只爾にあるの外私は咀ふべきだと云ふ事をだ。而もそれが私の外部に於てのみでない、亦內部に於てもだ、そして神でない所のもの、どんなに豐富であつても、すべて私には空虛

であるのである。

第九章

何故聖靈のみが水の面を覆ふたるや

けれ共父も御子も水の面を覆ふたのでなかつたか、若し之が形體の如くに場所をもつての意味なら、聖靈も亦しないのであつた。只若もすべての物に優越するその神的不變の本質であるならば、即ち父も御子も及び聖靈も共に水の面を覆うたのであつたのだ。然らばなぜ此が聖靈に就てのみ言はれたのである、なぜ彼に就てのみ言はれたのであるか、恰も場所にあるのでなかつた彼が、場所にあつたかの如く、彼に就てのみ彼は爾の賜物であるとして錄されたのであるか。爾の賜物にあつて私共は休止する、そこに私共は爾を享受するのだ、而も私共の休止は私共の場所であり、愛はそこへ私共を引上げる、そして爾の善なる聖靈(みたま)は「死の門より」救ひて私共の低きを持上げたまふ。然り、爾の善なる御旨にあつて私共の平和はあるのだ。で、形體そのもの自分の重みに由て自分の場所を求めるのだ、而も重みは必ずしも下にのみ向ふでない、只自分の場所を求めるのみ、だから火は上に向つて、石は下に向ひ、彼等はその自分の重みで促され、各々その場所を求めるのだ。されば油は水の下に注

がれても、水の上に浮上り、また水は油の上に注がれても油の下に沈んで了ひ、彼等はその重みに由て促されて、各々その場所を求めるのだ。で、その定所を失へば彼等は動揺し、之に戻されれば安止するのである。されば私の重みは私の愛であり、それに由てどこに私が運ばれるも私は持行かれるのだ。まこと爾の賜物もつて私共は熱燒され、また炎上されるのだ、また内に燃立つのである、前に行くのである。私共は「己れの心にある爾の途を昇り行き」、また京詣(みやこもうで)の歌をうたふのだ。私共は爾の火をもつて、然り、爾の善い火を以て内に燃え、そして行くのである、「エルサレムの平和」に向つて行くのであるからだ。そは「人われに向ひていざ主のいへに行かんといへる時我よろこべり」だ、そこに爾の善なる御旨が私共を置き給うた、私共が永久そこに住はんとするより外他に何等望むことないためである。

第十章

靈的被造者と私共人間との區別

あの自分は爾以外である、けれ共それが造られるやすぐさまにすべての常なきものの上を覆ふ爾の「賜物」に由り、爾が光あれと宣ひて光ありたるその御聲もつて高く連上(つれあ)げられ、そして他の何等の

狀態知らざる靈的被造者の何と幸福ぞや。然るに私共にあつては此は別々の時に於て起りたので、私共は「舊は闇であつたが、今は光となつたのである」。けれ共若し光照されたのでなかつたならどんなであつたらう、それが只言はれたのだ。そしてそれが恰も以前は不定で闇であつたかの如く、さう言はれてある。それが他に造られたその原因も明かならんためである、即ち消ゆることない「光」に向けられてそれが光とされたと云ふのである。で、誰でもできる人にこを理會させよ、彼をして爾に尋ねしめよ。なぜ恰も私が誰でも「此の世に來る人をてらすことできる」が如くに、彼は私を果はすのであるだらう。

第十一章

三位一體の表徵亦人間のなかにも存在する

誰か全能の三位一體を理解しまつるだらう。そしてもしそれが果して「それ」ならば、誰か「それ」を語らぬだらう。誰であれ何をそれに就て語るか、その語る所の事を知つてるは、これ稀有なる靈である。而も彼等は討論駁議して平和ない、誰もその幻影を見るものないのだ。で、私は人々が各々自分にある此等の三事を考へてもらひたい、元より此等の三事、それは三位一體とは別ではるかに異つ

てる、只私は彼等がそこで自分に習練し、そして如何に相異つてるか之を證して知れと告げるのみ。即ちその私の言ふ三事とは、存在すると、知得すると、及び意圖すると、是である。そは私は存へて又知り、また意ふのだ、または私は存へて意ふことを知つて居る、また存へて知らうと意ふからだ。だから此の三事に於て如何に不可分離な一つの生命があつて、而もそれが一つの生命、一つの心意、及び一つの本質であり、然り、最後に如何に不可分離な區別であり、而も一つの區別なること、之を誰でも能くする者に見さしめよ。確かに人はそれを目の前にもつのである、彼をして自分に留意し、そして見て私に告げしめよ。けれ共彼が此等の中に何かを見出しそして言ひ得る時に、彼をしてその故にその不變に存在し、不變に知得し、また不變に意圖します此等不變なもの以上のものそれを見出したと考へさすな。そしてまた此等の三事の故に神にも亦三位一體ある、或はすべて此の三つは各箇にある、だから三つは各箇に屬するのだ、或は兩途不思議な仕方で一途であり、簡單で而も複雜で、それ自身それ自身にまでそれ自身に限界され、而も無限であり、之に由てそれが存在し、そしてそれ自身に知られ、それ自身に滿足し、その全體一致の偉大さもつて不變に同一であるなどと考へさすな、誰か容易に之を考へ得るだらう。誰か如何なる仕方にてか之を語り得るだらう、誰か冒瀆にも之に就て聲言しやうとするだらう。

第十二章

創造界是れ神の教會の表徴である

私の信仰よ、汝の告白を續けて、そして汝の神に語りまつれ。聖なる聖なる聖なる私の神よ、爾の御名にあつて父と御子と聖靈よ、私共は洗禮(バプテスマ)受けたのだ。爾のみ名にあつて、父と御子と聖靈よ、私共は洗禮授けるのだ。なぜなら「彼」のキリストにあつて神は私共の間に亦「天と地と」を、即ち「彼」の教會の靈的肉的の人々を造りましたからだ。然り、私共の「地」もそれがまだ「教理の定形(かたち)」を受けざる前は、「見えざる定形(かたち)ない」ものであつたのだ。そして私共は無知の黑暗もつて包まれた。そは「爾は罪を責めて人をこらしめ」、また「爾のさばきは大なる淵で」あるからである。けれ共爾のみ靈は水の面を覆うてた故、爾の御慈悲は私共の不幸を見棄て給はず、そして爾は「光あれ、汝等悔改めよ、天の御國は近づけり」と言ひ給うた。然り、「悔改めよ、光あれ」と、そして私共の靈魂私共の内に悶えた、故に「私共は、主よ、ヨルダンの土地より爾と及び爾に等くありますあの山とを記憶した、而も殆ど私共に益しなかつた」。そして私共の闇黑私共を不快ならしめ、私共は爾に振向いた、そして光はそこにあつた。そして、見よ、私共は「曾てやみであつた、而も今は主にあつて光

となつたのだ」。

第十三章

此の生命にては私共の更生完うせられない

けれ共私どもまだ「見ゆる所によるでなく、信仰によりてであつて、望に由て私共救はれるのであるからだ、只目に見ゆる望は望でないのである」。けれ共尚「淵は淵に呼びて」而も今や爾の「瀧つ瀨の聲」を以てである、而もあの「われ靈に屬する者に對する如く汝らに語ること能はず、反つて肉に屬するものの如く語るなり」と言うたその彼もが、然り、その彼さへ彼自身に、「既に捉へたりと思はず」、そして「後のものを忘れて前のものに向て勵み」、また「重荷を負へる如くに歎き」、また「鹿の溪川をしたひ喘ぐが如く彼の靈魂(たましひ)は活ける神をしたひ喘ぐのである」。そして言ふのだ、「いつ我は來るべき、天より賜ふ彼の住所もつて上に纏はれんと望んでである」と。また此の「低い淵に呼ん」では、「この世に倣ふな、而も汝の心を更へて新にせよ」と、また「智慧に於て子供となるな、而も悪に於ては幼兒となれ、智慧に於て成人とならんためである」と、また「愚なるかなガラテヤ人よ、誰が汝らを誑(たぶら)かししぞ」と言ふのである。けれ共今や彼はもはや彼の自分の聲に於てでない、

上より爾の聖靈を送りましたる、その爾の御聲に於てである、然り「高き所に昇りまして」「彼の流れの力が神の都をよろこばしくさせんため」彼の賜物の井堰を押開いたその彼に由てである。してその「彼」を「花婿の此の友が」今や「彼」に一致した力に依る「聖靈の初の實をもちつ、尙自ら心の中に嘆きて、子とせられんこと卽ち彼の體の贖はれんことを待ちつゝ慕ひ求めるのだ」。彼は「彼」に喘ぎ焦れるのだ、花嫁の一肢體であるからだ、また「彼」のために猜むのだ、花婿の友であるからだ。彼は「彼」のために猜むのだ、自分のためにでない、そは爾の「瀧つ瀨の聲にて」で、彼の自分の聲にてでない、彼はそのため猜みする、あの他の淵に呼ぶのであるからだ、あの「蛇が狡猾もつてエバを誑した如く、彼等の心がまた害はれて、爾の獨り子なる私共の花婿にその純潔を失はれんことを恐れてである」。ああ私共「彼をそのありますままに仰ぎ見」、そして「彼等が終日我に向ひてなんぢの神はいづくにありやと云へるその間たゞ日夜にその糧であつたその涙の過去る時」、さてもなんたるうつくしの光でそれがあるだらう。

第十四章

信仰と希望とをもつて私共は强められる

見よ、私も亦言ふ、私の神よ、どこに爾はいますぞ、見よどこに爾はいますぞ、私が「祭の日まもるその響なる歡喜と讃美との聲をあげて私のたましひを己れの上に注ぎいだす時」私は少しく息を休ませる、而も尙再び悲哀に沈むのだ、それが沮喪して淵となるからだ、或はなほまだ元の淵なることを感ずるからだ。で、爾が夜の中で私の足許照さんために點し給うた私の信仰之に語るのだ、なぜ私のたましひよ、そなたは悲むぞ、なぜ私を惱ますぞ、生にあつて望め、その御言はそなたの足に燈火である、望みそして怒りの母なる夜が、然り、主のみ怒りが過ぎ去るまで耐へ忍べ、「舊は闇であつた」私共は曾てその子供であつて、その痕跡を此の罪ゆゑ死ぬべき體に負うて居るのだ、「曙開けて暗の影の消ゆる」までである。さらばそなたよ「主を待ち望め、あしたに私はみ前に立ちて爾を仰ぎまつるだらう、私はいつまでも爾に告白しまつるだらう、晨旦に私の顏を援ける私の神よ、爾を見まつるだらう、爾はまた私共の中に住みます聖靈に由て私共の死ぬべき體を活かすだらう」、「彼」は御慈悲もつて私共の內なる「闇める」又「浮べる淵」の上に覆うてゐますからだ。また爾より私共此の生路にあつて今や光である可き「保證」うけて居る、私共が「望みに由つて救はれ」て「光の子供」であり「晝の子供」であるからで、もはや舊の私共のあつた「夜の子供」でも「闇の子供」でもないのである。そしてそれと私共との間は此の不確な人間の知識の中で只爾が分ち給ふのみ、爾は私共の心を試練して、「光を晝と呼び、また闇を夜と呼びました」。そは誰か爾にあらずして私共を識るだら

う、そして「爾より受けざるもの何を私共もつたらう、同じ土塊より器は或は貴く作られる、また賤しく作られるのである」。

第十五章

創世記の文句の神祕なる意義

或は、私共の神よ、爾にましまさずして誰か私共のために爾の聖書に於て、あの私共の上を覆ふ權威の穹蒼を造りたらう。そは「天は書卷の如くにまかれん」と言はれてあり、今やそれが「皮の如くに張られてある」からだ。これ爾の聖書は一層すぐれた權威である、爾がそれを私共に傳へしめたその人々は既に死すべき生命をうけ終つた故である、そして、主よ、人間罪に由て死すべきものとなつた時、爾は如何に彼等を「皮もつて纒はせた」るか、爾は知りたまふ、爾は知り給ふ。そしてそれより爾はまた「皮の如くに爾の聖書の穹蒼を張り給うた」のだ、即ち爾の調和の御言であつて、それは死すべき人々の奉仕に依り、爾が私共の上に擴げたものである。そは彼等の死そのものに依りその堅固な權威の「穹蒼」は彼等に由り敍述せられた、爾の御言もつてその下なるすべての上に殊更目立つて張り擴げられたのだ、そは彼等のまだ生きてる間は斯く著るしく目立たぬのであつて、爾は「皮の

如くに」まだ「天を張りひろげ給はなかつた」、また爾はまだ諸方に向つて彼等の死の光榮を擴張せしめ給はなかつたからだ。

主よ、「爾の御指の仕業なる天に向て」私共眺めばや、願くは爾がその下にまき擴げた雲を私共の目より攘ひたまへ、そこに「小さきものをも智からしめる爾の證詞がある」。主よ、「嬰兒乳兒の口より爾の讃美を完うさせたまへ」。そは苟くも書物として斯くも傲慢を打挫くもの、即ち自分の罪を辯護して爾の調停に抵抗する敵や抗爭者を打挫くもの、他にありとは私共知らないのだ。また、主よ、斯くも私に勸めて告白せしめ、また爾の軛に私の頸を柔順ならしめ、更に何等の報酬求めずに爾に奉仕せしめるため私を招き寄せるその潔らな御言、私は他にありとは知らないのだ。善なる父よ、私は彼等を理解しまほしや、之を私に許したまへ、私はその下に置かれてあるものたちのため爾はそれを設定し給うたのであるからだ。そはその下に置かれてあるのであると信ずるのだ。彼等をして御名をたゝへしめよ、爾を讃美せしめよや、彼等は至上な天の住民たちで、即ち天の使たちであり、此の穹蒼を仰ぎ或は讀んで爾の御言を知る必要ないもの等である。そは彼等は常に爾の御顏に接してそこに時間に於ける何の音綴もなく、爾の永遠なる聖旨が何を意思してゐますかそれを讀むのであるからだ、彼等はそれを讀んで、歡んで、また樂んで居るのであ

る。即ち彼等は絶えずに讀んで居る、そして彼等の讀むこと決して過去ることない、そは彼等は歡んでまた樂んで、之に由て爾の御謀議の不變そのものを讀むのであるからだ。彼等の書物は決して閉されない、否、彼等の卷帙決して捲かれて了ふことないのである、爾御自身即ち彼等に此の書卷でおはして、また永遠に斯くありますからなのだ。これ爾は下界の人たちの脆さを鞏固に覆うた此の穹蒼の上に更に彼等を置き給うたので、彼等が仰ぎ見て爾の御仁慈を知悉し、時間を造りました爾を時間の中に聲明せんためである。そは「爾のめぐみは天にあり、爾の眞實は雲にまで及ぶ」のであるからだ。而も雲は過去つて了ふ、けれ共天は永續する、また爾の御言のべ敎へる者たちは此の世の生命よりあの世へと通り行く、けれ共爾の聖書は世の終りまでも人々の上に展開されるのだ。されど「天も地も過行かん、爾の御言は過ぎ往くことなかるべし」。なぜならこの書卷は捲了はれるだらう、そしてそれが敷きひろげられた「草もその榮華をもちながらに過去るだらう」からだ。けれ共爾のみ言は永久に存ずるのである、只それが今は雲のくもつた像のやうで、また「天の鏡」を通してのやうにのみ私共に見えるので、それがあるそのままでない。私共亦爾の御子の愛するものであれ、「私共が後いかにあるべきそれがまだ顯はれない」からである。彼は私共の肉の「格子よりのぞき」て私共にやさしく語り、そして私共をはげまし給うた、そして私共は「彼のかぐはしの香りを追うて馳りたのだ」。けれ共「彼の現れ給ふ時私共之に肖るであらう。私共まことの狀を見るであらうからだ」。主

よ、その時彼のさまの眞である如く、私共の見る所亦眞であるだらう。

第十六章

只神のみすべてのものをそのあるままに知り給ふ

そは爾の不變でありまして、不變に知り、また不變に意志し給ふ、その爾のありますその如くすべてを爾のみ知り給ふのだ。そして爾の本質不變に知りまた意志し給ふ、また爾の意志は不變にあつてまた知り給ふ、而もその不變な光の自ら知りますその如く、亦照されたそして常ないものに由て知られること、それは爾の御眼にあつて正しとは見えないのだ。故を以て私の「靈魂水なき土地の如くである」、それが自ら照らすことできないので、已れに出て已れを滿足させることできないからだ。これ「生命の泉は爾と共にある、その如く爾の光にあつて私共光を仰ぐであらうからだ」。

第十七章

海と陸との表徵する意味

誰か苦きものを一つの社會に集合させたらう、そは彼等は皆一つの目的を懷いて、それが時間的なる又此世的なる幸福にあるのだ、そしてそれを護るために無數な種類の煩慮に浮きつ沈みつ、なほあらゆる事をするのである。主よ、「水をして皆一つ所に集りて」爾を渴き求むる「乾ける土を顯れしめよ」と宣ひたる、これ爾にましまさずして誰だらう、そは「海も亦爾のものでありて、爾ぞ之を造り給ふ、また乾ける地も亦その御手にて造れるなり」。さりとて、人間の意志の苦きは爾の造りましたのでない、只水の集合して海と呼ばれるのである、そは爾は人の靈魂の邪惡な慾望を抑へて、その波の互に打碎けつ之が越ゆるを許されぬ境を定め給うてあるからだ。そして爾は斯くそれを海となし給ふ、爾がすべてのものの上に有し給ふ權威の命令に由てである。

けれ共爾を渴き求めて爾のみ前に現れるその靈魂たちは、海の社會よりは他の區界に由て分たれ、爾は之をうましき泉もつて灌漑し給ふ、「地はその果を生ぜんためで」、また、主よ、爾は斯く命じて私共の靈魂がその類に從ひ、互に隣人を愛してその肉體的の救濟にまで及び、各々その類似に從つて種子を結び、めぐみの仕事を咲き綻ばせんためである。即ち私共が互の脆きを感じて、乏きものたちを同情もつて相救ひ、自分が乏き時に助けられんと欲する如く、亦彼等を助ける時であつて、それがただに「種實を與ふる草蔬」に於ける如く容易な事にあつてのみでない、「果を結ぶ樹」の如く、私共の最善の力を要して援助の保護を與ふる事にあつてでもある。即ち言換へれば、權力者の虐手より

害辱受ける者を救出して、正義のさばきの偉大なる力に由り、之を庇つて保護を與へるその善業を云ふのである。

第十八章

義でき者は天の星辰にも比較し得る

斯くして、主よ、斯くして私は祈りたてまつる、願くは爾が爲します如く、即ち爾が元氣と氣力とを與へます如く、「眞理をして地より起上らしめ」、また「正義をして天より瞰下さしめたまへ」また「穹蒼に光あらしめ」たまへ。「私共は餓ゑたる者に私共の餅を裂き與へ、家なき貧き者を私共の家に連れ來らばや」。私共は「裸のものに衣を纏はせ」、そして「私共と肉を同くする者たちを輕しめまい」、その結實や地より生じたので、見よ、「それが善であるのだ」、そして私共自ら此世ながらの仕事の結實より觀思の歡喜に達して、上なる生命の言を獲得し、爾の聖書の「穹蒼」に縋りつ、世に於ける光とも見えるものである。そはそこに爾は私共に敎へて靈智の事と肉感の事とを、恰も晝と夜との如くに區別せしめるのだ、或は靈智の事と肉感の事とに委ねられた二種の靈魂を區別せしめるのだ。で、今は穹蒼の造られる以前に、爾の祕密な審判にあつて、「光と暗」とを分ち給うた爾ばかり

でましまさぬ、亦その同じ穹蒼の中に置かれて各々位を與へられる爾の靈的子供たちも、今や爾の恩寵全世界に公表されたので、此の地の上に輝きて晝と夜とを分ち、時間の表徴となるであらう、即ち「舊きもの過去つて、見よ、すべてのもの新しくなつた」ことである、「私共の救は私共が信じた時よりも一層近づいた」ことである、「夜は更けて日の近付いた」ことである、また爾はその種蒔には他のものたち働いた爾の刈入に、爾のめぐみの働き人を遣はし、またその苅入終りにあるべき他の畠にも遣はしつ、「爾の祝福もつて年の晃辨とし給」はんとすることである。斯く爾は求むる者の祈りを許可して、また「義しき者」の年を祝福し給ふのだ。けれ共爾は不易にましまして、そして「決して損ねることない爾の年々」に於て、過行く私共の年々のため貯藏の倉を準備し給ふのである。そは爾は永遠なる御旨に從ひ、その適當なる季節に於て地上に天的祝福を垂れ給ふのであるからだ。是れ「或る者には聖靈に由て智慧の言が與へられる」、恰も晝を司るかの如く、澄渡つた眞理の光をよろこぶ者のために「大なる光」ともしてである。また「或る者には同じ聖靈に由て知識の光が與へられる」「小なる光」ともしてである。また「或る者には信仰が、或る者には預言が、或る者には靈を辨へる力が、或る者には異言を言ふ力が與へられてある」からだ。そして此等がすべて「星々」ともしてである。そはすべて「此等のことは同じ一つの聖靈の働きにして、その心のままに從つて各人に分け與へ」、また「益を得させんため」に星々をして明かに現れしめたのである。けれ共すべてその時

節に於て盈昃する月の如き、又は他の賜物の表示なる、あの互に相序次して算せられる星々の如き、あの前記の晝を悅ばす「智慧」の光輝に劣る限り、そのすべての祕蹟を包む知識の言は、只是れ夜を司るものである。そは彼等は爾の最も賢明なる僕が、然り、「成人したる者の中に智慧を語る」その彼さへが、「靈に屬する者に對する如くに語る能はず、反つて肉に屬する者に對する如くに語つた」その如き者たちに必要なのであるからだ。されどその「堅き食物をも取るに足り、その眼太陽を見るに適するまで」は、基督にあつての幼兒であり、乳のみもつて養はれる」生れながらの人をして、然り、彼をして全く光に捨てられた夜にのみ住むことなく、而も月や星々の光を以て滿足せさしめよ。そして斯く、私共の全智の神よ、爾は爾の聖書なる爾の穹蒼に於て私共に語り給ふのだ、まだ「象徴と時間と日と年と」にありとは云へ、かしこみ觀思して私共がすべての物を辨へ識り得んためである。

第十九章

完全に到るの方途

されどまづ「なんぢら己れをあらひ、己れを潔くし」、なんぢの靈より、又「わが眼の前よりその

悪き業をはらひ去れ」、「乾ける土」の顯れんためである。また「善を行ふことをならひ、孤子に公平を行ひ、やもめの訟をあげつらへ」、「地は食物のために青蔬を生じ、樹は果實を結ばんため」である。そして主は言ひ給ふ、「いざわれら共にあげつらはん」、天の穹蒼に光ありて地の上を照さんためである。「あの富める人は善い師に向て尋ねた、永遠の生命をうるためには如何なる事をなすべきやと」。その善き師は彼に告げるだらう、彼はその師を人間としか思はなかつた、けれ共、彼は善き師であつた、神でありましたからだ。してその師は彼に告げるだらう「若し生命に入らんと思はば誡命を守れ、その邪念惡業の苦きを攘ひ去つて、殺す勿れ、姦淫するなかれ、窃むなかれ、僞の證を立つれなかれ、乾ける土の顯れんために、父母を敬ふこと及び隣人を愛すること、之を行へ」と。そして富める人は言ふのだ、此等を皆守りたと。然らばいづこよりぞ、若し地が豊饒であるならばこやうな荆棘はどこよりだらう、行つて生へ茂る貪慾の榛莽を根こそぎにし、おまへの所有を賣りて貧き者に施し、そして善果を以て充たされよ、さらばおまへは天に於て寶をもつだらう。そしてもしもおまへが完全ならんと思はば主に從つて彼が御智慧をその間に語つた人々と相伴へよ、彼は何を晝と夜とに分配すべきか知り給ふ、おまへがまたそれを知り得て、そしておまへのために「天の穹蒼に光」あらんためである、只あまへの心そこにない限り、その光はないだらう、否、おまへの寶そこにない限り、おまへの心もないだらう、これおまへがあの善い師より聽いた所であるのだ。けれ共その收穫のない地

がかなしまれた、そして茨が言を塞いだのであつた。

けれ共なんぢら擇ばれた族よ、主に從はんためすべてを捨てたる世の弱き者である、只彼に從ひ行け、そして「强き者を辱かしめよ」、汝ら「うるはしき足」よ、彼に從ひ行け、そして穹蒼にかがやけよ。天の使でこそない、完き者の光と、及び輕蔑こそされない、小さき者たちの暗とを區別して、天は彼の榮光を顯はさんためである。地の上に輝けよ、そして陽に照らされた「此の日をしてかの日に智慧を語らひつたへ、また「この夜」は月もて照らされて「かの夜に知識の言を示せかし」。月と星とは夜のために輝くのだ、而も夜は彼等を隱蔽することとしない、彼等はその度に從つて各々光を與へるからだ。そは、見よ、神はさながら宣ふ如し、「天の穹蒼に光あれ」と。すると「忽ち烈しき風の吹きたる如き響天より起りて」、また「火の如きもの舌のやうに現れ、分れてそのおのおのの上に止りた」。そしてもろもろの光は天の穹蒼に生命の言をもつて造られた。されどなんぢら聖なる火よ、うるはしき火よ、到る所あちこち駈け廻れ、汝ら是れ「世の光」であつて、「樹の下に置かるべきでない」。そして汝らの縋りまつる彼は高くあげられて、また汝らを高く擧げ給うたのだ。汝ら到る所駈けめぐれ、そしてすべての國民に知られよや。

第二十章

海をしてまた孕んで汝らの仕事を産出さしめよ、そして「水をして生命ある動くものを生ぜしめよ」。そは「貴きものを賤しきものより分ちて」汝ら神の口とされるので、之に由りて「彼」は「水をして」、地の生ずるものでなく、「生命をもつ動くものと、地の上を蒐ける鳥とを生ぜしめよ」と宣はれるのだ。これ、神よ、爾の祕蹟は爾の聖なる者たちの奉仕に依り、世の誘惑の波の中に動いて、爾の御名に於て、又爾の洗禮に於て異邦人を聖別せしめたのだ。そして此等の事の中で饒なる大なる不思議は「大なる鯨」であるかの如く行はれた。又爾の遣はしし人たちの聲は爾の御書の「廣い穹蒼の中で地上を蒐けめぐりた」、その穹蒼これ彼等が到る所その下にあつて飛翔けるため、彼等の權威としてその上に覆はれてあるのであつた、そは「彼等の聲の聞かれざる如何なる言語も國語もない」、「彼等の響は全地にあまねく、彼等の言は世の果にまで及んで」、主よ、爾は祝福もつて彼等をいや殖し給ふからである。

私は語るに不實であるか、或は混迷惑亂し、そしてあの天の穹蒼なる事物の澄渡つた知識と、及びこの波立つ世的海なる、而もその穹蒼の下なる物質的仕事とを辨別せぬであるか。そはその知識や實質でまた明確であり、時代に由ての何等增殖なき、即ち智慧と知識そのものの光としての如き物事に就てすら、然り、此等の事に就てすら、物質的働きは種々雜多であつて、一事は他事より生じ、神

よ、私共の倦み易い感覺の弱きに準備し給うた爾のみめぐみに由て增加された。それで私共の心の理解にある一つの事も此の體の移動に由て多樣に排置され又表現されるのだ。即ち此等の祕蹟を水が生じたので、而も爾の御言に於てであつた、又は爾の眞理より迷ひ離れた人々の必要が彼等を生じたので、而も爾の福音に於てである。是れ水自身が彼等を發生せしめたので、その病的なる苦味こそなぜ彼等が爾の御言に於て送り出されたか、その原因であるからだ。

そしてすべて爾の造りましたもの皆うるはしくある、而も、見よ、すべてを造りましたその爾は、更に言語に絕してうるはしくあり給ふ。してその爾よりぞ、若しアダムが墮落しなかつたなら、此の海の苦味も彼より決して流れ出ることなかつたらう。即ち人類は斯く深く好奇に耽つて風荒れ波猛りて狂ひ立つことなかつたらう。そしてその時爾の傳道者たちが體と心とを勞し、「多く水の中」(世の中)に於て神祕な仕業と言辭とを働く必要なかつたらう。そはその「匐ふ蟲」や「飛ぶ鳥」とは即ち私には此等の事を意味すると見え、之に由て洗禮うけて形體的の祕蹟に由り聖別された人々も、若しそのたましひ靈的生命を得るではないならば、または信仰には入つた後も、尙主の聖餐うけて完全に向つて進むでないならば、それも何等益する所ないだらう。

第二十一章

さてまた茲に爾の御言に於て海の深みでない、而も水の鹹味より離れた地は、生命をもつはふ蟲と鳥とでなく、「生ける靈魂」をもたらした、そは今やそれはもうあの異教人のもつ如き、又はそれがまだ水に被はれてゐた時もつてた如き洗禮の必要ないのだ、（是れ洗禮は爾が「天國」への「入口」として定め給うたので、之に入るべき他の入口ないからだ）。またそれは信仰を働くための奇蹟の不思議を求めもしない、これあの象徴と不思議と見ねば信ぜぬと云ふ如きでそれはないからで、今や信念滿ちた地は不信を以て苦かつた水より離れたのだ。そして「異言は信ずるもののためならで信ぜぬもののためである」。されば爾が「水の上に基させ給うた地」は、爾の御言で水が生じたあの「飛翔ける種類」を要しない。爾よ、爾の遣はしし人たちに由り爾の御言それに送り給へ。そは私共は此等の仕業に就て語る、けれ共その他にあつて彼等が苟くも生けるたましひ働き出すことできるのは、即ち彼等の中に働く爾でありますのだ。地がそれを生み出すのだ、地は彼等が之をその靈魂に働く原因であるからだ、宛も海は彼等が天の穹蒼の下なる生命もつ匐ふものや飛びかける鳥の上に働いたその原因である如くなのだ。只今やそれを地は要しない、只爾が信ずる者たちの前に備へ給うた卓上の、その深みより取られた魚をこそは、そが養ひとするのである。然り、彼はその深みより取られたそれで（當時キリストの象徴として Ἰχθύς 即ちイエスキリスト、神の子救ひ主と云ふ意にてその各語の頭字を合せた語より出たのである）Ἰησοῦς Χριστὸς Θεοῦ Υἱός 即ち魚と云ふ語が用ひられた、これは希臘語にて

つたのだ、そして「鳥」は海で生ぜられたのなれど、而も「地の上に繁殖された」のだ。そは使徒たちの最初の說教は人間の不信がその原因であつた、けれ共信者たちも亦勸告されて、日毎に彼等に由て種々に祝福されたからだ。併し生きてる靈魂はその始原を地より取るのだ。そは凡そ既に信者の數の中にあるものたちの益するのは、只彼等が神にあつて生きんため世の愛着より離れて自ら滿足するのみにある、即ち彼等の靈が「快樂」、然り、死をもたらす「快樂の中に生きてる間死であつた」、而も、主よ、爾は潔き心の生命與ふる樂みであり給ふからである。

然らばいざ道に働く人たちをして說教もつて、または奇蹟と祕蹟と神祕な言とをもつて物語り、もはや不信の水の上にてでなく、地の上にて働かしめよ、そこにて崇敬生み做す無學がそれらの祕密な象徴に向ふ敬畏より出て彼等に熱心こめて聽かんためである。そは斯くする是れ爾を忘れ易いアダムの子たちのために信仰への入口であるからだ。さもなくば彼等は自ら爾の聖顏の前より隱れて黑暗の深みとなるのである。けれ共今や爾の仕へ人らをして大なる淵の渦卷より離れた乾ける陸土にあつての如く働き、また彼等をしてその生活信者たちの前にあつて之を刺戟する模範とならしめよ。そは斯くして人々は耳を傾けるからだ。然り、只耳を傾けるばかりでない、亦實行するのである。「主を慕へ、なんぢらのたましい生きるだらう、地が生ける靈をうみなさんためである。そして世に一致するな、それより離れて滿足せよ。靈はそれが愛して死ぬる事物を避けてこそ活きるのだ。汝ら暴戾放縱

の傲慢より、優柔淫蕩の快樂より、又空妄なる知識の虚名より離れて滿足せよ。野獸は馴致され、牛畜は軛に屈せられ、蛇は無害にされたのである。そは此等は寓喩にかくれる私共の心の動きであつて、言ひ換へれば自負の傲慢と肉慾の快樂と及び好奇の害毒と、即ち死せるたましひの動きである。これ靈魂は死ぬるも」、そのすべての動きを失ふまででない、即ち「生命の泉を捨てて」此の過去く世に捉へられ、「それに一致して了つて」死ぬるのであるからだ。

けれ共、神よ、爾の御言は永遠なる生命の泉である、そして過去つて了ふことない。故を以て靈の此の離反は「此の世と一致するな」と私に言はれた時、爾の御言に由て制止されてるのだ、地が生命の泉に於て活きたるましいを生じ出さんため、即ち靈が爾の傳道者たちに由り、爾の「キリストに倣ふものに倣うて」爾の御言に忠實なるものとされんためである。そは是れ彼の類に從ふのである、人はその友に效ふものであるからだ。彼も言うて居る、「我汝らの如くなりたれば汝らわが如く成れ」と。斯く此の活きるたましひの中に、即ちその行爲に柔和なる善なる獸たちがあるのだらう、そは爾は「柔和をもつて汝の仕事に行け、すべての人に愛せられるであらう」と命し給うてあるからで、善なる家畜は若し食するも決して飽厭されることなく、食せざるも缺乏することないだらう。また善なる蛇は危險でなくして無害であり、却て注意して「智く」あるだらう。そして只此の現世的なる本然の研究に心をこめて、「永遠も造られたるものに由て悟られ、明かに見られる」ことに滿足するだ

らう。そは此等の動物も私共に寄せ掛るその猛惡を制抑されては、即ち理性に柔順となるので、彼等は活きてそして善良であるからだ。

第二十二章

更生されたる靈魂

そは、見よ、主なる私共の神、私共の造り主よ、私共が惡に生きて死にたる此の世の執着より私共の愛情抑制され、そして善に生きるに由て生きたる靈となり、「此の世に一致するな」と爾があの使徒に由て語りたまひし事、それが私共に實現される時、その時また爾がやがて付加へ「なんぢの心を更へて新たにせよ」とのたまひしその事が起るのだ。それも卿らの先輩なる誰かの隣人に模倣してとか、或は誰かのすぐれた人の先蹤を踏んでとか云ふ、卿らの類に從つてではない、そは爾は彼の類に從つて人は造られよとはのたまはず、而も「我儕に象りて我儕の像の如くに人を造らん」とのたまうたのだ、私共が爾の御旨の何であるかを證し得んためである。即ち此の目的のためにである、あの「福音により子たちを生みたる」爾の傳道者も、彼等をいつまでも乳のみ飲ませて保母の如くに養はねばならぬその幼兒であらしめぬために、「汝らの心を更へて新たになれ、神の御意の善にして悅ぶ

べく、かつ全きことを辨へ知らんためである」と言うて居る。故に爾は「人に造られよ」とはのたまはず、「我儕人を造るべし」とのたまひ、而も「彼の類に從つて」とはのたまはず、「我儕に象りて我らの像に從つて」とのたまうてる。是れ人は「その心新にされて」爾の眞理を見また之を悟りては、彼の類に從ふかの如くその手本として已れ以外の人を要しない、而も爾の指定に由て何がその善にして悅ぶべく且つ全き爾の御意なるやを證するからだ。然り、爾は彼に敎へて今や一體の三位と三位の一體とを識ることを可能ならしめた。故に「我らは人を造らん」と複數もつて言はれたその事に、更に單數で「神人を造り給ふ」と付加へられてある。又「我儕の像に從つて」と複數もつて言はれた事に、更に單數で「神の像に從つて」と付加へられてある。斯く人は彼を造りました神の像に從つて彼の知識に於て更新されるのだ。そして「靈的にせられて彼はすべての事」、卽ち辨へらるべきすべての事を「辨へる」のだ。而も「已れは誰もの人に辨へられることない」のである。

第二十三章

靈の人の辨へ得る事柄

けれ共彼はすべての事を辨へると云ふ。之は彼が海の魚の上に、空の鳥の上に、家畜と野の獸との

上に、すべての地の上に、及び地の上に匐ふすべてのものの上に支配すると云ふに相當する。そは之を彼は神のみ靈の事を識別する已れの心の悟りに由てするのであるからだ。さもなくしは彼は尊く置かれながら、何等の悟りなく、心なき獸類にも比較され、彼等に似たるものともなるのである。故を以て爾の敎會にあつては、私共の神よ、爾がそれに與へました恩寵に從ひ、「私共は善い仕事に造られたる爾の御手業である故に」、徒に靈的上位に置かれたものたちのみでない、その上位に置かれたものたちに靈的に服從するものたちも亦（そは此の仕方に於て爾は男と女とを造り給うた、けれ共爾の靈的の恩寵にあつては、肉體には性に從へ、男も女もあるのでない、また猶太人も希臘人も奴隷も自主もあるのでないからだ）、卽ちその靈的な人たちは、上に置かれたものも下に置かれたものも、皆靈的に辨へるのである。只あの「穹蒼に輝く」靈的知識に就てではない「そは彼等さやうな高き權威に對しては辨へべきでないからだ」、又は彼等は爾の聖書そのものに就て、たとひ或は明瞭でないことあらうとも、之を輕々辨へべきでない、これ私共は已れの悟性をそれに服從させ、そして私共の目には閉塞されてる事柄さへ、尙正しくまた眞實に語られてるのだと確信するのであつて、誰もがたとひ如何に靈的で、またその御像に從ひ彼を造りました神の知識に更生されて居るとは云へ、只律法を行ふものであれ、決して妄りに辨へる者であつてはならないのだ。また、神よ、彼は爾の御眼にのみ知られ、そしてまだその仕事に由て私共に自ら曝露しない靈的及び肉的な人々の判斷をわきま

へべきでない。そは私共は只その果に由て彼等を知るのであるからだ。けれ共、主よ、爾は今でも彼等を知りまして、秘密に彼等を別ちて呼びましてる。然り、それが穹蒼の造られた前にてでさへあつたのだ。尚又彼はたとひ靈的な人であれ、此の世の動きさわぐ人々を辨へ判くでない、そは「その外なる人々を審くに」當りて、その中誰が今後爾の恩寵のうましみに來るであらうか、又は誰が不信の永久な鹹味の中に止まるであらうか、それを知らないで、彼は果して何をしようとするのだらう。

「故を以て爾が、爾の御像に從つて」造りました人の治める力受けたのは、即ち「天の光」の上にでない、その隱れた天そのものの上にでもない、又爾が天の設置以前に呼びましたる「晝と夜と」の上にでもない、又は「水の集合」して「海」と呼ばれるそのものの上にでもない、而も彼が力を受けて治めるのは「海の魚と空の鳥との上と、及びすべての家畜の上と、すべての地と、すべての地に匐ふ生物との上にである」。そは彼はその正しと見出すものを辨へて善となし、また違つたと見出すものを斥けるのだ、あの爾の御慈愛「多くの水」に求め出し給ふその彼等がそれに由て入信許されるあの祕蹟の擧行にあつてもだ、或はあの深みの中より取出されて敬虔なる地が以て糧とするあの「魚」に於ての祕蹟にあつてもだ、或は又爾の聖書の權威に服從する言語の表現と象徴とにあつてもだ、然り、口より出でて音に現れ、穹蒼の下に飛ぶかの如く解釋し、說明し、論爭し、聖別し、又は人々ア

ーメンと答へるやう爾に祈禱するその象徴にあつてもである。してそれらの語が聲となつて音に發せられるのも、皆此の世の深みと及び思想を見ることできない肉の盲目とに起因するので、それで之に語るも耳に聲高くさせる必要あるのだ、これ飛ぶ鳥は地上に繁殖すれ、而もその發生水より始つたのであるからだ。尚靈的の人は信者たちの仕事と行狀とに於ても、その是であることを認め、非なりと見出すことを斥けて辨別する。例へば彼等の慈善は宛も地が果實を生ずるとも見る如くである、また は純潔と斷食と聖なる默想とを守り、體の感覺に由て識られる物事に就ても愛慾を抑へて送る生ける靈に就てである。そしてすべての此等の上に彼は今辨へると云はれるのだ、彼が亦匡正する力を有するその所にあつてである。

第二十四章

なぜ神は人と魚と鳥とを惠んで他の生き物に及ばぬか

けれ共之は何である、何たる種類の神祕であるだらう。見よ、爾は、主よ、「人類を祝し給ふ」、彼等が「繁息し增加し、そして地に充滿せん」ためである。而も爾は之に由て私共に何物かを悟れと諷示しまさぬか、なぜ爾は亦爾が「日と呼びました光」を祝し給はぬか、「天の穹蒼」をもだ、「光」をも

だ、「星」をもだ、「地」をも亦「海」をもだ。若し爾が同じ仕方で魚や鯨にも「繁息し増加し、また海の水を充滿し」、また鳥も空の上にて増殖されよと祝し給うたでなかつたなら、私は、神よ、私共をその御像に從つて造りました爾は、殊更にこの祝福を只人にのみ與へんと思召しましたであらうと言ひ得るのだ。若も此の祝福が果實の樹や植物や、及び地の獸にまでも與へられたのを見出すなら、それが各々その類に從つて生ぜられる爾の御手業のものに皆正當に屬するのだと私は言ひ得るだらう。然るに草蔬や樹や獸や蛇も亦此等皆魚と鳥と人との如くに年代と共に増加しそしてその種類を繼續するに拘はらない、此等に向つては殖へよ増加せよと言はれてないのである。

然らば、私の光であります眞理よ、何を私の言ふべき。それは只無意味の空言のみとすべきだらうか。否、信仰の父なる神よ、苟くも爾の御言の奉仕者が斯く言ふ如き決してあらしむな、そして若しその文句に由て何を爾が意味しましてるかそれを私が悟らぬなら、即ち私よりも悟性すぐれた者たちをして、神よ、爾が人各箇に與へましたその理會に從ひ、之を善用せしめよや。けれ共、主よ、私は爾が無益に斯くのたまひしでないと信じて爾に告白しまつるその私の告白、亦爾の御眼に映じて御嘉納あれかしや。して何を此の教訓が私に暗示するか私は抑へて默することすまい。そは之は眞理であつて、斯く爾の聖書の比喩的な表示を理解する、それを私に妨げるもの何等私は見ないからである。これ一つの事で形體的の表示に由ては幾樣にも意味され居る、而も只一つの途で心的には解釋され

る。又形體的には只一つの途に意味されて、而も心では幾樣にも解釋されるがあるのは私は知つて居る。見よ、神と隣人とを愛する單一なこと、之が如何に多樣な祕蹟と無數な言語とに由り、また如何に無數な言ひ方もつて、各別々の言語に於て形體的に表示されるかを。斯く水より生れたものは殖えて増加するのである。また誰でも之を讀むもの注意せよ、そして見よ、聖書は錄して「元始に神天と地とを造り給へり」と只一つの途にその聲は言明してるかを。而も何等の誤謬に欺かれてるでなく、却て種々の眞意義もつて多樣に理會されるでないか。斯く人より生れるものはふえ又増加するのである。

若もその故に事物そのものの本質を、寓喩的にでなく、その固有の意味にて考へるなら、即ち「殖えて増加する」との文句は種子より生ずるすべてのものに一致するのである。けれ共若し私共がその語を比喩的に言はれたとして扱ふなら、してそれがむしろ聖書の本意だと私は思ふのだ、さもなくば之が斯く水の生物と人とより生れるもののみに此祝福を餘計に付與する筈ないからだ。だから若しさうならば、その「饒多」と云ふことは、「天と地」と云ふに意味するとしての靈的體的の被造者たちに、また「光と暗」と云ふに意味するとしての善と邪との靈魂たちに、また「水と水」との間に措かれた「穹蒼」と云ふに意味するとしての、私共に律法の奉仕者であつた聖なる記述者たちに、また「海」と云ふに意味するとしての、不信の鹹味になほ存する人々の社會に、また「乾ける土」と云ふ

に意味するとしての聖なる靈魂の熱心に、又「種子を結ぶ草蔬と果實を結ぶ樹」と云ふに意味すると して、此の現生に屬する慈善の仕事に、また「天の光」と云ふに意味するとして、信仰を立てるがために示されたる靈魂の賜物に、また「生けるたましひ」と云ふに意味するとして、節抑に能く服した愛情に、即ち此等に屬すると私は見出すのだ。してすべて此等の場合に饒多と豊富と増加とに出會うのだ、而も一事が多くの仕方で表示され、そして一つの表示が多くの仕方で理會されるには、何がどんなにして「殖えまた増加」するだらう、只象徴で形體的に表示され、そして事物に於て心的に考へられる外、何等私は見出さないのだ。で形體的に言明された象徴に由り、私共は肉的深みの必然な起因に由る「水」的世代を理會し、また心的に考へられた事物に由ては、理性の生み做す饒多な結果の故もつて「人」的世代を理會するのである。そして此の目的に向て、主よ、私は爾が此等の種類に、「殖えよ増加せよ」と宣うたと信ずるのだ。そは此の祝福に於て私共が只一つだと理會する事を多様な仕方で言表はし、又は只一つの仕方で漠然と傳へられたと讀むことを、多様な仕方で理會するその力と智能とを私共に許し給うたのだと私は考へるからだ。かやうにして「海の水は充滿される」のだ、そしてそれは多様な意義なしでは動かされないのだ。またかやうにして人の増加を以て「地は亦充滿されるのだ」、そして之が「乾ける」と云ふ事にその知識の渇望が顯れて、理性がその上を支配するのである。

第二十五章

地の果實とは信仰の結果を表徴する

主なる私の神よ、尚つづく爾の聖書の言が何を私に思はせるか、私は亦之を語りたい、然り、私は語るべし、そして恐れない。そは爾が此等の言より抽出するを私に欲して、私に爾御自身靈感させ給うたその眞理を私は語らうとするのだからだ。即ち爾のその靈感以外何等のものでもないそれに由て、私は眞理を語ると自ら信ずるのだ。爾は「眞理でましまして人は皆虚僞である」からだ。故に虚僞を語るものは是れ己れを語るのだ。だから私は眞理を語らんため爾の眞理に就て語らうとするのだ。見よ、爾は私共に「全地の面にある種子あるすべての草蔬と核ある木果の結るすべての樹とを糧とし與へ給うた」、而も私共のみにでない、亦空のすべての鳥と地の獸と、及び地に匐ふものとにもである。只魚と鯨とには爾は之を與へ給はなかつた。で、私共は言うた、此等に由て地の結實が意味され、また寓喩を以て此の生命の必要に向ひ結實豊かな地より準備された仁慈の仕事が比喩されたのだと。即ちかやうな地は是れ「爾がその家に憐憫賜はつたる篤信なオネシポロ」であつた。彼は屢々爾の保羅をなぐさめ、また「その鎖を恥としなかつた」からだ。かやうに亦彼に缺乏した物を「マケド

ニアから供給した兄弟たち」もなして、そしてかやうな果を彼等も結んだのだ。けれ共尙或る樹があつて彼に與ふべかりし果を與へなかつたので、彼は如何に之を悲んだらう、そして言うた、「我の始めの辯明のとき誰も我を助けず、みな我を棄てたり、願くはこの罪の彼らに歸せざらんことを神に祈るなり」と。そは此等の果實は神の祕義を悟つて、その中より私共に靈的教理を供給し呉れる、その人々に正當與へらるべきなのだ、また彼等も人として之を受くべきなのだ、然り、亦すべての節制に模範として自ら示す生ける靈魂とし、また飛かける生物としても、彼等に正當與へらるべきなのだ、彼等の聲は「全地にあまねく、その祝福は地の面に蕃殖される」からだ。

第二十六章

仕事の結果は善なる意思の中にある

けれ共此等の食物を悅ぶ人たち、卽ち之に由て養はれるので、己れの口腹是れその神なる人たちは之を悅ぶをしないのだ。そは之を與へる彼等に於てその事物が實を結ばれるのでなく、彼等が與へるその心に於てであるからだ。故に「自分の口腹にでなく、而も神に仕ふるその人は」、なぜ彼が悅ぶか私は明かに見るのだ。然り、私はそれを見て彼と共に悅ぶのだ。そは彼は「ピリピ人より」彼等が

エパフロデトに由り彼に贈つたものを受取つた、そして彼は如何に悅んだか私は見るのだ。只彼は自分が養ひ育てたその事もつて悅んだので、まことや言うてある。卽ち彼は言ふのだ、「今や汝等が我を思ふ心のまた萠したるをわれ主にありて甚くよろこぶ、汝らは固より我を思ひ居たれ共機を得ざりしなり」と。これ等のピリピ人はその時長い倦怠もつて乾ききつて、それで此の善きわざの果を結ばんとするに枯れてゐたのだつた。そして彼は彼等のために彼等がまた萠したのを悅ぶのだ、彼等がその乏きを供給したとする彼のためではないのだ。故を以て彼は付加へてある、「我は窮乏によりて言ふにあらず、我は如何なる狀に居るとも足ることを學びたればなり、我はいやしきに居る道を知る、富に居る道を知る、また飽くことにも飢うることにも、富むことにも乏きことにも、一切の祕訣を得たり、我を强くし給ふものに由て凡ての事を爲し得るなり」と。

然らば大なるポーロよ、何を以て汝は悅ぶや、何を以て汝はよろこぶや、何を汝は糧とせしや、「汝を送りました神の像に從ひ、彼の知識に新にされたなんぢ人よ」、節制至れりであつた、なんぢ生けるたましひよ、汝また神の奧義を語りて飛ぶ鳥でもあつた、なんぢ舌よ、そはこやうなものにこそ此の糧が當るのだ、その汝の取つた糧は何である、歡喜である、聽け、何が次に言はれてゐるかを、「されど汝らわが患難に與かりしは善き事なり」と、卽ち之を以て彼は悅ぶのだ、之を彼は糧としたのである、彼等は「善き事」をしたからで、彼の困苦が和められたからではない。その彼は爾に言う

でゐる、「わが患難にあつた時爾は我を寛がせ給へり」と、そは彼を強くし給ふ爾にあつて富に居ることも乏きに居ることも知つてゐたからで、彼は更に言うてゐる「ピリピ人よ、汝らも知る、わが汝らに福音を傳ふる始め、マケドニアを離れる時授受してわが事に與かりしは、汝らのみにして他の教會にはなかりき、汝らは我がテサロニケに居りし時に一度ならず二度までも我が窮乏に物贈れり」と。即ち此等の「善き業」に彼らの戻つたのを彼は今悦ぶのだ、彼らが恰も豊沃なる畠の再びその綠によみ返つた時の如く、また萠えさかえたのに欣躍するのである。

「汝らわが窮乏に物贈れり」と彼が云つたとて、彼の自分の窮乏のためであつたらうか。彼はそれがためによろこべるか、確かにそれがためではないのだ。けれ共どうして私共これを知らう。なぜなら彼は自らすぐ後に言うて「我は贈物を求むるにあらず、實を求むるなり」とあるからだ。で、私の神よ、私は爾よりその「贈物」と實とを判別することを學んだのだ。即ち贈物とは彼の與へるそのもので、私共の必要を充たすもの、例へば金錢、食物、飲物、衣服、蔽障、援助の如きである。けれ共實とはこれ與へる者の善なるまた正しい意志である。そは「善なる師」は徒に「豫言者を受くる者」とのみ言はずして「豫言者の名の故に」と付加へ、また「義しき人を受くる者」とのみ言はずして、「義しき人の名の故に」と付加へ給うた。それでその一は確かに「豫言者たる酬を受ける」だらう、他は「義人たる酬を受ける」だらう。また彼は徒に「わが小さ者の一人のために一杯の水を飲ましめる者

は」とのみ言はず、更に「弟子の名の故に」と付加へ給ひ、そしてまこと「我なんぢらに告げん、彼はその酬を失はぬべし」と結びたまうた。即ち贈與とは豫言者や義人を受け、弟子に一杯の水を與ふることである。けれ共實とは之を豫言者の名の故に、義き人の名の故に、或は弟子の名の故にすることである。で、實を以てエリヤは寡婦に由て喰べさせられた、彼女は神の人に喰べさせるのだと知つて、それで彼に喰べさせたのだからだ。けれ共彼は亦烏に由て喰べさせられた。之は贈與であつた、而もエリヤの内的の人は斯く喰べさせられたのでなく、只外的な人でのみあつたのだ。してそれがまたその食物なかつたなら死んで了つたのであるだらう。

第二十七章

魚と鯨との寓喩の意義

さらば私は、主よ、爾のみ前にて眞理であることそれを語らんとするのである。外でない、凡人や不信者を獲得して彼等を入信させるには、その入信の祕蹟と及び偉大な奇蹟の働きとが必要なのだ、そして此等は魚と鯨との名で象徴されてると私共は信ずるが、その彼等が爾の僕たちに體の養ひなる糧を取らしめ、または他に何か現在の生命に有用なものもつて彼等を救濟せんとするに當り、彼等は

なぜ此の事がされるや、または何の目的に出るや知らないのだから、彼等が此等を養ひもせねば、此等も亦彼等に由て養はれもしないのだ。なぜなら一方固より聖なる正しい所念からそれをするのでもなく、また一方もその實をまだ見ないから、彼等の贈與に於て悅びもしないのだ。是れ心はそれが悅ぶ事に於てのみ養はれるのであるからだ、そしてその故で、「魚と鯨」とは「地」が「海」の波の鹹味より分離區別された後ならずば生じなかつた、その食物もつては養はれることないのである。

第二十八章

何故神はその造り給ひしものを善と觀たまうたらう

そして爾は、神よ、爾の造り給ひしものをみそなはして、見よ、それが皆甚だ善であつた。然り私共も彼等を見て、そしてすべてのもの甚だ善である。で、爾の御仕業の各箇の種類皆是れ爾が彼等にあれとのたまうてそして彼等があつた時、爾は各々それが善であると見給うたのだ。そして「爾が造り給ひしものそれを爾は善と觀たまへり」とは私が算へて七度書かれてある、そして爾がその造りましたすべてのものをみそなはして、見よ、徒にそれが善なるのみでなく、而も今は皆一緒にして「甚だ善であつた」と書かれたのは、之が第八である。そは箇々にしては彼等は單に善であつた、けれ共

纏まつては「善」であると共に「甚だ善」であつたのだ。卽ちすべてのうるはしき形體亦同じな事を表はすので、その理由は斯うである。一つの體は種々の肢體より成立つて、それが箇々に皆うるはしくある、けれ共その箇々の亦うるはしいに拘はらず、それらは互に格好保つて取合はされ完全な一體となるや、更にはるかにうるはしくあるからである。

第二十九章

神は八度その造りしものを善と觀たまうた

而も私は注目した、爾が爾の御仕業みごころに適ひて之を善と觀たまうたこと、それが或は七度なるや八度なるやを見出さんためであつた。けれ共爾が造りました事、それを何遍爾がみそなはしたるや私の理會せんとするに、その爾のみそなはした事に何等の時の數がない。そして私は言うた、主よ、爾は眞實(まこと)で又眞理でましまして、之を錄しました此の爾の聖書は眞實でありまさぬか、さらば何故爾は私になんぢの見る事に何等時の數がないと言ひ給ふや、然るに爾の聖書は爾の毎日造りました事それを爾は善と觀たまうたと私に告げるのだ、そして私がそれを算へた時私は斯く何遍と見出したのであると。之に對して爾は私に答へ給ふのだ、爾は私の神でおはしまし、强い聲もつて私の聾(しい)た

る耳を破りつ叫び、爾の僕の内なる耳に告げたまふ、「やよ人よ、我の聖書の告げる事我は語るのだ、そしてそれが然も時間の中に言ふのである。けれ共時間は我の言に何の關係ない、で、なんぢが我の聖靈を通して見る所の事それを我は見る、恰も我の聖靈に由てなんぢらの語る所の事、それを我は言ふのである如くである。そしてその故にそれらの事を汝ら時間を以て見る時に、我は彼等を時間を以て見るのではない、恰も汝ら時間を以てそれらの事を語る時、我は彼等を時間を以て語るでない如くである」と。

第三十章

マニ教理と相容れざる所以

そして、主なる私の神よ、私は聽いて、そして爾の眞理よりその甘美の一滴を飲みたのだ、そして理解した。然るに或る人々あつて、彼等は爾の御仕業を嫌ひそして言ふのだ、「爾の造りましたその もの、多くは是れ必要に迫られたので、諸天の構造や星々の調和の如きそれである。また爾が彼等を造りましたのも、爾のものもつてでなくて、どこか他の源に出て造られたものよりで、それを爾が集めて組立て配合し給うたのだ、即ち爾の打克つた敵の中から復爾に抗して謀反せぬやう、天地の城壁を

築き上げて之を据ゑ固めた時であつたと。尙他のすべての魚や微小な生物(いきもの)や、すべて地にその根をもつてるものの如きは是れ爾が造りたのでもなく、また組立てたのでもなく、而も爾に抗敵する一の心があつて、爾に反對してそれが此等の下層界に此等のものを生みまた作り成したのであると云ふ。斯う云ふ彼等は狂つてゐるのだ、彼等は爾の聖靈に由て爾の御仕業を見ず、またその中に爾を認めまつらぬ故である。

第三十一章

眞理の内觀は只神の聖靈のみに由て與へらる

けれ共爾の御靈に由て此等の事を觀る人たちは爾が彼等の中にあつて見ますのである。故に彼等が此等の事を善なりと觀る時は、此等が善なりと爾が觀ますので、何事にあれ、爾のために悅ぶ事は彼等にあつて悅ぶのである。また爾の御靈に由て私共を悅ばせる事は、彼等が私共の中にいます爾をよろこばすのである。そは「人のことは已が中にある御靈のほかに知る者はない、今や（彼は言ふ）我らのうけし靈は世の靈にあらず、神より出づる靈である、これわれらに神の賜ひしものを知らんためである」。そして私共は警告されるのだ、まことと「神の事は只神の靈のほかに誰も知る人ない」と、

然らばそのわれらに神の賜ひしものとは何であるか、どうして私共は之を知らうか。すると答へは私にされるのだ、神の靈に由て私共の知る事さへ、それを神の靈のほか誰も知る人ないのである、だから神の靈に由て語る人々に「その語るは汝らでない」と正しくも言はれてあるのだ。その如く神の靈に由て知る人々にも「その知るは汝らでない」と言はれる正しいのだ。斯の如く亦神の靈に由て見る人々にも「その見るは汝らでない」と言はれて、亦何等當らないのである。それで神の靈に由て彼等が善なりと見るもの、それが何であれ、それは只神が善なりと見ますのである、だから前記の如き人のする如く、善であるものそれを悪だと思ふは誰かに取つて一つの事である、又或る人は善であることをそれを善と見る、(即ち爾の御手業のもので、その善なるが故に多くの人を悦ばせる、併し彼等が爾を措いて此等に愛着せんとして爾は悦び給はぬその如きものである)、之も一つで、更にまた或る人は或る事を善であると見るや、神は彼にあつてそれが善であると見るだらう、言ひ換へれば、彼の與へました聖靈に由るほか愛せられることない彼がその造りました物に由て愛せられるので、それも一つである。なぜなら「神の愛は神の我らに賜ひたる聖靈によりて我らの心に注げばなり」で、そしてそれに由りて如何なる程度にあれ、すべて善なる事之を私共見るのである、そは彼よりそれがあるので、彼は何かの程度をもつてありますのでない、彼はあるそのままにありますのであるからだ。

第三十二章

神の創造界の概要

主よ、爾に感謝し奉る、私共は天と地と、それが高いと低いとの形體の部分であれ、或は靈と形體との諸物であれ、之を私共見るのである。又私共は此の世界の大塊或は宇宙の構成の、それが組立てられる此等の部分を飾るためぞ、光が造られて闇より分たれるのを見るのである。私共はまた天の穹蒼の、それが靈的上方の水と下方の形體的水との間なる、世の元始な形體であれ、或はまた天と呼ばれる此の空間で、その中を天の鳥共が二つの水(一は彼等の上に負はれる蒸氣になつてるもの、一は晴れたる夜に於て露に結ばれて降下し、または地上に流れるあの重い水である)、その二つの水の間を飛ぶそのものであれ、私共は之を見るのである。私共はまた水が一つに集つて廣い海の面となつてるさまや、また乾ける土の全然水を離れて視目に入り得る形に整つてるさまや、及び草木その上に生ずるさまを見るのである。私共はまた光は上より輝きて、陽は晝を司り、月と星とは夜を慰めて、またすべて之に由て時間は測定されまた表示されるのを見るのである。私共はまた諸方に濕潤の元素が魚や獣や鳥を以て充盈されてるのを見るのである。なぜなら鳥の飛翔を支へる空氣の濃度が水の蒸發

をもつて更に厚くされるからである。私共はまた地の面が地的の諸物もつて飾られるのを見るのである。然り、その中にも爾の御像に象られた人は、その爾に象られた像なる理性と悟性との力を以て非情な諸物の上に置かれてある。そしてまた彼の心靈もつて、或は上に居て支配の權を取る力のものがある、或は下に居て服從せねばならぬ者あるその如く、また男のために形體もつては女が造られた、それがその理的な悟性の心能にては自然の同等をもつて居る、けれ共その形體の性にては、彼女はその夫の男性に同じ仕方で服從すべきで恰も行爲の慾念はそれを正しく爲すべき熟練を理性に由てよろこんで孕まねばならぬ如きである。そして此等の事を私共は見るのである、而も彼等は箇々に「善で」あり、また全體にまとめて「甚だ善で」ある。

第三十三章

神は同時に造りし一の物質より創世し給うたのだ

爾の御仕業爾を頌へまつれよや、私共が愛しまつらんためである。又私共爾を愛しまつらばや、爾の御仕業爾を頌へまつらんためである。然り、その爾の御仕業是れ時間の中より生じて、始めと終りとある、起りと沈みとある、伸びと縮みとある、又榮へと衰へとある、そしてその故に朝と夕との交

代あつて、半ば隱れてまた半ば顯はれてだ。そは彼等は爾よりでなく、爾によりて無より造られたのだ、また爾の造つたものならぬ何等の物質よりでなく、或はそれが以前にあつたのでない、只爾に依て同時に造られたとするその同時的被造の物質よりである、是れその無形な狀態に爾は何等の時間の中斷なく、之に定形を與へましたのであるからだ。そは天と地との物質は一つでなく、その形も別であるに拘はらない、爾は純然たる無の中より物質を造り、また無形であつた物質より世界を造りましたのだ、而も兩者同時で、形は物質に接し、その間に何等の中斷なかつたのである。

第三十四章

全創世に就ての寓喩の説明

爾がこやうに諸物を存在せしめ、或はこやうな排列もつて記錄せしめて、そして表示せんとし給ひしその靈的眞理の何であるか、私共は之を檢討した。そしてすべてのもの箇々に善である、また全體まとめて甚だ善であると私共は見たのだ。然り、爾の御言にあつて、卽ち天と地とで共にあり、敎會の頭と體とである爾の獨一なる生みの御子にあつて、すべての時間の以前なる、朝もない夕もない爾の宿命にあつてである。けれ共爾が時間の中にその宿命された諸物を御手に掛け始め給うた時、爾は

隱微であつた物事を啓示して、また私共の混沌を匡正し給はんためであつた。そは已れの罪が私共の上に懸つて、私共は闇の深みに沈淪してゐた、そして爾の善なる御靈は適當の機會に於て私共を援けんため私共の上を覆うたのであるからだ。また爾は不信な者を義しくさせて之を惡者より分ち給うた、また爾は爾の聖書の權威なる穹蒼を造りまして、爾に柔順なるべく上に置かれたものたちと、及び彼等に服從するため下に置かれたものたちとの間にあらしめた、また爾は不信者たちの社會を一つの謀反に集合させた、信ずる人々の熱心現はれて、彼等が天の寶を得んとし、地の寶を貧き者たちに分配するさへして、仁慈の仕業をもたらさんためであつた。そして此の後で爾は或る光を穹蒼に燃立たしめた「生命の言」を有する爾の聖なる者たちで、彼等は靈的の賜物に由り、高く措かれてすぐれた權威をもちつ輝いてゐるのである、そして此のあとで又不信の異邦人を入信させんため、爾は形體的の物質から諸種の祕蹟と、見え得る奇蹟と、及び爾の聖書の穹蒼に從ふ言の形を生ぜしめた、それらに依て信者たちが祝福され、また增加されんためであつた。次に又爾は强い節抑の力をもつて整頓された愛情に由り、信念正しい人たちの生ける靈魂を造り給うた、そしてその後で更に爾は爾のみに服從して人の權威には何等まねるを要せぬ心能を已れの御像に象つて更生させ、そして恰も女が男に對する如く、その理的な行爲を優れた悟性に服從させ給うた。尙又此の人生にて信者たちの完全進めるに必要の爾のすべての奉仕者たちに爾の御旨であつて彼等の此の世的なる使用のため、未來に好果

結ぶべき善き物をその同じ信者たちに由て與へるやうさせ給うた。卽ちすべての此等の事を私共は見るのである。そして彼等は甚だ善である、彼等を私共の中にあつて見ますからだ。これ爾は私共に爾の御靈を與へ給うて、それに由て私共は彼等を見、また彼等にあつて爾を愛しまつる故である。

第三十五章

平和を求める祈禱

主なる神よ、私共に平和を與へたまへ、爾はすべてのものを與へ給うたのだ。また休息の平和を、然り、復夕のない安息の日の平和を與へ給へ。そは此の萬物ととのつて排置せるさま皆甚だ善である。けれ共彼等はその徑路を終つて過去るのだ、彼等には朝と夕とあるからだ。

第三十六章

何故に七日目には夕なきや

されど七日目には夕なく、また日沒もない、爾は之をときには繼續するやう聖別し給うた故であ

る。これ爾は甚だ善であつて、爾の御仕業の後その七日目を休息し給うた、即ち爾の聖書の聲が豫めそれを私共に言明する所で、私共もまた爾が私共に與へましたのである故甚だ善なるその私共の仕事の終つた後、永遠なる生命の安息に入つて爾にあつて憩ひ得んためである。

第三十七章

如何なるさまで神は私共にあつて休息しますだらう

そはその時今私共にあつて働きますその如く、亦私共の中にあつて休息しますのだらう。そして斯くこれが私共に由る爾の御業である如く、それがまた私共に由る爾の休息であるだらう。けれ共、主よ、爾は永久に働きますのだ、また永久に休息し給ふのだ。爾は時間にあつて見給はない、又は時間にあつて動き給はない、時間にあつて休息もし給はない、而もなほ爾は時間の中に見られる物を造り給ふ、然り、時間そのものも又時間より生ずる休息も、皆爾によりてである。

第三十八章

人の休息と神の休息との差別

私共は故を以て爾の造りました此等のものを見る、彼等があるからだ、けれ共彼等は在る、爾が彼等を見給ふからだ。そして私共は外には彼等の在ることを見、また内には彼等の善であること見るのである。けれ共爾は彼等がまだ造らるべくあつたのを見給うたその所に、彼等が造られて、その時そこに彼等を見給うた。而も私共は私共の心が爾の御靈もつて孕んでからその後に善事をしようと動かされた、けれ共以前は私共爾を棄てまつりて惡事をしやうと動かされたのだ。けれ共唯一でありますが善なる神よ、爾はいつも善をするを止め給はなかつた、そして私共も亦、永遠ではない、而も爾の賜物より何かの善い仕業すべきである、そしてそれを仕了へた後爾の大なる淨めに入つて休息しようと望むのだ。然るに爾は何等の善を要せぬその善であつて、常に休息に於てあり給ふ、爾の休息は爾御自身でありますが故である。而も如何なる人か人に之を敎へ得やう、或は如何なる天の使か天の使にである、或は天の使か人にである、之を只爾に向て尋ねしめよ、爾にあつて求めしめよ、爾に敲いて求めしめよ、斯くして斯くしてそれが受け得られるだらう、斯くしてそれが見出し得られるだらう、斯くしてそれが見出し得られるだらう、また斯くしてそれが披かれるであるだらう。　アーメン

補註

一頁一行　懺悔錄の書中アウグスチヌスは無數に聖書の文句を引いて已れの文中に挿入し、之をその綾ともして織成してゐる。それで此等の聖句は皆その出典を一々に詳記して讀者の參考に資すべきであるが、如何にせんその數全卷を通じて餘りにも多く、こやうな册子にありては到底その餘白を許さないのが甚だ遺憾である、由て已むを得ずそれらがこれ引用聖句なることを知らせるため、之を「……」の中に入れて表はしてある、それを知つてほしい。只一言して置くがアウグスチヌスの用ゐた聖書と云ふは舊いラテンの譯であつて、今邦譯されてゐる聖書の原本とは少し違つてゐる所があるので、此の邦語譯を以て一々アウグスチヌスの引用聖句に當嵌めることできないのが澤山ある。それでさう云ふのは矢張「……」を以て表してある、譯者の自分の譯であることは已むを得ない。而もさう云ふ違ひが懺悔錄の本文に取つて肝腎の意味をなす事往々あるが、斯やうな時はそれは殊更に此の補註の中に說明することにする。但しこう云ふ場合はアウグスチヌスが最も好んで引用した詩篇に於て多く見られるので、新約聖書の引用語の如きは大概に邦譯そのまゝの聖句を以て當嵌めてあることは勿論である。

二、二　爾を知らずして爾ならぬ云々、之はアウグスチヌスが自らマニ教の迷に陷つて神ならぬ神を呼びたる時の事に思ひ當てたのであらう。

六、一　多言云々、これ徒らに溢美の言を弄して神を讃美せんとする者は却て空虛を語るのみ、初めより無言にして神を讃美することなきに同じ、禍ひなるかなの意を云ふ、亦アウグスチヌス的の警句である。

六、九（第五章）私を死なしめよ云々、これ出埃及記三十三章二十節と申命記三十一章十七節と及び詩篇百四十三篇七節などを思ひ合せて、神の聖顏を仰ぐもの死ぬべしと云はれたとて、アウグスチヌスは言ふのだ、私はむしろ此の體に死するとも聖顏を仰がばや、聖顏を仰いで靈に於て死することなからんを願ふのであると。

七、四　他人よりのもの云々、これ詩篇十八篇十四節を引用したのなれ共、邦譯とは違つてゐて、アウグスチヌスは此の他人よりを他人の誘惑より來る罪と解したのである。

一九、一〇　罪の赦免の祕蹟云々、これ洗禮の式を云ふ、而もその洗禮は當時初代教會の信仰にあつて非常に重んぜられ、一度之を受くれば絕對に復罪を犯すを得ず、若し斯して後罪を犯す如きあればその罪の刑罰は洗禮を受けざる以前の罪よりも一層重くあるべしと考へられたのだ、即ち此の信仰を茲に言ひ表はしてあるのだ。

二三、九　エネアスの漂浪譚、之は羅馬文學の最大詩人であつてヴエルジリウス（紀元前十九年に死す）の作にして羅馬最盛時の代表敍事詩である。譚の筋はギリシヤ詩人ホメロスの最大詩なるトロア戰爭譚（イリアッド）の後を承け、そのトロア城陷落の後、その勇將の一人なるエネアスが獨り諸方を漂浪して遂にイタリヤに來り後年世界の權力となつたその羅馬の先祖と呼ばれるに至つたと云ふを歌つたので、ラテン語文學の最も莊麗を極めたものである。

二三、一〇　デイドーの死を哭き云々、これは前記漂浪譚中の最も悲憐を極めた一挿話とされるもので、デイドーはツロ王女であつたが、その夫の殺されるや逃れてアフリカに來り、茲に上古のカルタゴを初めて建設したりと云はれる、然るにそのデイドー偶然エネアスのカルタゴに來るに會うて之に熱烈な戀情を寄せたりしも、之が叶はずしてエネアスはイタリアに去るに及び失望して自殺し、火に投じて了つたと云ふのである。

二四、一四　戰士に滿ちた木馬、之はトロアの堅城が遂にギリシヤ人のために攻落された時ギリシヤ方に智謀無類と云はれたオヂッセウス（別名ユリッシース）に由つて企まれた面白き詭計のことを云ふ。

二四、一四　トロアの炎上、之もその詭計のためトロアが遂に陷落されギリシヤ軍に由て燒き滅された時のその慘澹

たる光景を云ふ。

二四、一四　クレウサの幽靈、即ちトロア王プリアムの女でエネアスの妻である、トロア落城の混亂中その夫より離れて死し、それが幽靈となつてエネアスに現はれたと云ふ話を云ふ。

二七、三（第十六章）　ホメロスではゼウス（Zeus）の名を以て呼ばれ、ラテン語ではユピテル（Jupiter）の名を以て呼ばる、ホメロスの詩中にあつて「雷霆御する」「雲捲起す」「神盾打振る」等の天の最大威力を示す形容語を冠せらる、天の父、天の王、神々の主であるとされてある、けれ共之が亦最も女性を愛好して曾に天の女神たちに對するのみでない。人間界の婦人に對してもその亂倫悖行殆んど言語に絶する程である、併し之が却つて最も古代のギリシヤ的なる思想の現れであると云ふのだらう。そしてラテン文學は或る意味に於てギリシヤ文學の追隨であり、その模倣であつたから、ユピテル神亦その思想を以てラテン文學の中にも表はされてゐるのである。

二八、九　テレンシウス（紀元前一五九年に死す）は羅馬文學の喜劇作者にして最も著名なもの。そして此の話は少女ダナエがその父のため或る塔中に幽閉されてゐる所をユピテルが黄金の雨となつて之を訪れ、之に神話の英雄ペルセウスを生ませた事を云ふ。

三三、二　ユーノは天神ユピテルの嫡妻で天の后神である、然るにトロア戰爭の最中より此の女神はすべてトロア方に對し反感を抱いてゐた、ユピテルに對する嫉妬からで、そのユピテルが或る理由から一時トロア方をして希臘方に克たしめんとしたからである。そしてその反感がエネアス（トロアの王族の一人）にも繼はつて、その行先きまで妨害せんとしたのである。

三九、一（第三章）　マダウラはアウグスチヌスの故郷タガスタの南方二十哩ばかりの所にあり、著名な修辭學者アピュレイウスの出生地でもあり、學問の場所としてその頃樞要な一都邑であつたのだ。

四〇、一　タガスタも亦當時の所謂アフリカ（今のチュニス地方）での羅馬帝國の自由權を付與せられた三十都邑の一とも云はれたものである。

四六、九　カチリナは羅馬共和國政府の末期に出た有名な陰謀家で、己れと同じ境遇な破産的青年貴族たちを糾合し、そして政府を轉覆して最も恐怖すべき革命を起さんとしたのである、而もその陰謀を議場で曝露してその災害を未然に妨止するを得たは實にキケロの雄辯であつた。これ紀元前六二年の事で、羅馬の歴史にてカチリナは實に凶惡そのものの意味になつてゐたのである。

四四、一　カルタゴは當時の所謂アフリカ（今のチュニス地方）にあつて埃及のアレキサンドリアと並び稱せられ、地中海南岸に於ける最も殷賑繁盛を極めた羅馬帝國内の首要都市であつた。勿論基督教も既に盛んに行はれてゐたが、また舊時の異教なども依然としてその勢力を存有し、昔ながらの腐敗は盛んに行はれてゐたのである。

四、三（第四章）　キケロ（紀元前四一年に殺さる）は羅馬共和政府末期の大政治家で大雄辯家で、而もその文章に於てはラテン文學の最も完全な文體の模範である。キケロ亦哲學者としてその當時の最も傑出したものであつた。して茲にアウグスチヌスが初めて讀んだと云ふ「ホルテンシウス」とは、今は失はれてないが、その零碎した殘篇の他に尙（殊にアウグスチヌスの他の著書などに最も多く引用されてあつて）殘存してある部分などに據て見るに、なんでも此の名の友人に與へた書簡の形の論文で、これ此の友人が雄辯の效用を餘りにたゝへたのを駁し、その雄辯の研究よりも哲學の研究もつと貴きことを說いた上下二篇より成るものであつた如くである。

六七、一　神は形體備へて……尙正しき者とせらるゝや、此等の疑問是れマニ教が基督教を駁する論法であつてアウグスチヌスを遂に陷れたものであるが、殊に多妻殺人或はいけにえを獻げるのを道德的に非難する論點など實に明治初代の或る大漢學者の「辨妄論」とか云つた書物を想起せしむるも面白い。

七四、四（第十章）　マニ教の聖徒云々、これマニ教はその信徒を二種の階級に分ちて、一は擇ばれた聖徒の階級とし、一は普通の信徒の階級とした、前者の階級は此の教派の奥儀に入つたものにして一切の肉食妻帶を禁斷し全く世務を離れるを誓約したるもの、又後者は所謂平信徒である、それで茲に言はれた馬鹿氣た事も斯うである。その聖なる無花果はそれを摘取ること聖徒たる者には禁ぜられてるが、平信者には構はない、たとひそれが罪であるにしても、聖徒の食に供してその聖徒の祈禱に由り、その罪は清められるからである、そしてその無花果を聖徒が口にすれば、即ちその中から神の分子が解放されて出て來ると云ふのである。尙アウグスチヌスはマニ教に屬しても、單にその平信徒たるのみであつたのだ。

七四、一〇　若しそれが云々、これその食物を若しマニ教徒でないものに與へて食せしむなら、その食物の中に幽閉される光りの分子を尙更に深く暗の中に閉込めるのであると爲し、之を恐るべき罪としたのである、そして此の考へがマニ教には自然と人に施與するを忌避せしめる原因を爲したと云はれてゐる。

八一、八　私は此の一人の女云々、即ちこの婦人こそアウグスチヌスにその子のアデオタッスを生んだものである、そして斯の如きの同棲必ずしも當時の社會より排斥されるでなくて、隨分有勝の事であつたと見える。

八五、一〇　一人の賢き人……醫術に長じ云々、この人名をヴインヂチアヌスと呼ばれ、曾て皇帝ヴアレンチニアンに侍醫として重んぜられ、總督の地位を與へられた者なりと云はる。第七卷第六章にその名を擧げてある。

八五、四　ネブリヂウスはアウグスチヌスの親友の一人であつた、そして此の懺悔錄の中にその名を幾度も擧げられて、如何にアウグスチヌス會心の仲であつたかが窺はれるのである。

九〇、三　ピラデスとオレステス、これは希臘古代の傳說にある最も親密なる友誼の話で、互に命を棄てても他を救はんとしたのである、尙オレステスの父ミケネの大王アガメムノンにして、之に絡まる一家の不思議な運命は常に希臘の悲劇詩人たちの好題材となつたものである。

九四、八　又その他に……一つとさせたのであつた、此の一節の原文これ實に學問する青年たちが一緒に住んで相和樂するその甘美な狀を寫すものとして、殆ど他に無類なる名文とされ、古來稱揚されるものである。

一〇一、一（第十四章）　ヒエルスは傳記詳からず、第五世紀の末頃ギリシヤのアテンで評判だつた哲學者プルタルクスの父にその名の人あり、之ならんと言はる。

一〇七、一（第十六章）　アリストテレスの十範疇とは一は本體、二は量、三は質、四は關係、五は所在、六は時、七は位置、八は所有、九は行動、十は受動、此等を云ふ。併しアウグスチヌスは茲に之を說明するに二と三とを轉倒させて、量を實際例に當嵌て之に身長の語を用ゐてある。

一一八、一（第五章）　マニケウス如きに、これ原文ではむしろ誰とは知らぬがそのマニケウスに云々と譯すべきで、大いに輕侮の意が含まれてあり、そのマニケウスは即ち教祖のマニを言ふたのであらう。マニはその教義に就て澤山の著書ありたればそれを指すは勿論である。

一二七、六　聖キプリノスはカルタゴの大主教であつて、紀元二五八年に殉教す、アウグスチヌスもその學問と雄辯とを稱揚して居るのである。

一三一、三　アカデミ派、茲にアカデミ派と云ふは即ち新プラトン哲學の一派で、すべて人間には到底眞理の知識に達することできないと主張した懷疑哲學を云ふのである。

一三四、三（第十一章）　ヘルピヂウスの名全く他に見る所なし、如何なる人物であつたか知られてない。

一三六、一（第十三章）　ミノラ云々、その頃羅馬そのものは既に羅馬帝國の首都でなくして、ヂオクレシアヌス帝以來西部羅馬帝國の首都としてミラノは常に皇帝たちの居所となつてゐたのである。

一三六、三　シムマクスは羅馬の知事としてでなくて、此の者亦文法學者として名高かつた、それでその文法學者として此の試驗に當つたのである。

一三七、一　アムブロシウス即ち大アムブロシウスで、元來貴族の一人としてリギュリア（今のジェノア地方）の總督であつたが、强いて迎へられて宗教的ミラノの主教の職に就いたのである。その人物の崇高と剛毅な性格と及び信仰の卓越とに於て、實に基督教史上に最大の感化を傳へた偉人である。そして此の偉人が今や偶然アウグスチヌスのためその暗める迷妄を披く手引となつたのは亦不思議な神の攝理と云ふべきである。

一四二、三　而もその讀書するや云々、これアムブロシウスが書物を默讀したとてそれを殊更なる事ともしたのであるが、蓋し昔しはギリシヤ時代より羅馬時代の紀元四世紀頃にまで渉り、書物を讀むは音に散文ばかりでなく韵文をまでも音讀して而も時に共同で讀むのが習慣であつた事を示すのである。

一五四、一（第七章）　アリピウスはアウグスチヌスに最も親密な友人であつて、此の懺悔錄中幾度となく記述せられてその性行人物が詳くされて居るのである。アウグスチヌスと共に洗禮を受けて後アフリカに歸り、アウグスチヌスがまだヒッポの教會で主教とならず、單に長老であつた時に、既に故鄕タガスタ市で主教の職に就て居たのである。併し此の人自分には何等の著書も殘してゐない、只アウグスチヌスの著書の中にのみ傳へられてその名を知られて居るのみである。尙ネプリヂウスに就ては七十九頁十四行の註を參照せよ。

一五七、二（第八章）　劍客の仕合云々、此の頃また劍客の仕合は行はれたので、之が皇帝ホノリウスの勅令に由り全然禁止されて、基督教的道德觀念が遂に此の殘忍な異教的羅馬の習慣の尙殘つてゐたものに打克つたのは、實に紀元四〇四年で、即ちアウグスチヌスの此の懺悔錄が世に出た多分四年後の事であつたのだ。

一五八、一　圓形闘技場、之は即ち今でもコロッセウムと稱へられ、その遺跡を伊太利の首都ローマに留めて居る、皇帝ヴェスパシアヌスの建築したと云ふそのものであるだらう、觀客八萬七千人を容るるに足りたと云ふ實に巨大なものである。

一六一、二　爾の教會の云々、これはアリピウスが後年タガスタの主教となりその尊い聖職を行つた時のことを云

ふ。

一七〇、五　結婚の法定年齡とは羅馬の法律にて十二歲に達したるを云ふ。

一七三、六　エピキュルスは謂ゆる飲めよ食へよ明日は死なん主義の哲學者として古來有名である。アウグスチヌスも之を狂的な哲學者で、眞智でなく只虛妄を愛したものとして書いてある、或は哲學者たちの中には之を肉慾の泥中にまろびこげてる豚であると呼んだものさへあつた。

一九二、三（第九章）　最大傲慢の型云々、即ち第八卷第二章に說明されるそのヴイクトリヌスを云ふので、アウグスチヌスは凡て眞の神を知らざる此の世的の學者を皆その己れの智慧に驕る傲慢者と呼んだのだ、それでヴイクトリヌスは當時最大の學者であつた、それ丈亦彼を最大の傲慢の型と呼んだのである。

一九二、三（同上）　プラトン派の哲學の或る書物とは、即ち新プラトン派のプローチヌスの有名な哲學書を云ふと勿論である。

一九四、一四　彼等が朽つることなき云々、之は新プラトン派の學生たちが空しく偶像崇拜に流れたるを指摘したのであるが、元來プローチヌスの哲學には斯樣な元素をその中に含めてゐないのだ、けれ共その後に出た此派の人々の中には、彼等が基督教に反對なるより起り、殊に基督教嫌ひのユリアヌス皇帝が故らに古代希臘の文藝及宗教を回復して之をして基督教に當らしめんとしたるに奬勵され、その希臘の宗教儀式までが彼等の哲學に混入し、次第に偶像崇拜に墮して了つたのだと云はれてある。

四、一五　埃及の食は茲にエサウがその長子の權を失つた羹物を云ふのでその羹の中に混じた扁豆を指す、扁豆は埃及の產なればである、即ち埃及は偶像國であつたからで、埃及の食即ち偶像崇拜を云ふ。

九三、一　家嫡の民たちはヤコブの子孫、即ちモーセに連れられて埃及を脫出したイスラヘルの民を云ふ、又その次なる「兄が弟に仕ふる云々」の意、これ茲では兄は猶太人で弟は基督教徒を云ふのである、ヤコブがエサウ

を除えた如く、基督教徒がまた猶太人に取つて代つて神の御召に與かるのだと云ふ意。

一九二、五　埃及より持行かしめたその黄金とは神に奉事する至聖な所の器はイスラエル人が埃及より掠奪し來りた金や銀より造られたのであるとの意より出でて、茲に神に奉仕することを云ふ。

二〇七、四及び六　アポリナリウスはラオヂキアの主教であつたがその異端説の故に三八一年コンスタチノポリスの宗教會議で聖職を褫奪さる。又フォチヌスはシルミウムの主教であつたが、キリストは童貞より生れた單なる人間で、而も之が特別なる神の感化を受けたのだと爲し、その神性を否定したので、これ亦三五一年シルミウムの會議で聖職を免ぜられた。

二一三、六　シムプリチアヌスは三九七年聖アムブロシウスの後を襲いでミラノの主教となつた人、アムブロシウスもアウグスチヌスも共にその信仰の父ともなして尊敬したのに見て、如何に彼がかやうな偉大な人たちにもその感化を與ふる力を有さしかを知るのである。

二一五、三　ヴイクトリヌス（一八〇、三の註を參照せよ）は當時の碩儒で、その飜譯したと云はれるプラトン派哲學の書は今は傳はらないが、彼が信者になつてから著述した神學書など殘つてゐて、之がその方面にもアウグスチヌスに及ぼした感化が大いに見えるのである。

二一六、五　あのネプツウヌス云々、之はエネアス漂流譚詩中の語であつて、ネプツウヌスは大なる海神、ヴエヌスは美の女神、ミネルヴアは勇武で而も智慧の女神、即ち此等及びその他の天の諸神に對し地の怪神たち戰爭したと云ふ神話を云ふので、その怪神の一なるアヌビスを加へ、茲に天の諸神は云ふに及ばず、地の怪神共に至るまで偶像的神と云ふ神を皆といふのである。

二一六、一〇　洗禮の水（フオンス）の赤兒とは初めて信仰に入る者を云ふ。

二一三、三（第五章）　皇帝ユリアヌス（三六一年—三六三年）は反敎者と呼ばれ、隨分英邁な君主であつたのだ

が、妙な事情からその叔父であつたコンスタンチヌス大帝このかた羅馬帝國に公認せられた基督教に反對したのだ、併しユリアヌスは斯く基督教に反對しても決して暴力を以て迫害するやうな事をせず、只古代希臘の思想宗教その他の教化を復興させて之を以て基督教に當らせんとした、そこで帝はすべて基督教徒の特權自由を抑へて、ここにもある如く之に學藝や雄辯をさへ教ゆることを禁じたのだ、その他基督教徒は帝國の官吏になることさへ禁じられて、全く閉塞されて了はんとしたが、幸に帝の在位は短く、その計畫全然水泡に歸して了つたのである。

二一七、一三　アントニウス、即ち聖アントニウスは紀元二五一年に生れて、二十年の長い間を埃及の寂寞たる沙漠の中にあつて隱遁生活に送りたが、後に至りてはその弟子たちを集めて團體を作り、即ちそれが後年の修道院制度の濫觴となつたのである。尚ほアントニウスの傳記は有名なアレキサンドリアの大主教アタナシウスに由てその當時に書かれたものであると云ふ。

二一八、九　トルエリス或は今の佛國のトリエーは羅馬帝國時代には實にアルプスを踰えた地方の首都としてその繁華ローマの首都に亞ぐのであつたと云はれてる、尚そこにはローマも羨むほどなる闘技場があつたとの事である。

二一三、二　彼等の小集會の語、この中に原語には輕侮の意味の含まれあるを知るべし。

二一四、四　葡萄收穫祝ひの公休期、之は夏の終りなる八月二十二日より十月十七日に至る約二ケ月の休期であるが、丁度此の頃テオドシウス及びヴアレチニアヌス二世兩帝共同治世の時であつて初めて法令を以て公定されたもの、法廷及び學校等に適用されんためであつたとの事である。

二一五、一（第三章）　ヴエレクンヂスは第八卷第六章を參考せよ。

二一四、一（第四章小見出し）　カツシキアクムの別莊地とは今もその所だと推定される地名あり、アツペンニー山

脈とアルプス山脈と合する所にあり、山色水光明媚を極むる所なりと云はる。そしてそこにアウグスチヌスと共に退いて同居したる者たちは、母のモニカと兄弟ナヴィギウス、自分の子のアデオダツス、及び二人の從兄弟のラスチヂアヌスとラチクスとで、又友人アリピウスとその他弟子なるリツエンチウスとトリゲチウスと合し、已れと共に都合九人であつた。

二六一、三（第六章）イタリヤの寒土云々、冬の凍れる土を裸足で歩いて行つたと云ふは、自ら已れの肉體を苦めて靈の淨めを求めた後世の所謂苦行巡禮者などの先驅をなした習慣を、既に此の當時に於て見るを得るのである。

二六二、三　アリアン派は既に異端として三二五年のケニア宗教會議で禁止されたに拘はらず、尙ほその勢力なかなかに衰へず、殊に羅馬帝國の東部地方に於ては常に正統派に對し幾多の歷史を傳へて相拮抗したものである、して此處に記述せられてあることも、これ亦アリアン派が西部教會にまで侵入せんとした動機に出たので、皇后ユスチナを惑はし、その權力を借りてミラノの市に已れの教會を作らんとしたのであつた、そこで之にアムブロシウスが反對したるより、即ちその迫害となつてこの騷動を起したのであつた。

二六三、二　二人の殉教者云々、此の話はアムブロシウス自身も或る書簡の中に述べてある事なのである、彼は亦次の盲目者云々の事に就ても書いてある、その盲目者は名をセヴエルスと呼ばれ、失明前は肉屋であつて、多くの人々にも知られて居たものであつたと。

二六三、一（小見出し）　アフリカに歸らんとした、是れ一には母のモニカが故郷に歸りてその夫の傍に葬られんと欲した動機にも出でたのだらう、然るにモニカは突然途中のオスチアで死んでからは、アウグスチヌスは直ちにアフリカには歸らず、暫くそのまま約一年ほど羅馬の市に滯在してゐて、そこで二三の著書をさへしたのであつた。してそのモニカの死は種々な材料より推定しなんでも紀元二八七年の十一月頃であつたと考へられるのである。

二六三、一　ユウオヂウスは後にウヂラの主教となつたもの、そのアウグスチヌスとの往復の書簡など今尙殘つてゐる。

二六九、二　一の契約云々は奴隷とされた法的契約のことを云ふ。

二七三、三（第十一章）　私と兄弟とはその名をナヴイギウスと云ひ、アウグスチヌスを慕つて彼も亦ミラノへ來り共に同居してゐたものであらう。

二七九、二　まこと遺骸……いけにえ捧げられるその時、これ埋葬に臨んでの聖禮拜領即ち聖餐の儀式を擧げるを云ふ、それが此の羅馬地方だけの習慣であつたと見える。

二八〇、八　神よ云々、これアムブロシウスの晩の讃美の一節である。

二八九、七　私がそれを爲して……收得るだらう、之に就て詩人ダンテの言がある、「一體終辭學者は人が自分の事を語るを極めて必要な場合の外は禁ずるのだ、けれ共他人を敎ゆるためには之も爲し得るのである、して之がアウグスチヌスを動かしてその懺悔錄を書かしめた所以である。そは彼は惡より善に、又善より更に善に進み、そしてそれよりなほ最善に進まんとする彼の生涯の進歩に由て他人に模範と敎訓とを與へんとしたからで、斯くするでなければ確かな證明を擧げてそれをすることできない故である」と。

二九二、九　アナクシメネスはギリシヤの哲學者で、彼に就て言はれてある、「彼はすべて存在するものの原始を空氣に歸せしめて、それより萬物生じ、そして萬物それに還つて消えて了ふのだと、即ち彼の言に從へば空氣と靈魂とは異語同義であるのだ」と。

三四二、六　トビアス（トビット）云々、これ舊約聖書外傳に此の名の書あり、その中なる話にて、トビットは明を失つて之を忍ぶにヨブ的の信仰を以てし、却て內的に天の光に照されて、そしてその子に誨ゆるに愛の道に歩むことを以てしたと云ふのである。又イサクの話は創世記二十七章を見よ、祝福して彼等を知るを許されたと

は、彼等各々にその適切なる祝福を與ふるを得たと云ふこと。ヤコブの事に就ては創世記四十九章を見よ。

三六一、五　私は自分の罪云々、この言に依て見るに、アウグスチヌスの初志は蓋しその當時の幾多の名高き前例に從ひ、やはり靜かに曠野に退いて己れの靈のため聖なる隱遁生活を送らんとするにあつたと思はれる。けれ共之が即ち彼の一層に崇高なる所であつて、彼はキリストの模範に從つて、その宗教的奉仕を他人のためにささげんと決心し、遂に普通の聖職に就いて、それが彼をしてヒッポの教會にその生涯を委ねしむるに至つたのである。

三六三、三（第二章）　時間の滴り、これは當時水時計を使用した事に當篏めて云ふので、單に時計と云ふに同じ。

三九四、一〇　隨分一人の祈り云々、これは舊約聖書のヨシュア記十章十二―十五節を見よ。

四〇〇、六　Deus Creator Omnium これは第九卷第十二章に引用されたアムブロシウスの讃美歌のその第一行である。

四〇九、三（第二章）　天の天云々、之は詩篇百十五篇十六節の語であるがアウグスチヌスの使用したラテン譯の聖書に據つたので、元來は所謂七十人譯の希臘語からである。併し原文ヘブル語では今日の邦譯などになつてる如く「天はエホバの天なり」とあり、之が或は正譯なりと思はれるのである。けれ共アウグスチヌスは「天の天云々」のそのラテン譯をそのまゝに取つて、その「天の天」を知覺的以上の天であり、即ち神に亞ぐ最高なる天の睿智者たちを云ふのであると解し、それより後段の彼の超越的なる意見を成立させて居るのである、讀者の豫め留意し置くを願ふのである。

四一〇、一　地は見ることできず云々、之も今の邦譯では「地は定形なくしてむなしく」とあり、その「むなしく」はアウグスチヌスのラテン語では invisibilis であるから、茲に「見ることできず」又は「見えざる」などの譯語を用ゆることにしたのである。

四一一、二　「地と深み」の語、これは邦譯聖書の中にはなくて譯者の自分の語である、聖書は淵（わだ）の語を用ひてあるのみなるが、譯者は行文の都合上この「わだ」と「深み」とを所々に混用して同意語としてある、之を知られたい。

四三五、一三　「神の御家」、これ詩篇二十七篇四節の語で之をアウグスチヌスは最高天なる睿智者たちの世を指すとなしたのである。

四三八、三　ケルビムの名は創世記三章二十四節に出で、セラヒムはイサヤ書六章二節に出で、「位や支配云々」はコロサイ書一章十六節に出で、皆天の使たちを呼ぶのである。

四四〇、一（第十二章）　アウグスチヌスの聖書の寓喩的解釋は即ち正式的に此の章より始まるので天は靈的の人を云ひ、地は肉的の人を云ふので、以下その意を以て讀むべきである。

四四〇、九　「ヨルダンの土地」とは謙下の心と自我輕侮の念とを象徴させたので、即ち之より神に歸ること始まるのであるからだ、また「爾にひとしき山」とはキリストを云ふ、ラテン譯では「小さき山」の語なれ共アウグスチヌスは之を謙遜なるキリストを象徴すると解し斯く言換へたのである。（詩篇四二、六）

四四一、二（第十三章）　「淵は淵に呼びて」（詩篇四二、七）は茲に人々互に相呼んでの意に解せられるのである、又「爾の瀧つ瀨の聲」とは天より降る聖靈の御力を云ふのである。

四四四、一（第十五章）　イザヤ三十四章四節より出でて、穹蒼は聖書を云ふのだと寓喩的に解したのである、倘に詩篇百四篇二節を見よ、邦譯には「幕を張れりとあれど、幕の原語 Pellis は亦「皮」の義あり、アウグスチヌスは此の意にて用ゐたのである。

四七六、一（第十七章）「海の苦味」は人間の情慾の波打つて之より生ずる罪の悲慘を云ふ。又「乾ける地」は神を渴し求める靈魂たちを云ひ、教會を象徴すると解せらる。

四八四、三（第二十章）「生命をもつ動くもの」は、アウグスチヌスは之を解釋して、此の世（即ち海の水）の誘惑より人を助けて脱出せしむる表徴や祕蹟（或は奇蹟）等を意味するとなし、又「飛ぶ鳥」は神の道を宣べ傳ふる使たち即ち傳道者たちとしたのである。即ち此等は世の人々の理會に純きより餘儀なく生ぜしめられたのであるからである。

四八四、六（同上）「大なる餘」は豫言者のヨナの話より出でて基督の復活を象徴するのである。

四八六、三「卓上の魚」は即ちすべての信者の靈的生命の養ひなる聖體拜領即ち聖餐の式を云ふ。

その他此の全卷に渉る寓喩の意味は一々説明するに餘りに煩に過ぎる、而も讀者は本文に就て大概以上の註だけをもつて理會し得るととと信ずるのである。

昭和二十一年九月二日第一刷印刷
昭和二十一年九月八日第一刷發行

【アウグスチヌス懺悔錄】

定價 ㊒（税込）金三十圓

譯者　内村達三郎
東京都荏原區西中延五ノ二四〇

發行者　野口兵藏
東京都日本橋區大傳馬町三ノ四

印刷者　大同印刷株式會社（東京三二）井關好彦
東京都神田區錦町三ノ一

發行所　春秋社　松柏館
東京都日本橋區大傳馬町三ノ四
振替東京二四八六一番
電話茅場町〇三七七番
會員番號A一一九〇六二

配給元　日本出版配給統制株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

132.17
A96
2

終